

研究紀要

第46号

2021

国際学院埼玉短期大学

国際学院埼玉短期大学研究紀要

第46号 令和3年3月

目 次

資料論文

- 音楽を伴う表現活動に関する保育現場372か所への調査
— 幼稚園39園、保育所61園、幼保連携型認定こども園16園の回答
によるピアノの演奏に関する課題の検討—
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・越智光輝・・・・・・1
- 教育実習を通じた学生の学び
— 幼稚園における新型コロナウイルス感染症防止対策について—
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐野ゆかり・・・・・・16
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての一考察
— 「保育原理」における質問紙調査から—
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本多 舞・・・・・・28
- 子ども理解を深める授業実践
・・・ドキュメンテーションからの子ども理解・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・牧野和江・・・・・・37
- 身体表現活動の実践的研究
— 五峯祭の活動に着目した事例—
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・古木竜太・・・・・・49

報 告

- コロナ禍における児童の学校給食に関する意識調査
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・馬場和久、大 雅世、古俣智江・・・・・・65
- コロナ禍での短期大学栄養士養成課程における校外実習に関する報告
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・古俣智江、馬場和久・・・・・・76
- 調理師養成課程における校外実習実施のための調査について・・・・・・田中辰也・・・・・・86

解 説

- 「疾患モデル動物の役割と貢献」— CCIラットを例に—
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田中政巳・・・・・・95

- 研究業績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

音楽を伴う表現活動に関する保育現場 372 か所への調査

— 幼稚園 39 園、保育所 61 園、幼保連携型認定こども園 16 園の回答による
ピアノの演奏に関する課題の検討 —

To 372 Childcare Facilities on Music Expression Activities: Examination of Issues Related to Playing the Piano by the answer from 39 Kindergartens, 61 Nursery Centers, and 16 Certified Children's Schools Survey

越智光輝

国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

それぞれの月毎及び通年で演奏される機会の多いピアノ曲に関する調査について、本学の学生を実習で受け入れている保育現場に依頼したところ、幼稚園 39 園、保育所 61 園、幼保連携型認定こども園(以後、認定こども園)16 園から回答を得た。記入されたピアノ曲の合計曲数は幼稚園 389 曲、保育所 488 曲、認定こども園 225 曲であった。本学のピアノに関連する科目である「保育のピアノ基礎Ⅰ」「保育のピアノ基礎Ⅱ」「保育のピアノ応用Ⅰ」「保育のピアノ応用Ⅱ」で取り組んでいる課題(「子どもの歌」のピアノ伴奏による弾き歌い)と、保育現場で演奏される機会の多いピアノ曲との関係について分析を行った結果、今後、本学のピアノに関連する科目において、新たに取り組んでいくべき課題曲について明らかとなった。

キーワード:幼稚園、保育所、認定こども園、音楽表現、ピアノ

1. はじめに

幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園(以後、認定こども園)といった保育の現場(以後、保育現場)における音楽を伴う表現活動(以後、音楽活動)について、本学では「保育のピアノ基礎Ⅰ」「保育のピアノ基礎Ⅱ」「保育のピアノ応用Ⅰ」「保育のピアノ応用Ⅱ」「表現」「音楽表現領域指導法」「オペレッタ」等の授業を通じて学生は学んでいる¹⁾。そして、「保育のピアノ基礎Ⅰ」「保育のピアノ基礎Ⅱ」「保育のピアノ応用Ⅰ」「保育のピアノ応用Ⅱ」(以後、ピアノ関連科目)の授業において、学生はバイエル、ブルグミュラー等のピアノ曲と、ピアノ伴奏による「子どもの歌」の弾き歌いに取り組んでいる。

保育現場での音楽活動の多くはピアノを用いて行われることが一般的であるが、本学の学生の多くはピアノ未経験者及び初心者で占められており²⁾、他の養成校についても同様との報告がある³⁾。そこで、ピアノ経験が豊かではない学生の、ピアノ演奏を含めた音楽活動全般への不安を軽減させるための取り組みの 1 つとして、実践を通じた学びの機会である実習に着目し、幼稚園教諭免許状取得のために必要な幼稚園における実習において、どのようなピアノ演奏を伴った音楽活動が行われているか調査を行った⁴⁾。そして、学生のピアノ経験や実習におけるピアノ演奏等の調査を経て、ピアノ関連科目におけるピアノ伴奏による「子どもの歌」の弾き歌いの課題曲(以後、課題曲)を定めた(表 1)⁵⁾⁶⁾。

本学では、入学後に履修するピアノ関連科目での課題曲の検討だけでなく、入学予定者が入学後の学びに円滑に移行できることを目的に実施されている「入学前教育」や「入学前ピアノ教育・

個人レッスン」における指導内容や方法の改善にも取り組んでおり、ピアノ未経験者や初心者が学びやすい環境の構成に努めている⁷⁸⁾。一方、それらの取り組みの多くはピアノ未経験者や初心者に対するものであり、今後は、ピアノ経験者やピアノ関連科目に対して高い学修意欲を持つ学生にとっての、授業内容のさらなる充実を図ることが必要だと考えられる。そこで、本研究では、本学の学生を実習で受け入れている幼稚園だけでなく、保育所、認定こども園も含めた保育現場全般における、ピアノで演奏される機会の多い曲について、明らかにすることを目的とした。さらに、実習の期間だけに限定するのではなく、年間を通じたそれらの曲についての調査を行うことで、就職後も視野に入れた保育現場での実践に即した授業内容の改善、特に課題曲についての検討を行うことが可能になると考えられる。

学生が保育現場でピアノによって演奏される曲の全てを学ぶことは非常に困難だとしても⁹⁾、重要度の高い(演奏される機会の多い)課題曲を1曲でも多く学ぶことによって、実際の保育現場で活用できる。ピアノ演奏に関する多くの知識とスキルを学生が修得することができれば、音楽活動を通して、子どもたちにより豊かな経験ができることが期待できる。

表1 ピアノ関連科目・課題曲

1	おはようのうた	17	めだかの学校
2	おはよう	18	うれしいひなまつり
3	おかえりのうた	19	こいのぼり
4	さよならのうた	20	犬のおまわりさん
5	おべんとう	21	あめふりくまのこ
6	ぶんぶんぶん	22	たなばたさま
7	ちょうちょう	23	ありさんのおはなし
8	チューリップ	24	おつかいありさん
9	かたつむり	25	まっかな秋
10	とんぼのめがね	26	ジングルベル
11	ぞうさん	27	あわてんぼうのサンタクロース
12	どんぐりころころ	28	やぎさんゆうびん
13	ゆき	29	思い出のアルバム
14	お正月	30	ふしぎなポケット
15	手をたたきましょう	31	山の音楽家
16	むすんでひらいて	32	森のくまさん

2. 方法

本学の学生を実習で受け入れている保育現場(幼稚園 134 園、保育所 202 園、認定こども園 36

園)にピアノ曲に関する調査用紙を配布し、その回答を依頼した。調査用紙には、園名、それぞれの月(4月～3月)及び通年で演奏される機会の多いピアノ曲(上位3曲まで)の曲名を記入する欄を設けた。

2019年9月末より調査用紙の送付を開始し、回答期限を2019年10月19日(土)とした。回答のあった幼稚園39園、保育所61園、認定こども園16園について記入欄に記載されている曲目について、分析を行った。

3. 結果

3-1 保育現場で演奏される機会の多いピアノ曲

(1) 幼稚園

39園の幼稚園から回答があり、記入されたピアノ曲の合計曲数は389曲であった。ピアノ関連科目において学生が2年間で修得可能と推測される課題曲の最大曲数(約50曲)を鑑み、幼稚園全体の2割を超える園で記入のあった曲名について、記入した園数とその割合を表2に示した。表内における色付けされた18曲は、学生が取り組んでいる課題曲である。なお、表1の21「あめふりくまのこ」と表2の27位「雨ふりくまのこ」のように漢字、平仮名、片仮名の違いはあるが読み方が一致するものについては、課題曲と同一の曲と見なし色付けを行ったが、表1の22「たなばたさま」と表2の「たなばた」のように、同一曲とは思われるものの、読み方が一致しない曲については、色付けは行わなかった。

表2 幼稚園で演奏される機会の多いピアノ曲

園数	割合 (n=39)	曲名	園数	割合 (n=39)	曲名
31	79%	こいのぼり	13	33%	ことりのうた
31	79%	どんぐりころころ	13	33%	さんぽ
29	74%	豆まき	13	33%	山の音楽家
28	72%	お正月	12	31%	雨ふりくまのこ
27	69%	あわてんぼうのサンタクロース	12	31%	アイスクリーム
27	69%	ゆき	12	31%	こんこんくしゃん
26	67%	とんぼのめがね	12	31%	赤鼻のトナカイ
26	67%	うみ	11	28%	おつかいありさん
22	56%	やきいもグーチーパー	11	28%	たなばた
22	56%	うれしいひなまつり	11	28%	ヤッホッホ夏休み
22	56%	思い出のアルバム	11	28%	うんどうかい
21	54%	おかあさん	11	28%	まっかな秋
20	51%	ゆきのペンキやさん	11	28%	北風小僧のかんたろう
19	49%	バスごっこ	10	26%	かえるのうた
19	49%	まつぼっくり	10	26%	すてきなパパ
18	46%	かたつむり	10	26%	ジングルベル
18	46%	こぎつね	9	23%	手をたたきましよう
17	44%	チューリップ	9	23%	うんどうかいのうた
17	44%	とけいのうた	9	23%	虫のこえ
17	44%	たなばたさま	9	23%	ひなまつり
17	44%	おばけなんてないさ	8	21%	むすんでひらいて
15	38%	せんせいとおともだち	8	21%	おかえりのうた
15	38%	大きな栗の木の下で	8	21%	カレンダーマーチ
15	38%	たき火	8	21%	あめふりくまのこ
14	36%	園歌	8	21%	南の島のハメハメハ大王
14	36%	きのこ	8	21%	もみじ

(2) 保育所

61園の保育所から回答があり、記入されたピアノ曲の合計曲数は488曲であった。幼稚園と同様に、保育所全体の2割を超える園で記入のあった曲名について、記入した園数とその割合を表3に示した。幼稚園と同様に、課題曲として、学生が取り組んでいる18曲について色付けを行った。

表3 保育所で演奏される機会の多いピアノ曲

園数	割合 (n=61)	曲名	園数	割合 (n=61)	曲名
57	93%	こいのぼり	23	38%	こぎつね
54	89%	豆まき	22	36%	南の島のハメハメハ大王
50	82%	どんぐりころころ	20	33%	せんせいとおともだち
47	77%	まつぼっくり	20	33%	かえるのうた
47	77%	やきいもグーチーパー	18	30%	春がきた
46	75%	あわてんぼうのサンタクロース	18	30%	しゃぼん玉
45	74%	とんぼのめがね	18	30%	赤鼻のトナカイ
44	72%	うれしいひなまつり	18	30%	鬼のパンツ
39	64%	おばけなんてないさ	17	28%	手をたたきましょう
39	64%	お正月	17	28%	アイスクリーム
39	64%	ゆき	17	28%	うんどうかい
38	62%	うみ	17	28%	虫のこえ
35	57%	かたつむり	17	28%	たき火
35	57%	ゆきのペンキやさん	16	26%	ちょうちょ
34	56%	さんぽ	16	26%	あめふりくまのこ
34	56%	こんこんくしゃん	15	25%	きらきら星
33	54%	チューリップ	14	23%	はるがきた
33	54%	きのこ	14	23%	たなばたさま
31	51%	思い出のアルバム	13	21%	アイアイ
30	49%	山の音楽家	13	21%	あまだれぼったん
29	48%	バスごっこ	13	21%	みずあそび
28	46%	大きな栗の木の下で	12	20%	おかあさん
27	44%	こたりのうた	12	20%	おつかいありさん
25	41%	たなばた	12	20%	ガンバリマンのうた
24	39%	とけいのうた			
24	39%	ジングルベル			

(3) 認定こども園

16園の認定こども園から回答があり、記入されたピアノ曲の合計曲数は225曲であった。幼稚園及び保育所と同様に、認定こども園全体の2割を超える園で記入のあった曲名について、記入した園数とその割合を表4に示した。幼稚園及び保育所と同様に、課題曲として、学生が取り組んでいる19曲について色付けを行った。

表4 認定こども園で演奏される機会の多いピアノ曲

園数	割合 (n=16)	曲名	園数	割合 (n=16)	曲名
14	88%	こいのぼり	6	38%	あまだればったん
14	88%	とんぼのめがね	6	38%	たなばた
14	88%	あわてんぼうのサンタクロース	6	38%	アイスクリーム
13	81%	山の音楽家	6	38%	こぎつね
12	75%	どんぐりころころ	6	38%	ジングルベル
12	75%	ゆき	6	38%	こんこんくしゃん
12	75%	豆まき	5	31%	手をたたきましょう
11	69%	うみ	5	31%	さんぽ
11	69%	まつぼっくり	5	31%	はるがきた
10	63%	ことりのうた	5	31%	大きな栗の木の下で
10	63%	きのこ	5	31%	とけいのうた
10	63%	うれしいひなまつり	5	31%	アイアイ
9	56%	やきいもグーチーパー	5	31%	たなばたさま
9	56%	お正月	5	31%	うんどうかい
8	50%	せんせいとおともだち	5	31%	まっかな秋
8	50%	かたつむり	5	31%	もみじ
8	50%	あめふりくまのこ	5	31%	たき火
8	50%	おばけなんてないさ	5	31%	北風小僧のかんたろう
8	50%	思い出のアルバム	5	31%	雪のペンキやさん
7	44%	カレンダーマーチ	4	25%	かえるのうた
7	44%	しゃぼん玉	4	25%	大きな古時計
7	44%	ゆきのペンキやさん	4	25%	みずあそび
7	44%	赤鼻のトナカイ	4	25%	やぎさんゆうびん
6	38%	チューリップ	4	25%	もちつき
6	38%	おかあさん	4	25%	うれしいひな祭り
6	38%	バスごっこ	4	25%	おはようのうた
6	38%	おかえりのうた			

3-2 月毎での演奏機会の多いピアノ曲

回答した園が多い傾向にあるピアノ曲の上位5曲について、4月～6月(表5)、7月～9月(表6)、10月～12月(表7)、1月～3月(表8)、通年(表9)を示した。「3-1 保育現場で演奏される機会の多いピアノ曲」と同様に、学生が取り組んでいる課題曲について色付けを行った。

表5 4月～6月に演奏される機会の多い傾向にあるピアノ曲

4月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
14	チューリップ	31	チューリップ	8	せんせいとおともだち
14	せんせいとおともだち	20	せんせいとおともだち	5	チューリップ
7	ちゅうりっぷ	16	ちょうちょ	4	ことりのうた
7	こいのぼり	11	ちゅうりっぷ	3	ちゅうりっぷ
6	ちょうちょ	10	こいのぼり	3	おはながわらった
				3	手をたたきましよう
				3	さんぽ
5月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
24	こいのぼり	47	こいのぼり	12	こいのぼり
18	おかあさん	22	ことりのうた	6	ことりのうた
10	ことりのうた	13	バスごっこ	6	おかあさん
8	バスごっこ	11	おかあさん	3	バスごっこ
7	おつかいありさん	9	おつかいありさん	2	めだかのがっこう
				2	ありさんのおはなし
				2	えんそく
				2	ピクニック
6月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
18	かたつむり	34	かたつむり	8	あめふりくまのこ
16	とけいのうた	21	とけいのうた	7	かたつむり
12	雨ふりくまのこ	18	かえるのうた	6	あまだれぼったん
10	すてきなパパ	16	あめふりくまのこ	4	とけいのうた
9	かえるのうた	12	あまだれぼったん	4	大きな古時計

表6 7月～9月に演奏される機会の多い傾向にあるピアノ曲

7月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
17	たなばたさま	22	たなばた	6	たなばた
13	うみ	15	きらきら星	6	うみ
10	たなばた	14	たなばたさま	5	しゃぼん玉
10	おばけなんてないさ	14	うみ	5	アイスクリーム
8	ヤッホッホ夏休み	10	しゃぼん玉	4	たなばたさま
				4	おばけなんてないさ
8月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
13	うみ	30	おばけなんてないさ	5	うみ
7	南の島のハメハメハ大王	24	うみ	4	おばけなんてないさ
6	おばけなんてないさ	16	南の島のハメハメハ大王	2	アイアイ
5	しゃぼん玉	11	アイアイ	2	みずあそび
5	アイスクリーム	9	アイスクリーム	2	とんでいったバナナ
9月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
20	とんぼのめがね	40	とんぼのめがね	14	とんぼのめがね
9	うんどうかいのうた	17	どんぐりころころ	5	山の音楽家
9	虫のこえ	15	虫のこえ	3	どんぐりころころ
7	うんどうかい	10	ガンバリマンのうた	3	うんどうかい
6	どんぐりころころ	10	うんどうかい	3	虫のこえ
				3	きのこ

表7 10月～12月に演奏される機会の多い傾向にあるピアノ曲

10月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
22	どんぐりころころ	29	どんぐりころころ	8	どんぐりころころ
10	やきいもグーチャーパー	22	まつぼっくり	7	まつぼっくり
9	まつぼっくり	16	やきいもグーチャーパー	4	やきいもグーチャーパー
8	大きな栗の木の下で	15	大きな栗の木の下で	3	大きな栗の木の下で
8	きのこ	13	きのこ	3	きのこ
				3	山の音楽家
11月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
9	やきいもグーチャーパー	29	やきいもグーチャーパー	4	きのこ
9	こぎつね	19	山の音楽家	4	やきいもグーチャーパー
8	まっかな秋	17	まつぼっくり	4	山の音楽家
7	まつぼっくり	16	こぎつね	3	まっかな秋
7	たき火	15	きのこ	3	まつぼっくり
				3	もみじ
				3	たきび
12月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
25	あわてんぼうの サンタクロース	45	あわてんぼうの サンタクロース	13	あわてんぼうの サンタクロース
15	お正月	26	お正月	7	赤鼻のトナカイ
12	赤鼻のトナカイ	23	ジングルベル	6	ジングルベル
9	ジングルベル	18	赤鼻のトナカイ	5	お正月
3	こぎつね	8	うさぎ野原のクリスマス	4	もちつき
3	たき火				
3	きよしこのよる				

表8 1月～3月に演奏される機会の多い傾向にあるピアノ曲

1月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
15	ゆきのペンキやさん	28	ゆき	6	ゆき
13	ゆき	24	こんこんくしゃん	4	やぎさんゆうびん
12	お正月	16	ゆきのペンキやさん	4	お正月
6	豆まき	13	お正月	4	ゆきのペンキやさん
5	北風小僧のかんたろう	10	豆まき	3	カレンダーマーチ
5	こんこんくしゃん			3	北風小僧のかんたろう
				3	こんこんくしゃん
				3	雪のペンキやさん
2月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
23	豆まき	44	豆まき	10	豆まき
13	ゆき	17	鬼のパンツ	3	こんこんくしゃん
10	うれしいひなまつり	16	ゆきのペンキやさん	3	ゆきのペンキやさん
7	こんこんくしゃん	12	うれしいひなまつり	3	ゆき
4	ゆきのペンキやさん	10	こんこんくしゃん	3	うれしいひなまつり
3月					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
22	思い出のアルバム	32	うれしいひなまつり	7	うれしいひなまつり
12	うれしいひなまつり	30	思い出のアルバム	6	思い出のアルバム
8	ひなまつり	13	春がきた	4	はるがきた
5	一年生になったら	12	はるがきた	4	うれしいひな祭り
4	はるがきた	7	みんなともだち	2	春がきた
4	みんなともだち	7	春がきたんだ	2	カレンダーマーチ
4	ドキドキドン一年生			2	ドキドキドン一年生
4	さよならぼくたちの ほいくえん				

表9 1年を通じて演奏される機会の多い傾向にあるピアノ曲

通年					
幼稚園(n=39)		保育所(n=61)		認定こども園(n=16)	
園数	曲目	園数	曲目	園数	曲目
8	おかえりのうた	19	さんぽ	5	おかえりのうた
7	園歌	10	おかえりのうた	4	おはようのうた
7	おはようのうた	8	おはようのうた	3	おべんとう
6	さんぽ	7	手をたたきましよう	2	おべんとうのうた
5	おべんとう	6	おもちゃのちゃちゃちゃ	2	いぬのおまわりさん
				2	おもちゃのちゃちゃちゃ
				2	たんじょうび

4. 考察

4-1 現在の課題曲の検証

課題曲のうち、演奏される機会の多いピアノ曲として保育現場の2割を超える園で記入のあった曲は、幼稚園19曲(59.4%)、保育所16曲(50.0%)、認定こども園19曲(59.4%)であった(表10)。

表10 2割を超える園で記入のあった課題曲

	曲名	幼	保	認		曲名	幼	保	認
1	おはようのうた			○	17	めだかの学校			
2	おはよう				18	うれしいひなまつり	○	○	○
3	おかえりのうた	○		○	19	こいのぼり	○	○	○
4	さよならのうた				20	犬のおまわりさん			
5	おべんとう				21	あめふりくまのこ	○	○	○
6	ぶんぶんぶん				22	たなばたさま	○	○	○
7	ちょうちょう				23	ありさんのおはなし			
8	チューリップ	○	○	○	24	おつかいありさん	○	○	
9	かたつむり	○	○	○	25	まっかな秋	○		○
10	とんぼのめがね	○	○	○	26	ジングルベル	○	○	○
11	ぞうさん				27	あわてんぼうのサンタクロース	○	○	○
12	どんぐりころころ	○	○	○	28	やぎさんゆうびん			○
13	ゆき	○	○	○	29	思い出のアルバム	○	○	○
14	お正月	○	○	○	30	ふしぎなポケット			
15	手をたたきましよう	○	○	○	31	山の音楽家	○	○	○
16	むすんでひらいて	○			32	森のくまさん			

注 幼は幼稚園、保は保育所、認は認定こども園。

また、月毎もしくは通年における演奏する機会が多い傾向にあるピアノ曲の上位5曲に含まれる曲は、幼稚園18曲(56.3%)、保育所17曲(53.1%)、認定こども園23曲(71.9%)であった(表11)。

表 11 月毎もしくは通年での演奏機会が多い傾向にある上位 5 曲に含まれる課題曲

	曲名	幼	保	認		曲名	幼	保	認
1	おはようのうた	○	○	○	17	めだかの学校			○
2	おはよう				18	うれしいひなまつり	○	○	○
3	おかえりのうた	○	○	○	19	こいのぼり	○	○	○
4	さよならのうた				20	犬のおまわりさん			○
5	おべんとう	○		○	21	あめふりくまのこ	○	○	○
6	ぶんぶんぶん				22	たなばたさま	○	○	○
7	ちょうちょう				23	ありさんのおはなし			○
8	チューリップ	○	○	○	24	おつかいありさん	○	○	
9	かたつむり	○	○	○	25	まっかな秋	○		○
10	とんぼのめがね	○	○	○	26	ジングルベル	○	○	○
11	ぞうさん				27	あわてんぼうのサンタクロース	○	○	○
12	どんぐりころころ	○	○	○	28	やぎさんゆうびん			○
13	ゆき	○	○	○	29	思い出のアルバム	○	○	○
14	お正月	○	○	○	30	ふしぎなポケット			
15	手をたたきましょう			○	31	山の音楽家		○	○
16	むすんでひらいて				32	森のくまさん			

注 幼は幼稚園、保は保育所、認は認定こども園。

一方、「保育現場の 2 割を超える園で記入のあったピアノ曲」及び「月毎もしくは通年における演奏する機会が多い傾向にあるピアノ曲の上位 5 曲」のどちらにも含まれていない課題曲は、幼稚園 11 曲(34.3%)、保育所 13 曲(40.6%)、認定こども園 9 曲(28.1%)であった(表 12)。

表 12 含まれていない課題曲

	曲名	幼	保	認		曲名	幼	保	認
1	おはようのうた				17	めだかの学校	×	×	
2	おはよう	×	×	×	18	うれしいひなまつり			
3	おかえりのうた				19	こいのぼり			
4	さよならのうた	×	×	×	20	犬のおまわりさん	×	×	
5	おべんとう		×		21	あめふりくまのこ			
6	ぶんぶんぶん	×	×	×	22	たなばたさま			
7	ちょうちょう	×	×	×	23	ありさんのおはなし	×	×	
8	チューリップ				24	おつかいありさん			×
9	かたつむり				25	まっかな秋		×	
10	とんぼのめがね				26	ジングルベル			
11	ぞうさん	×	×	×	27	あわてんぼうのサンタクロース			
12	どんぐりころころ				28	やぎさんゆうびん	×	×	
13	ゆき				29	思い出のアルバム			
14	お正月				30	ふしぎなポケット	×	×	×
15	手をたたきましょう				31	山の音楽家			
16	むすんでひらいて		×	×	32	森のくまさん	×	×	×

注 幼は幼稚園、保は保育所、認は認定こども園。

表 12 において×が記載された曲については、記載されていない曲と比較し、保育現場で演奏される機会が少ない傾向にあると考えられる。特に、幼稚園、保育所、認定こども園の全てに×が記載されている「2 おはよう」「4 さよならのうた」「6 ぶんぶんぶん」「30 ふしぎなポケット」「32 森のくまさん」については、その傾向が顕著であると推測される。したがって、この 5 曲については、他の演奏される機会が多い傾向にあるピアノ曲に、振替を検討する必要もあると考えられる。しかし、「7 ちょうちょう」については、保育現場の全てに×が記入されているものの、表 3 の「ちょうちょ」及び表 5 の「ちょうちょ」と同一の曲と推測されることから、他の 5 曲よりは演奏される機会が多いことが予想される。

4-2 新たな課題曲の追加

(1) 演奏される機会の多いピアノ曲

演奏される機会の多いピアノ曲として保育現場の 2 割以上の回答において、幼稚園(表 2)では、色付けされている課題曲を除いた曲数は、32 曲である。さらに、就職先によって異なる曲である「園歌」、課題曲として表 1 にある「22 たなばたさま」と同一の曲と推測される「たなばた」と同様に課題曲である「18 うれしいひなまつり」と同一の曲と推測される「ひなまつり」、これら 3 曲を除いた 29 曲が、新たな課題曲の候補として考えられる。同じく、保育所(表 3)では、色付けされた課題曲を除いた曲数は 34 曲、そこから同一曲と推測される「たなばた」「ちょうちょ」を除いた 32 曲、認定こども園(表 4)では、課題曲を除くと 33 曲、そこから同一曲と推測される「たなばた」を除いた 32 曲が、それぞれ新たな課題曲の候補として考えられる。

月毎での演奏機会の多いピアノ曲の回答において、課題曲及び先述した同一曲と推測される曲を除いた、新たな課題曲の候補を示した(表 13)。月毎での回答で、3 園とも記載されている、4 月の「せんせいとおともだち」、5 月の「おかあさん」「ことりのうた」「バスごっこ」、6 月の「とけいのうた」、7 月の「うみ」、8 月の「うみ」「おばけなんてないさ」、9 月の「虫のこえ」「うんどうかい」、10 月の「やきいもグーチーパー」「まつぼっくり」「大きな栗の木の下で」「きのこ」、11 月の「やきいもグーチーパー」「まつぼっくり」、12 月の「赤鼻のトナカイ」、1 月の「ゆきのペンキやさん」「こんこんくしゃん」、2 月の「豆まき」「こんこんくしゃん」「ゆきのペンキやさん」、3 月の「はるがきた」については、演奏される園が多い傾向にある曲だけでなく、保育現場の回答した割合についても高い傾向にあり、課題曲として新たに追加する必要があると考えられる。

表 13 課題曲以外で、月毎に演奏される機会の多い傾向にある曲

	3園とも	2園	1園のみ
4月	せんせいとおともだち	ちょうちょ	ことりのうた おはながわらった さんぽ
5月	おかあさん ことりのうた バスごっこ		えんそく ピクニック
6月	とけいのうた	かえるのうた あまだればったん	すてきなパパ 大きな古時計
7月	うみ	おばけなんてないさ しゃぼん玉	アイスクリーム ヤッホッホ夏休み きらきら星
8月	うみ おばけなんてないさ	南の島のハメハメハ大王 アイスクリーム アイアイ	しゃぼん玉 みずあそび とんでいったバナナ
9月	虫のこえ うんどうかい		うんどうかいのうた ガンバリマンのうた きのこ
10月	やきいもグーチーパー まつぼっくり 大きな栗の木の下で きのこ		
11月	やきいもグーチーパー まつぼっくり	こぎつね きのこ たき火	もみじ
12月	赤鼻のトナカイ		こぎつね たき火 きよしこのよる うさぎ野原のクリスマス もちつき
1月	ゆきのペンキやさん こんこんくしゃん	豆まき 北風小僧のかんたろう	カレンダーマーチ
2月	豆まき こんこんくしゃん ゆきのペンキやさん		鬼のパンツ
3月	はるがきた	みんなともだち ドキドキドン一年生	さよならぼくたちのほいくえん カレンダーマーチ
通年		さんぽ おもちゃのちゃちゃちゃ	手をたたきましょう たんじょうび

5. おわりに

本研究では、保育の現場で演奏される機会の多いピアノ曲について、調査を行った。本学で学ぶ学生のピアノ経験は、実に様々である。経験豊富な学生には50曲前後の課題曲の修得を目指し、また、本学の学びを通じてピアノのスキルを修得していく学生にも、保育現場で活用できる(演奏する機会の多い傾向にある)曲を優先して学ぶことで、それぞれが将来、音楽を通じて子どもとの豊かな関わりを持つようになることを期待している。

しかし、昨今の新型コロナウイルス感染拡大防止への取り組みによって、保育現場における活動についても様々な制限があると考えられる。このような状況の中、今後、音楽を通じて子どもたちとどのような関わりを持つことが可能か、そのために本学でどのような学びの環境を整えるべきなのか、研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 国際学院埼玉短期大学(2020) 「2020年度シラバス」
- 2) 越智光輝(2017) 「『子どもの歌』におけるピアノ伴奏の効率的な習得 —調性が練習時間および難易感に与える影響—」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』38, pp.1-12.
- 3) 三浦雅展・宮脇聡史(2015) 「ピアノ演奏の熟達度評価基準を対象とした経験者および未経験者での評価の共通性と多様性」『日本音響学会 音楽音響研究会資料』34(3), pp.25-30.
- 4) 越智光輝(2017) 「保育内容(音楽表現)の授業における課題曲の分析 —幼稚園教育実習Ⅱにおける「子どもの歌」のピアノ伴奏に関する調査から—」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』39, pp.127-138
- 5) 吉田梓監修(1997) 「子どもと楽しむ童謡カレンダー Vol.1」音楽之友社、東京
- 6) 吉田梓監修(1997) 「子どもと楽しむ童謡カレンダー Vol.2」音楽之友社、東京
- 7) 国際学院埼玉短期大学(2020) 「入学前教育(Zoom)IDについて」(<https://sc.kegef.ac.jp/blog/7556/>)(2020/1/15参照)
- 8) 越智光輝(2019) 「入学前教育『ピアノ学習の基礎①』における学習成果の検証—入学予定者の読譜における難易感の変化について—」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』42, pp.11-27.
- 9) 小澤和恵(2009) 「保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察—「生活の歌」と「季節の歌」について—」『埼玉純真短期大学研究論文集』2, pp.37-47.

教育実習を通じた学生の学び

— 幼稚園における新型コロナウイルス感染症防止対策について — **What did Students Learn through Teaching Practice on Countermeasures against COVID-19 in Kindergarten ?**

佐野ゆかり 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

国際学院埼玉短期大学幼児保育学科1年に在学している学生116名（女子112名、男子4名）を対象に、自記式質問紙を用いて、教育実習で気付いた、幼稚園・認定こども園における新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について調査を行った。園の保育活動や使用するおもちゃにはあまり変化はないものの、送迎時には保護者等大人が園舎内へ立ち入らないようにしていることや、「換気」や「アルコール消毒」を中心とした「環境衛生」に配慮し、職員は「マスク着用」、子どもは可能な範囲でのマスク着用とし、給食時には念入りな「手指消毒」を行うほか、「体温計測」など「健康観察」を普段にも増して念入りに行っていることを学生は捉えた。実習前に学んでおきたかったこととして、「保育現場において必要とされる感染症対策について、もっと具体的に知っておきたかった」という意見が寄せられ、今後の健康領域の授業の改善すべき点も知ることができた。実習を通して健康領域への勉強意欲が増した学生もいた。このように、個別の専門科目と「実習」を結び付けて授業内容を構築することも、意味のある試みではないかと考える。

キーワード:教育実習、幼稚園、新型コロナウイルス感染症、防止対策

1. はじめに

2020年2月28日、日本政府は新型コロナウイルス感染症対策として、全国の小中学校、高校、特別支援学校の一斉休校を宣言した。4月7日には埼玉県を含む1都6県に新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が発令され、4月16日には全国に拡大、多くの幼稚園に休園が要請された。その後感染が一定の落ち着きを見せたことから5月25日には解除となり、6月からは幼稚園も再開することになった。このようなことはこれまで経験したことのない事態であるため、幼稚園等の保育・教育施設は国の指針に従うとともに各園独自の工夫を凝らした様々な感染防止対策を行いながら保育・教育を続けている。

幸い今年度の教育実習はほとんどの園から受け入れていただくことができた。新型コロナ禍の中で実習させていただくことには苦労もあるが、このような時期であるからこそ学べることもあるのではないだろうか。

新型コロナ感染症が新しい病気であることから、実習生が捉えた幼稚園・認定こども園における感染防止対策に関する報告は現在までに見られない。そこで、教育実習後の学生へどのような気づきがあったのか質問紙を用いて調査し、その結果を踏まえて今後の学生指導を改善するための一助とすることを目的とした。

2. 方法

2-1. 対象

国際学院埼玉短期大学幼児保育学科1年に在学している学生116名(女子112名、男子4名)。

2-2. 調査方法

「教育実習Ⅱ(観察実習)」(2020年10月19日～23日)直前の「健康領域指導法」の授業(第3回:10月14日)において、実習時に幼稚園でどのような新型コロナウイルス感染症への感染拡大防止対策をしているかをよく見てくるように伝え、実習後の授業(第4回:10月28日)に自記式質問紙を用いて、幼稚園における教育実習で気付いたことについての調査を行った。

2-3. 調査項目

調査項目は、厚生労働省(2018)「保育所における感染症対策ガイドライン」¹⁾および全国保育園保健師看護師連絡会(2020)「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック 第1版」²⁾を参考に作成した。(1)マスク着用について、(2)手指消毒について、(3)送迎時について、(4)保育活動について、(5)おもちゃの扱いについて、(6)環境衛生について、(7)健康観察について、以上7項目は選択肢を置き、複数選択可とした。また、「保育者からの指導で行った新型コロナウイルス感染症対策」、「新型コロナウイルス感染症対策について授業で学んでおきたかったこと」、「その他」については自由記述とした。なお、自由記述の中には言葉足らずで内容が明確とは言えないものもあったが、明らかな誤記以外はそのまま掲載する。(例:学生が自分の手を消毒したのか園児の手を消毒したのかわからない、等。)

3. 結果とその分析

3-1 マスク着用について

マスク着用についての結果を表1に示す。

表1 マスク着用について(複数回答) n=116

① 昼食以外の時間は、園児も職員も全てマスクをしていた	36人	31.0%
② 運動遊びのときは、園児だけはマスクをはずしていた	52人	44.8%
③ 運動遊びのときは、園児も職員もマスクをはずしていた	19人	16.4%
④ 職員・保護者だけがマスクをしていた	29人	25.0%
⑤ 園内では、園児も職員もマスクはしていなかった	4人	3.4%
その他	12人	10.3%

この結果から、職員は昼食以外の時間はほぼマスクをしているが、園児は運動遊びの時はマスクを着けない園が6割以上あり、マスク着用が自由な園もあることがわかった。

これは、低年齢の幼児の場合、「適切な使用ができずマスクをすることで顔に何度も触れてしまう、マスクを外してしまうなど、マスクをすることでかえって感染を広げてしまう可能性がある」(全国保育園保健師看護師連絡会 2020)²⁾との判断によるのではないかと考えられる。

職員がマスクを着用していないのが常態である園は3.4%あった。大豆生田（2020）³⁾が「こども環境学会調査では、保育者は『保育中マスクは外さない』が45.4%と、半数近くが保育中はずっとマスクをしているとのことですが、『必要に応じて外す』が35.5%と決して少なくありません…中略…子どもの育ちへの配慮から、必要に応じてマスクを外してあえて表情や口を見せるということもあるのかもしれませんが」と述べているように、表情によるコミュニケーションを重視しているからかもしれない。

3-2 手指消毒について

手指消毒についての結果を表2に示す。

表2 手指消毒について（複数回答）n=116

① 登園時に消毒をしていた	56人	48.3%
② 昼食時に消毒をしていた	89人	76.7%
③ 外遊び後に消毒をしていた	37人	31.9%
④ 丁寧な手洗いをしていた（石鹸使用・流水30秒など）	67人	57.8%
その他	5人	4.3%

手指消毒は1日に何度も様々な機会に行われており、消毒が保育の中に定着しているといえる。

3-3 送迎時について

送迎時についての結果を表3に示す。

表3 送迎時について（複数回答）n=116

① 施設外もしくは玄関口での受け入れとお迎え	47人	40.5%
② 入り口で手指消毒	50人	43.1%
③ 通常通り（感染防止のための特別な対応なし）	43人	37.1%
その他	4人	3.4%

感染防止のための特別な対応なしの園も4割近くあるが、保護者が玄関より中には入らないようにしている園や入る場合には手指消毒をする園のほうが多かった。

3-4 保育活動について

保育活動についての結果を表4に示す。

表4 保育活動について（複数回答）n=116

① 子ども同士の間隔を1m以上空けていた	9人	7.8%
② 1日を同じクラス（同じ人たち）で過ごしていた	52人	44.8%
③ 子ども同士の間隔を保てる遊びの工夫をしていた	6人	5.2%

④ 接触が多い体育活動を避けていた	5人	4.3%
⑤ 大きな声を出すことや歌うことを避けていた	4人	3.4%
⑥ クラスが混合しないよう配慮されていた（トイレ・外遊びなど）	17人	14.7%
⑦ 大人数のイベントは避けていた（運動会を年齢ごとにする・来客の人数制限など）	38人	32.8%
⑧ 子どもと新型コロナウイルス感染症について話す機会を持っていた	9人	7.8%
⑨ 通常通り（感染防止のための特別な対応なし）	32人	27.6%
その他	5人	4.3%

「1日を同じクラス（同じ人たち）で過ごしていた」、「大人数のイベントは避けていた（運動会を年齢ごとにする・来客の人数制限など）」、「クラスが混合しないよう配慮されていた（トイレ・外遊びなど）」が上位を占め、多くの人数が入り混じらないような配慮がされていることがわかった。

しかし、子ども同士の物理的距離を保つことや、体育活動・歌などを制限することなど、保育内容自体を制限することは多くなかった。園児に新型コロナウイルス感染症に対する理解を促し、子ども自身が感染防止の意味をわかって行動できるように「子どもと新型コロナウイルス感染症について話す機会を持っていた」園もあった。

3-5 おもちゃの扱いについて

おもちゃの扱いについての結果を表5に示す。

表5 おもちゃの扱いについて（複数回答）n=116

① 布おもちゃを控えていた	4人	3.4%
② 個別でおもちゃを使用させていた	1人	0.9%
③ 毎日洗浄もしくは消毒していた	45人	38.8%
④ 通常通り（感染防止のための特別な対応なし）	56人	48.3%
その他	11人	9.5%

おもちゃは約半数の園が通常通りの扱いをしていた。「その他」には「週に1回消毒していた」等の消毒に関する記述が8名あり、「毎日洗浄もしくは消毒していた」と合わせると、45%以上の園で消毒が行われていることがわかった。「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック 第1版」(2020)²⁾では、布製おもちゃは控えることが望ましいとされているが、そうしている園は少数であった。

3-6 環境衛生について

環境衛生についての結果を表6に示す。

表6 環境衛生について（複数回答）n=116

① テーブルの上についたて（シールド）を置いていた	35人	30.2%
② 高頻度接触部位（ドアノブ・スイッチなど）は1日1回以上消毒をしていた	37人	31.9%
③ こまめに換気していた	86人	74.1%
④ 通常通り（感染防止のための特別な対応なし）	13人	11.2%
その他	7人	6.0%

「こまめに換気していた」が7割以上、「高頻度接触部位（ドアノブ・スイッチなど）は1日1回以上消毒をしていた」、および「テーブルの上についたて（シールド）を置いていた」は、それぞれ3割以上に上ることがわかった。シールドは市販品の他、牛乳パックを利用するなど職員の手作り品もあった。

3-7 健康観察について

健康観察についての結果を表7に示す。

表7 健康観察について（複数回答）n=116

① 保護者との連携として体温・朝食の有無・体調についてなどの連絡をノートなどで行っていた	84人	72.4%
② 家庭内での発熱者等の有無を把握していた	42人	36.2%
③ 決めた時間帯に子どもの体温を数回測定していた	19人	16.4%
④ 通常通り（感染防止のための特別な対応なし）	15人	12.9%
その他	4人	3.4%

7割以上が毎朝子どもの体調を「連絡帳などで」把握する他、3割以上が子どもだけでなく「家庭内での発熱者」等も把握し、「決めた時間帯に体温を数回測定」する園もあった。

3-8 保育者からの指導で行った新型コロナウイルス感染防止対策

保育者からの指導で学生が行った新型コロナウイルス感染防止対策についての結果を表8に示す。

表8 保育者からの指導で行った新型コロナウイルス感染防止対策 n=116（71人記入）

消毒について（59人）	<ul style="list-style-type: none"> ・テーブル・机（11人）、階段の手すりの消毒・ドアノブ（3人）子どもが触るところ、壁など（3人） ・給食の前後に、机やいすのアルコール消毒（7人） ・おもちゃを消毒（5人） ・子どもたちへの消毒（5人） ・様々な場面でこまめに消毒（5人） ・手を消毒（4人） ・床をモップ掃除するときに、アルコールでの除菌も（4人） ・シールドは使った後必ず消毒をする（3人）
-------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・消毒 (3人) ・入り口でアルコールをする (2人) ・毎日園庭の遊具を消毒 (2人) ・給食のおぼんをアルコール消毒 ・活動後消毒
給食 (消毒以外) について (16人)	<ul style="list-style-type: none"> ・昼食時に、唾液が飛ばないようにパーテーションを置く (9人) ・大きな声を出さない (3人) ・話すことを減らすよう声がけ ・食事 (給食・おやつ) の時は、声を出さないように ・給食は子どもと保育者別々 ・保育者が配膳 (ふだんは子どもたちが配膳)
マスクについて (15人)	<ul style="list-style-type: none"> ・昼食時以外マスク着用 (11人) ・給食の配膳時はマスク (2人) ・マスクをしていない子には注意する ・子どもの前以外ではマスクを外してもよい
手洗い・うがいについて (13人)	<ul style="list-style-type: none"> ・手洗いうがいは必ず行う (6人) ・手洗い・うがいの促し (2人) ・手洗いのやり方 (2人) ・歯磨きはしない。うがいのみ (2人) ・子どもたちにうがい用の塩を配った
検温について (7人)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の検温 (7人)
距離について (3人)	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士が近くならないように ・距離を保つ。1つの机に対して2人しか座らない ・座る時は2mの間隔を開ける事 (体操時)
換気について (1人)	<ul style="list-style-type: none"> ・換気 (窓を開ける)
実習前からの心構えについて (4人)	<ul style="list-style-type: none"> ・2週間前から人混みへ行かない (2人) ・満員電車には乗らないで通勤する ・友人と大勢での会食は避ける

「環境の消毒」を中心に、活動の節目に「園児の手の消毒も」行ったこと、「給食時のついたて (シールド) のセッティング」、「マスク・手洗い・うがい」の他、実習前からの心構えについても指導があり、実践したことがわかった。

3-9 新型コロナウイルス感染症対策について授業で学んでおきたかったこと

実習前に新型コロナウイルス感染症対策について授業で学んでおきたかったことについての結果を表9に示す。

表9 授業で学んでおきたかったこと n=116 (11人記入)

対策について	・幼稚園などでの適切な感染症対策とはどういうものか学んでおきたかったで
--------	-------------------------------------

(4人)	<ul style="list-style-type: none"> す ・対策について、深く詳しく学びたい ・子どもにはどのような方法が有効なのか ・どんな対策を行うといいなど、具体的な対策を知りたいです
距離感について (2人)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとの距離感。くしゃみをしてしまい他の子にかけてしまったとき ・子どもたちに抱っこやおんぶをしてほしいとお願いされた場合 (密・接触にあたるため)
教育法について (2人)	<ul style="list-style-type: none"> ・マスクが苦手な子どもへの対応 ・手洗いの仕方、子どもが楽しめる手洗いの歌
病原体について (3人)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちとの接触が不可避な職業なので、どのくらいの頻度で消毒を行うと良いか ・コロナウィルスの病原体について ・子どもが感染する際、どんな感染経路例があるのか、多いのかを知りたい

実習前に新型コロナウイルス感染症対策について授業で学んでおきたかったことについては、11人が記述をした。書かれている言葉だけでは理解しづらいものもあるが、「保育現場」において必要とされる新型コロナウイルス感染症対策について、具体的に知っておきたかったという意味であろうと考えられる。

「健康領域指導法」の授業においては、参考資料としてインターネットで見られる厚生労働省 (2018) 「保育所における感染症対策ガイドライン」¹⁾、全国保育園保健師看護師連絡会 (2020) 「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック 第1版」²⁾、文部科学省 (2020) 「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」⁴⁾を紹介したが、単にこのような資料があると紹介するだけでは足りなかったようだ。それらの内容まで取り上げ、解説する必要があると考えられる。

3-10 その他の自由記述

その他の自由記述は55人から寄せられ、代表的なものとしては、「子どもの命に関わることなので、とても重視して行っているなと感じられました。コロナがあり、子どものケガだけでなくウィルス対策と、大変なことが増えてしまいましたがどれも責任をもって情報共有しながら徹底していました」「こまめに手洗い消毒を促し、物もこまめに消毒をしなければいけないので、普段よりすることが多い中で、他の事も怠らずにできているのがすごいなと思った」「園内に入るときやクラス活動の前後、昼食前降園時など、いろいろな場面で消毒や手洗いうがいを行っていた。先生が言う前に子ども自ら消毒を行っていて、身についていると感じた」等の記述があった。全記述は、資料1として末尾に掲載した。

これらの記述内容を「株式会社 User Local」社が提供するテキストマイニング無料ツール⁵⁾で分析した結果を図1に示す。

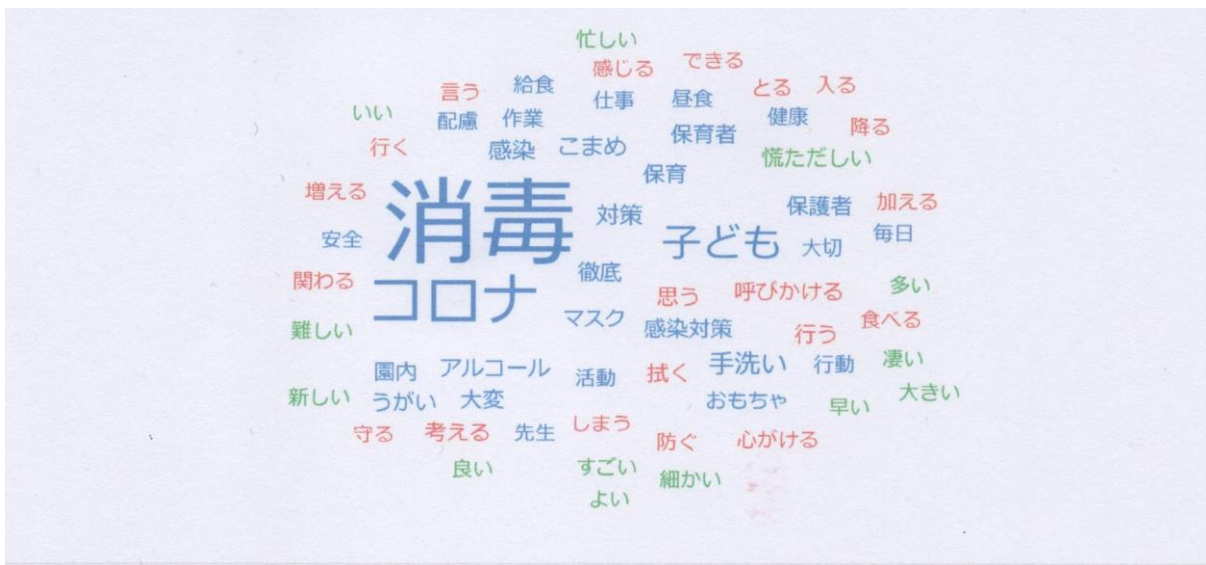


図1 自由記述のワードクラウドによる表示

図1は、出現回数が高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示している。分析した単語は254（のべ数）であり、内訳は名詞（青字）が169語、動詞（赤字）が71語、形容詞（緑字）が14語である。図1では、「消毒」、「コロナ」、「子ども」、「感染対策」の出現回数が多く、次いで、「保育者・先生」、「手洗い」、などが、挙がっており、「子ども」たちが「コロナ」感染症にかからないように、「保育者」が「消毒」をしたり、「手洗い」を指導したりしていることが書かれ、その様子を「大変」、「すごい」、「忙しい」、「慌ただしい」ととらえていることが読み取れる。

4. 考察

以上の結果から、園の保育活動や使用するおもちゃにはあまり変化はないものの、送迎時には保護者等大人が園舎内へ立ち入らないようにしていることや、「換気」や「アルコール消毒」を中心とした「環境衛生」に配慮し、職員は「マスク着用」、子どもは可能な範囲でのマスク着用とし、給食時には念入りの「手指消毒」を行うほか、「体温計測」など「健康観察」を普段にも増して念入りに行っていることを学生が捉えたことがわかった。

しかし、園による新型コロナウイルス感染症対策の差異は大きく、マスクはもとより、まめにアルコール消毒を行い、給食時にはついたて（シールド）を立て、おもちゃも毎日消毒しているところもあったが、学生が「緊急事態宣言以前と変わっていない」と捉えた園では、園児・保育者ともマスクをせず、特に消毒も行っていないところもあった。このような差異は、園ごとの保育に対する考え方の違いからくるものであり、なぜそのような対応の仕方をしているのかについても考えることが深い学びにつながるのではないだろうか。

調査をした2020年10月時点と、その後さらに感染が広がり、子どもにも感染しやすい変異株が発見された2021年1月以降とで、園の対策はどのように変化しているのか、あるいは変化していないのか、引き続き見て行く必要があると考える。また、今回は1年生の初めての観察実習で捉えた感染症防止対策であったが、2年生の責任実習では学生の物事を捉える目も鋭くなっている可能性がある。し

たがって、2年生の実習後にも再度調査を行い、比較検討をする予定である。

実習前に学んでおきたかったこととして、「保育現場において必要とされる感染症対策について、もっと具体的に知っておきたかった」という意見が寄せられた。単にこのような資料があると紹介するだけではなく、それらの内容まで取り上げ、わかりやすく解説する必要があったことがわかった。また、幼児に対する指導法についても関心があることもわかった。2020年には新型コロナウイルス感染症に関する絵本⁶⁾⁷⁾⁸⁾も出版され、教材として使える「うつる病気のひみつがわかる絵本」⁹⁾もシリーズで出版されていることから、今後の健康領域の授業で取り上げ、授業改善につなげていきたい。

5. おわりに

1年次の教育実習（観察実習）後に「健康領域指導法」の授業において、自記式質問紙を用いて、教育実習で気付いた新型コロナウイルス感染症防止対策についての調査を行った。

学生は、多くの園で、消毒、換気、マスク着用、手洗い、健康観察等が常日頃以上に丁寧になされていると気付くことができた。

「健康領域指導法」の授業で調査用紙への記入を終えた後、1人ずつ口頭で発表し気付きの共有をはかったところ、当日のリアクションペーパーには「自分の行った園では何も対策をしていなかったの、勉強になりました」、「子どもたちが帰った後に先生方がおもちゃの消毒をしている姿を見た」、「みんなの発表を聞いて、実習園ではやっていなかったこともたくさんあったので、話し合いや報告の大切さを知ることができました」、「実習が終わったあとの学びが大切だと思った」等の記述があり、実習経験を共有する意義を感じることができた様子であった。

今回の教育実習は学生にとって初めての实習であり、5日間という短い期間の観察実習であることから、保育内容における工夫までは把握しきれなかったかもしれないが、実習して初めて「こういうことを学んでおけばよかった」と気付く部分もあり、専門科目への勉学意欲が増した学生もいることがわかった。

このように、個別の専門科目と「実習」を結び付けて授業内容を構築することも、意味のある試みではないかと考える。

参考文献

- 1) 厚生労働省 (2018)、「保育所における感染症対策ガイドライン」
- 2) 全国保育園保健師看護師連絡会 (2020)、「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック 第1版」
- 3) 大豆生田啓友 (2020)、「ウィズコロナから考える保育の質の向上、発達」、164巻、pp. 24-32
- 4) 文部科学省 (2020)、「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」
- 5) User Local 社 (2020)、「テキストマイニング」無料ツール
<https://textmining1.userlocal.jp> (参照日 21.01.19)
- 6) WILLこども知育研究所編著 (2020)、「どうしてしんがたコロナになるの?(やさしくわかるびょうきのえほん)」、金の星社
- 7) おかだはるえ (2020)、「みんなでからだを守ろう! 感染症キャラクターえほん 全10巻」、日本図書センター

- 8) おかだはるえ (2020)、「ウィルスにマケマ戦隊ゲンキーズ」、フレーベル館
9) おかだはるえ (2012)、「うつる病気のひみつがわかる絵本 全5巻」、ポプラ社

資料1

その他の自由記述 n=116 (55人記入)

その他の自由記述

- ・子どもはこまめに消毒していたが、先生はしていなかったなので、そこは大丈夫かなと思いました。
- ・子どもに関してはコロナ対策が難しく、通常業務だけでも大変な中、それに加えコロナ対策を行うという大変さを感じました。
- ・手洗い、うがい、消毒などの最低限の感染対策をすることが大事だと思う。
- ・子どもの命に関わることなので、とても重視して行っているなど感じられました。コロナがあり、子どものケガだけでなくウィルス対策と、大変なことが増えてしまいましたがどれも責任をもって情報共有しながら徹底していました。
- ・通常の仕事だけでも保育をして、子どもたちと関わったり、書類を書いたり大変ですが、さらに消毒作業や検温等で先生方への負担はとて大きくなっていると思いました。また、私の園は、2歳児や満3歳児のクラスもあり、さらに気を付けている所が多かったと感じました。
- ・ドアノブや手すりを毎日消毒する作業が大変だった。
- ・やはり、信頼、信用させるということがまず第一なので、あやふやにせずできる限り対策することを心掛けていた。
- ・みんなで協力して自分たち職員と子ども両方の安全を考えている。
- ・新型コロナウイルスが流行する前から、保育者は子どもの安全を配慮していることに気がきました。どれも保育の延長で行われていて、子どもが健康に過ごせるよう園の環境を良くしていました。
- ・通常の業務に加え、園内の消毒などやるが増えて、とても大変そうでした。園内でクラスターが発生しないよう、色々な面で気を付けているのだとわかりました。
- ・このような対策をしている保育者について、私は子どもの安全について、よく考えて実践しているのだなと思いました。コロナ対策については、昼食、おやつなどの時以外にも、主活動の時も、「シールドを立てなくていいのかな？」と思いました。
- ・子ども一人ひとりの安全を考えた行動をしているのだと考えました。
- ・対策はしていなかったので少し気にした方がいいと思った。
- ・市立幼稚園だったので教育委員会や近隣の小学校などと連携をとり、コロナについての対策や現状について情報交換をしていて子どもを守るためのしつかりしていると感じた。
- ・子どもの安全や健康に配慮した対策が行われていて、先生方は大変な仕事が増えたかもしれませんが、とても大切なことなのだと思います。
- ・朝保護者と子どもたちは、園に入る前、体温を測っている。

- ・コロナの対策を常にされている先生方は見本となり良いと思います。
- ・こまめに手洗い消毒を促し、物もこまめに消毒をしなければいけないので、普段よりすることが多い中で、他の事も怠らずにできているのがすごいなと思った。
- ・今は感染対策をしっかりすることで、保護者などからの信頼を得ていると感じました。
- ・保育の中で衛生面に気を付けることはとても大切で、大変だと思いました。
- ・子どもたちが来る前から帰った後まで、やることがたくさんあることを知りました。
- ・保育という仕事はどうしても人との接触が避けられません。子どもはマスクをはずしてしまったりするので、子どもにコロナを教えるのは難しいと思いました。
- ・子どもたちを見て活動準備を行い、とても大変だと思いました。
- ・扉を少し開けていたり、手洗いの声掛けの際に、アルコール消毒もするよううながしてたりして、さりげなく対策をこどもとしていて凄いいました。
- ・毎日のように消毒作業を行なっていて、すごいと思いました。保育者の1日はとても慌ただしく、忙しい1日でしたが、時間が過ぎて行くのがとても早かったです。
- ・子どもの安全を守るために、先生方は細かいところまで消毒をし、感染対策が大変そうだと思います。
- ・細かなところまで消毒を行っていた。子どもたちに手洗いを念入りにするように声かけをしていた。マスクがなくて咳をする子には、手で抑えるように声かけしていた。
- ・子どもの最善の利益をまさに考えていると思いました。現在の最善の利益は、コロナウィルスに感染することなく、健康に過ごすことなので、良い対策だと思いました。
- ・手洗い、うがいをするよう1日に何回も呼びかけていて大変だと思った。
- ・おままごとセットの扉や食べ物のおもちゃなど、細かいところまで消毒を行っていた。
- ・大切な子どもや保護者の方、先生自身がコロナウィルスに感染しないよう色々な案を考えているのだと思いました。
- ・コロナ感染対策で子どもたちにこまめに手洗い、うがいを呼びかけて、保育者は子どもたちの使ったおもちゃを消毒するために一つ一つ拭いていて、対策は工夫されていると考えられた。
- ・子どもの命保育者の命を守るため大切なことであると思った。
- ・毎日机や椅子を消毒するのは大変だと思った。先生自身も感染しないようにしていると思った。
- ・子どもたちがいつも通りグループでご飯を食べることができるよう、手洗いうがいの強化、消毒の徹底、机をアルコールで拭く、シールドを机に置くなど沢山の対策をされていて子どもたちにとって楽しみの一つでもある給食の時間をいつも通りとることができるようにしているところがよかったなと思いました。
- ・昼食の前は必ず机を消毒していた。
- ・消毒をするよう声かけをしたり、先生方が子どもに直接消毒液を手につけに行っていて大変ですが、大切な行動であり、子どものことを考えた行動だと思いました。
- ・給食の時に子どもが向かい合って食べないようにしていたところが、感染症予防をしっかりしているところだと思った。
- ・先生方が園児の身の回りの清潔を心がけ、テーブルや窓トイレ掃除をしている事がわかり、大変だと思った。アルコール消毒も手が触れる場所をされていて大変だと思った。

- ・大変だと思ったし、コロナの影響でやめた活動などもあったと思うので、工夫しなくてはならないと思った。
- ・子どもの体調について連絡帳を通して保護者との連携を行うことは、子どもの健康状態を知るために大切だと思いました。
- ・必ず帰ってきたら消毒を心がけ、なるべくマスク着用としていた子どもたちに対してコロナ対策をしっかりと行っていると思いました。
- ・手指のアルコール消毒をご飯の前にしていた。やらない子が出ないように、先生が一人ひとり回っていた。
- ・大変だと思う。
- ・コロナ対策で消毒やマスクは徹底していた。また、おもちゃは1回使用したら消毒をしていた。先生方もいつも以上に仕事内容が増えて大変と言っていた。しかし子どもと先生は密になっていた。密にならないよう意識はしていたと思う。
- ・子どもたちがコロナ以外にもいろんな感染症や病気にかからないように、換気、手洗い、うがいを徹底していて、先生たちは、子どもたちの安全を第一に考えているんだなと思った。
- ・子どもの安全を考えて行われていることなので、コロナ収束後も続けて行くべきだと思った。
- ・日頃の配慮や言葉かけを行い、子どもにコロナの意識や新しい生活様式を認識させることで、感染拡大をすこしでも防ぐ事ができていると感じた。
- ・先生方が徹底したコロナ対策（机と机を離す、登園時、降園時、給食時の手の消毒、おもちゃのぬいぐるみの消毒等）を行っていて、子どもを一番に考えて行動していることにすごいと感じました。
- ・子供からの感染を防ぐために消毒は念入りにしていた。玄関でのお出迎えは、少しでも、接触しないようにと配慮されていると考えた。
- ・この時期、コロナだけではなく、インフルエンザなども流行し始めるので、アルコール消毒などは徹底されてきていると思った。
- ・子どもの最善の利益を常に考えていた。
- ・お遊戯会が縮小になり、園のホールで行う学年があったため、構成を考えたり、見え方を考えたりというのを園全体で考えていた。
- ・消毒を毎日隅々まで行っていて大変だと思った。
- ・園内に入るときやクラス活動の前後、昼食前降園時など、いろいろな場面で消毒や手洗いうがいを行っていた。先生が言う前に子ども自ら消毒を行っていて、身につけていると感じた。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての一考察
—「保育原理」における質問紙調査から—
**A Consideration of “Quality to Develop by The End of The Early
Childhood” : From a Comparison The Questionnaire Survey in
“Childcare Principles”**

本多 舞 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

2017年3月に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が同時に改訂され、2018年4月から実施された。今回の改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示されたことが1つの目玉となっている。そこで本稿では、「保育原理」の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について扱う際、学生が10の項目についてどのように捉え、特にどの項目に注目しているのかを把握してから解説するため、学生への質問紙調査を行った。調査結果から、学生は10の項目の中で「健康な心と体」を最も重要と考えていた。この結果を踏まえて、学生に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目について深く理解してもらうための教授法について検討した。

キーワード:「保育原理」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、相互的・横断的学習

1. はじめに

2017年3月に同時に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下10の姿）」が共通して明示されたことが特徴の1つとなっている。「10の姿」は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」からなる5領域の中で5歳児の終わりまでに育みたい姿を10の項目に落とし込み、具体的に整理したものである。

「10の姿」は、10の項目について1つずつを5歳児の終わりまでに身につけさせることを目的としているのではなく、10の項目や5領域を相互的かつ横断的に育むことが望まれている。

また指導要録に関しても、以前は主に5領域に鑑みて子ども1人ひとりの育ちの記録を記述していたが、2017年に「幼稚園教育要領」等が改訂されたことで5領域のみならず「10の姿」も念頭に置きながら指導要録を作成することが求められるようになった。

本学での「保育原理」は1年次後期に履修する必修科目となっており、授業の中で5領域や「10の姿」について扱っているが、筆者は今年度初めてこの科目を担当することになったため、これらを解説するにあたり学生が「10の姿」をどのように解釈しているのかを把握した上で授業を行いたいと考えた。

そこで本稿では、「10の姿」を学生がどのように理解し捉えているのかを明らかにするため、学生への質問紙調査を行い、学生は「10の姿」をどのように捉え、特にどの項目に着目しているのかを明らかにする。さらに、授業の中で「10の姿」について学生が深く理解してもらうための効果的な教授法について検討することを目的とする。

2. 研究方法

はじめに、「10の姿」の意義や重要性について先行文献より整理する。次に、学生への質問紙調査結果をもとに、学生が「10の姿」をどのように捉えているのかについて考察し、就学前教育で育むべき資質・能力について検討する。

2-1 調査対象と方法

実施時期：2020年12月24日（木）の「保育原理」授業終了時

調査方法：質問紙調査

調査対象：本学幼児保育学科1年生127名

2-2 質問内容

「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）』の中で、あなたが特に重要だと思うものについて、第1位から第3位まで選び、それぞれ選んだ理由を書いて下さい。」

『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）』に関するアンケート	
・「10の姿」の中で、あなたがとても大事だと思うものについて、第1位～第3位まで選び、それぞれ選んだ理由を書いて下さい。	
第1位	<input type="text"/>
第1位にした理由	<input type="text"/>
第2位	<input type="text"/>
第2位にした理由	<input type="text"/>
第3位	<input type="text"/>
第3位にした理由	<input type="text"/>
アンケートへのご協力有難うございました。	

図1 アンケート用紙

2-3 分析方法

学生への質問紙調査結果から、学生の「10の姿」に対する捉え方の傾向を考察した上で就学前

教育において必要とされる資質・能力について考察し、学生の捉え方との差異について検討する。さらに第1位を選んだ理由について User Local AI テキストマイニング（ユーザーローカル社）を用いて計量テキスト分析し、単語出現頻度のスコアを用いて考察する。

3. 結果

3-1 「10の姿」の意義

無藤（2018）は、就学前教育において育みたい資質・能力とは、子どもの日々の活動において見られる特徴のことで、さらに子どもの学びを促して長期間での育ちにつながっていくものだと述べており、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では以下のように示している（表1参照）。

表1 就学前教育において育みたい資質・能力の捉え方

知識及び技能の基礎	豊かな経験を通じて幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすること。
思考力、判断力、表現力等の基礎	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること。
学びに向かう力、人間性等	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること。

出典:幼稚園教育要領（2017）・保育所保育指針（2017）・幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2017）より引用

保育者は、上記の資質・能力について園内で共通理解を図り、これらを子どもたちが自主的に育むことができるよう日々の遊びや活動を計画、実践していくことが大切である。

また、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を具体化した「10の姿」の10項目は以下の通りである（表2参照）。

表2 「10の姿」

健康な心と体	思考力の芽生え
自立心	自然との関わり・生命尊重
協同性	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
道徳性・規範意識の芽生え	言葉による伝え合い
社会生活との関わり	豊かな感性と表現

出典：幼稚園教育要領（2017）より引用

「10の姿」は、幼児期において育みたい資質・能力を具体化したものであるが、これらすべてを個別に伸ばすことや小学校入学までにすべて達成しなければならない目標というわけではなく、10項目すべてが相互的かつ横断的に育まれることが望まれ、「10の姿」は達成すべき目標ではなく、保育者が教育・保育する際に考慮すべきものとして捉える必要がある。「健康な心と体」という項目があるから「早く走ることができるようになる」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」という項目があるから「ひらがなをすべて読めるようになってほしい」といった具

体的な内容を目標とするものではない。例えば泥遊びの中で、体を動かすことの楽しさなどに気付くよう「健康な心と体」、土、泥、水などの自然やそこに集まる虫たちと触れ合ったりすることで「自然との関わり・生命尊重」の大切さに気付かせる、といった日々の遊びや活動におけるねらいと「10の姿」をすり合わせながら、さらに子どもたちの発達を促す活動を考慮するような試みが大切となる。

一方で「10の姿」は子どもたちの資質・能力を育むだけでなく、保育者にとってもこれまでの保育を振り返るための資料として活用することもできる。ベネッセ教育総合研究所（2017）の中で大豆生田は「育ってほしい姿」というテーマで園内研修を行い、「10の姿」を用いて自園でできていること、十分とはいえないことを話し合うことで園の改善点が見えるのではないかと述べている。例えば、園でこれまで実践されてきたことを「10の姿」に落とし込み、園の方向性が同じ方向に向かっているかを評価し、改善に生かすことが大切である。

さらに大豆生田は、「10の姿」の視点から園での活動を見直す際は、集団と個人の2つの側面から振り返ることを提案しており、ガラスと子ども一人ひとりを対象としてそれぞれ振り返ることの重要性を述べている（ベネッセ教育総合研究所 2017）。

以上をまとめると、園の中でこれまでに行われてきた実践内容と「10の姿」の方向性を確認し、さらに改善していくための方法や目指すべき目標を明確にして、園全体で共有することが期待されているといえる。

3-2 本学における「保育原理」について

本学では「保育原理」を1年次後期の必修科目として設定している。この科目では、保育の意義や幼稚園・保育所・認定こども園について、諸外国及び日本における保育の歴史等について学ぶが、その中に「保育の目標と方法」というテーマが含まれており、この時間に5領域や「10の姿」について解説した。その後、以下の資料を用いて、この活動の中でどのようなところが5領域や「10の姿」に触れた内容だったかを学生たちに考えさせ、発表する機会を設けた（表3参照）。

表3 授業で使用した資料（東京都E幼稚園の実践事例）

<p>【活動意義】 いろいろな木の実やどんぐりに触れ、親しみ、工作し、命のつながりや森の不思議を感じる。</p> <p>【実践内容】 Mちゃんが「どんぐり拾いに行ってきました」と、袋いっぱいのだんぐりを持って登園した。丸いの、細長い、大きい、小さい、くぬぎやあかがしなど、いろいろなどんぐりを持ってきた。折しも「先生、どんぐり見つけたよ」と、園庭のすだじいの木の周囲から子どもたちが走って来た。小さなどんぐりを持って、「これ、食べられるんだよね」と言う年長は、昨年の経験から、もう皮をむき始めている。真っ白な実が見えると、早速かじって味わう。「ちょっと梨みたい！」。</p> <p>届けられたたくさんのどんぐりを箱に移すと、子どもたちは大きさ別、形別、種類ごとに集め始めた。普段どんぐり拾いに行く里見公園には、小さい椎の実ばかりなので、他種類のドングリがあると工作などでもとても範囲が広がり便利だ。</p> <p>皆が集まったところで『どんぐり』（こうやすすむ作 福音館書店刊）の絵本を読む。この絵本では、リスがたくさんどんぐりを拾ってきて、後で食べようと思って土に埋めておくが、中には忘れられてしまう実があり、そうしたどんぐりの中の、ちょうどよい深さに埋められたものから、芽が出て、新しい木が育つ話が出てくる。リスたちは、自分でそうとは意図せず地面に埋めて、知らない間に森を育てている。子どもたちは、どんぐりを通して、そんな自然の仕組み・つながりの深さ、森の生命の不思議・連環へと誘われていく。さらに『どんぐりだんご』</p>
--

(小宮山洋夫作 福音館書店刊)を読む。ここではどんぐりを使ったさまざまなおもちゃ、こま、やじろべえ、にんぎょう、ネックレス、それにどんぐりだんごの作り方が分かりやすく描かれており、子どもたちはますます身を乗り出してくる。するとSちゃんが「お母さんが煮てくれて食べたよ」と体験談を披露。どんぐりは、3度も4度も煮て、灰汁を取ってからでないと食べられないことを、お母さんが作ってくれたことで、よく理解しているSちゃん。そして実際に経験したSちゃんの話聞いて、他の子どもたちもより身近なものとして受け止めたようだ。どんぐり遊び、どんぐり工作も始まった。「こまを作ろう」と錐で穴を開ける。もちろん錐で穴を開けるのは、教員である。子どもたちは、どんなふうにしたらいいのか、どこにどんな穴が必要なのか、自分で考えて教員に注文する。コマにするための楊枝を刺す穴、やじろべえを作るための貫通した穴、「こことここ、」5つの穴を指示した子が作ったライオン。見事な作品になった。くぬぎの袴は、まさにライオンの頭！一つの取り組みから、アイデアが広がり、どんどん発展してゆく。くぬぎのどんぐりごまは、とてもよく回る。定番のドングリのネックレスやケーキの飾りや、次々と、遊びが広がってゆく。

3-3 「10の姿」に対する質問紙調査

現在、幼稚園幼児指導要録、保育所児童保育要録、幼保連携型認定こども園園児指導要録すべてにおいて5領域に加え「10の姿」を踏まえて子どもの成長の様子を可視化するように求められている。筆者は今年度初めて「保育原理」を担当することになり、授業の中で「10の姿」について扱うこととなった。しかしながら、学生たちがこの10項目についてどのように捉えているのか、どの項目に興味があるのか、学生の意識を考慮した上で「10の姿」について解説しようと考えた。そこで本節では、学生への質問紙調査結果について明らかにする。

2020年12月24日(木)に行われた「保育原理」の授業には、本学幼児保育学科1年生127名のうち113名が出席しており、授業後に実施した質問紙調査から105名の回答を得ることができた(回答率約93%)。質問内容は「10の姿」の中で自分が特に重要と考える項目の第1位～第3位を選び、その理由を記述するものである。調査結果は以下の通りである(図2参照)。

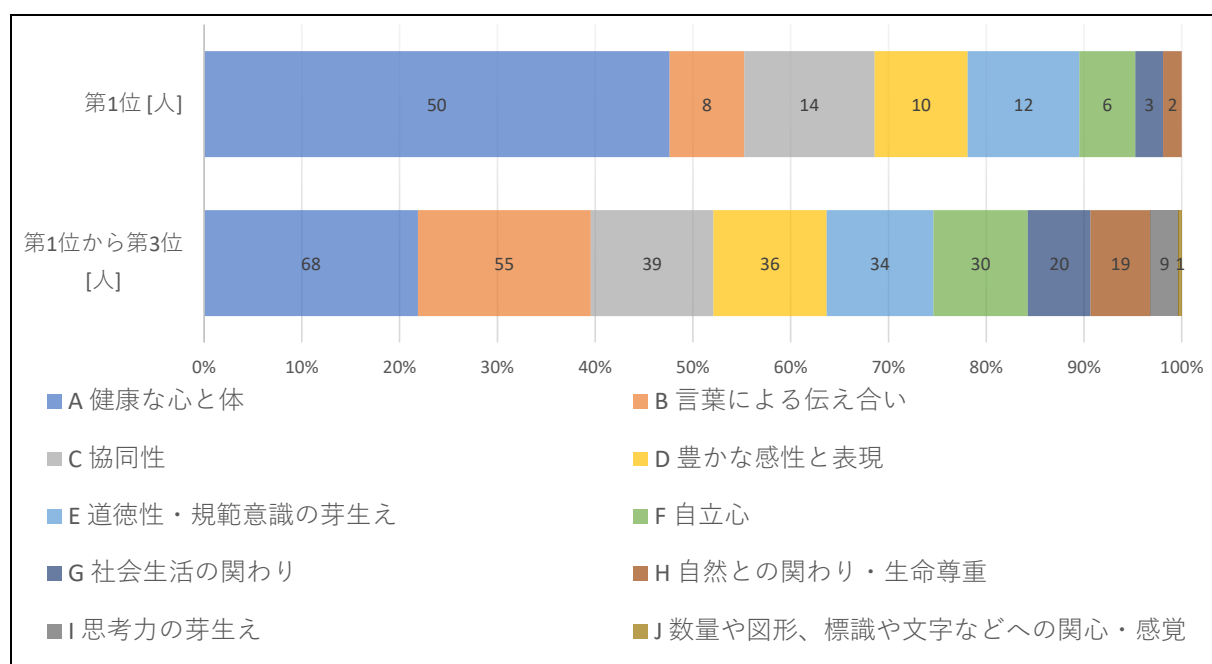


図2 学生への質問紙調査結果

第1位、第1位～第3位の結果は共に「健康な心と体」と回答した学生が一番多く、第1位では次に「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「豊かな感性と表現」と続く。一方、第1位～第3位では「言葉による伝え合い」「協同性」「豊かな感性と表現」となっている。

次に、第1位を選んだ理由についてUser Local AIテキストマイニング（ユーザーローカル社）を用いて計量テキスト分析した。

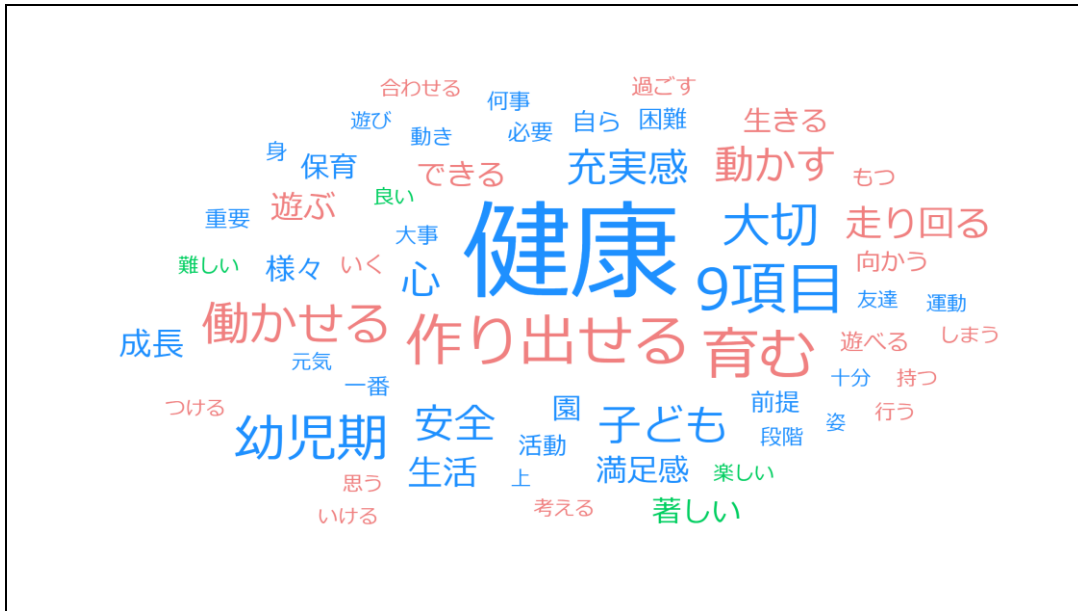


図3 第1位に「健康な心と体」を選んだ理由のワードクラウド (n=50)

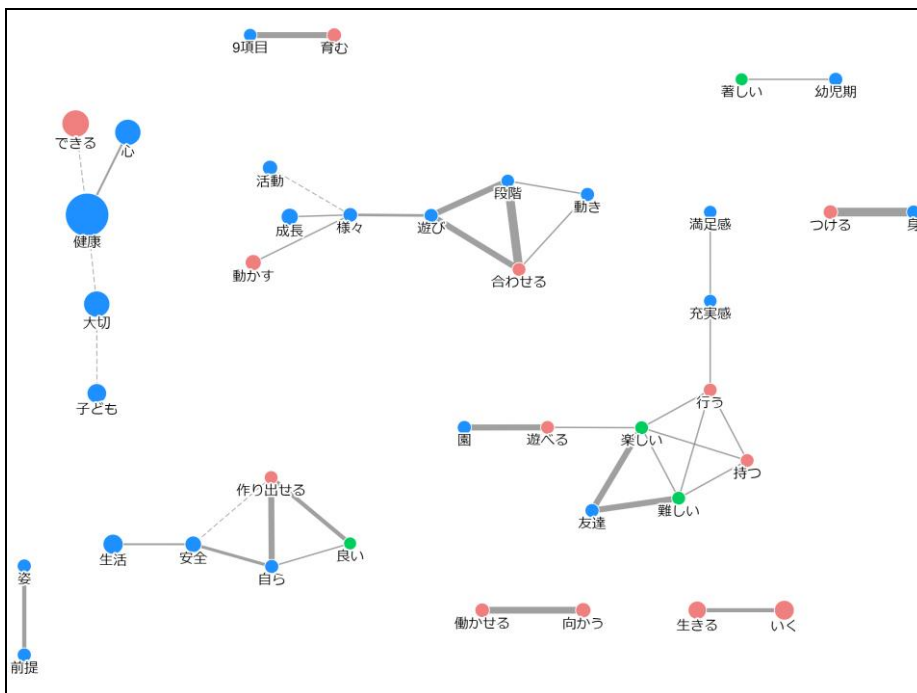


図4 第1位に「健康な心と体」を選んだ理由の共起キーワード (n=50)

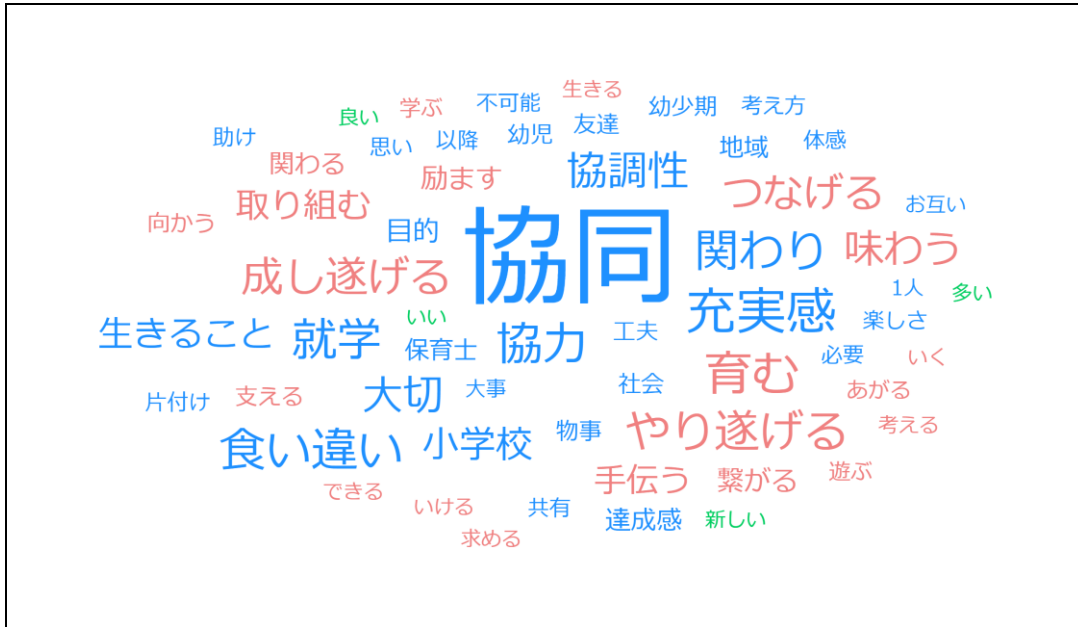


図5 第1位に「協同性」を選んだ理由のワードクラウド (n=14)

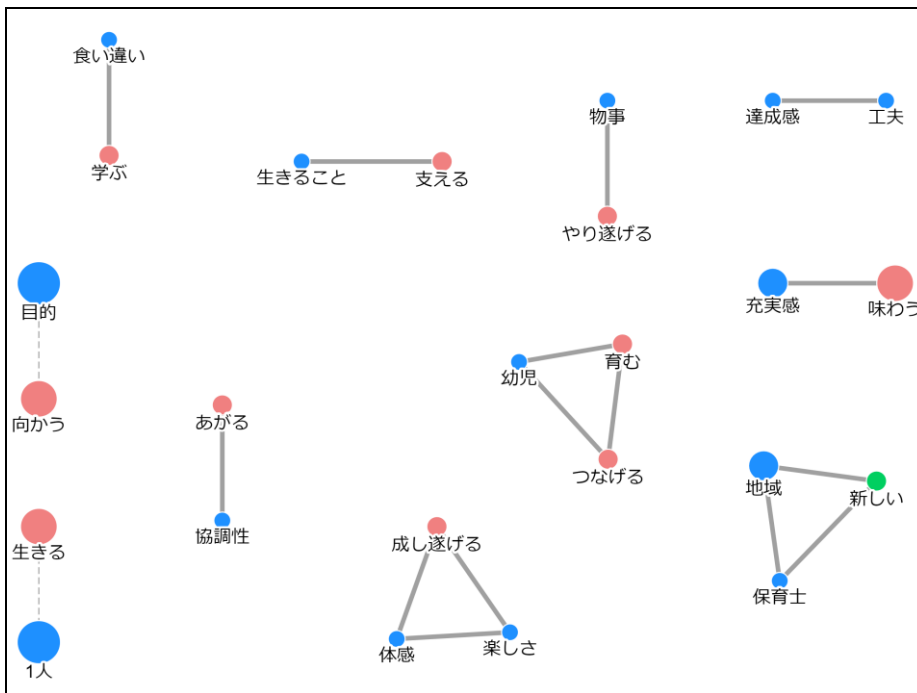


図6 「協同性」を選んだ理由の共起キーワード (n=14)

4. 考察

4-1 学生の「10の姿」に対する捉え方

図1に示した調査結果を見ると、第1位および第1位～第3位のどちらも「健康な心と体」が圧倒的に多いことが分かる。また、第1位は「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」と続き、第1位～第3位では「言葉による伝え合い」「協同性」と続く。また、「健康な心と体」を選んだ理由をテキスト分析した結果、ワード

クラウドで「健康」「9項目」「育む」「作り出せる」「大切」「幼児期」「充実感」が大きく、共起キーワードでは「健康」「大切」「心」「できる」「子ども」「生活」「成長」が大きい。さらに、学生の質問紙の記述から「心や体が健康でないと他の9つの項目ができない」「健康であることが何より大事（幸せ）なこと」という理由が最も多かった。

また「協同性」については、ワードクラウドで「協同」「充実感」「関わり」「食い違い」「協力」「就学」「協調性」、共起キーワードでは「目的」「一人」「味わう」「向かう」「生きる」「地域」「充実感」が大きい結果となった。学生の質問紙の記述からは「人間は一人では生きていけないから」「人と協力することは、今後の人生にも繋がるから」「目的を達成したときの充実感（達成感）を味わえるから」といった理由が多かった。

この結果を踏まえると、「10の姿」のすべての項目を実践するためには、まず心と体が健康でなければ何もできないと考えている学生がほぼ半数いることになる。また、10項目のうち特に大切だと思う3つの項目として「健康な心と体」以外に「言葉による伝え合い」「協同性」をあげる学生が多いことも明らかとなった。また、学生は友達との意見の食い違いなどを経験しつつも、人との関わりやみんなで協力し合うことで達成される充実感の重要性も認めている。このことから、子どもたちが言葉で相手に自分の気持ちや考えを伝えることの大切さや、周囲の人と協力して物事を成し遂げる達成感を体験してもらいたいと強く考えている学生が多いといえる。

一方で、「思考力の芽生え」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」は第1位として1人も選ばなかった。この結果から、本学においては、教育的な項目より人間形成の基礎を就学前教育現場で大切にしたいと考えている学生が多いことが伺える。思考力を伸ばすことや、数量・文字に関心を持ったり覚えたりする学習的な項目より、健康、協同性、道徳性などの社会性を重んじる項目に関心を持っているということは、OECDで定義されている「就学準備型」と「生活基盤型」教育に置きかえれば、「生活基盤型」の保育・教育を好む傾向があるといえる。

4-2 「10の姿」の教授法について

本学学生への質問紙調査から、「思考力の芽生え」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の事項に対しては、教育的なイメージを持っている学生が多いことが予想された。しかしながら、本来「10の姿」の中で考慮すべき項目は、すべて日々の園生活や活動の中で自主的・自発的に育まれるよう、保育者が立案・計画・実践していく必要がある。例えば、表3の実践事例のように、どんぐりでこまを作る際にどこにどのような穴をあけるのか、どのような作品に仕上がるのかを子どもなりに想像し、考えたことを先生に伝えていく。このような事例こそが思考力を育む活動の一つである。同様に、表3の事例の中で「子どもたちがどんぐりを大きさ別、形別、種類ごとに集め始めた」というくだりがあるが、この活動自体が「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の一環である。

白石ら（2020）は、「10の姿」は到達目標としてではなく、指導を行う際に考慮する方向を示すものとして明示された事柄であると述べている。「10の姿」ありきで活動を考えるのではなく、表3の事例のように、子どもたちが自主的・自発的に様々な資質・能力を育めるような活動内容や方法を検討し、ねらいや活動を計画した上で、その内容が5領域や「10の姿」を相互的・横断的に網羅しているのかを考慮し、活動終了後に保育者が振り返るための評価規準の一つとして活用することが重要だといえる。

そのためには、保育者養成校で「10の姿」について説明する際、幼保3法令などを解説するだけ

でなく、表3のような実践事例を学生に提示し、事例のどの場面がどの領域や項目に触れているのかを話し合うことや、5領域や「10の姿」を踏まえた活動のアイデアを、クラス全体で出し合ったり発表したりする機会を設けることが望まれる。このような機会は、それぞれの学生の個性に合った活動を検討することができ、自分では考えつかなかったアイデアをクラスメイトが発表しているのを見聞きし、様々な刺激を受け、保育方法の引き出しが増えることが予想される。また、保育方法の引き出しを増やすには、保育者自身が五感に敏感であること、季節や行事を楽しもうとする気持ち、感性が豊かなことなどが求められる。そのためには、保育者養成校の授業の中で、学生の五感を磨くことができる活動や知識を享受できるよう考慮することが求められる。

また大豆生田（2017）が述べているように、「10の姿」は園内研修やカリキュラム・マネジメントを検討する上での共通項として用いられる可能性もあるため、保育者養成校において学生が「10の姿」の各項目を深く理解できるような授業展開を検討する必要がある。

5. おわりに

本稿では、2017年に改訂された幼保3法令で注目されるようになった「10の姿」に着目し、学生への質問紙調査から、学生の10項目に対する捉え方を明らかにし、授業の中で「10の姿」を深く理解してもらうための教授法について検討してきた。「10の姿」は、子どもの発達過程における目印という意味合いだけでなく、保育者にとっても保育・教育を振り返るための大切な指針として活用することが重要であることが確認された。昨今のグローバル社会に対応できる子どもたちの育成のため、今後は世界にも目を向け、5領域や「10の姿」と類似するまたは相違のある国々の就学前教育で目指されている領域や項目についても明らかにし、日本との比較を行っていききたい。

引用・参考文献

- 井口眞美（2020）「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を保育の質向上に活かすために」『実践女子大学生生活科学部紀要第57号』, pp.19-36
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針』フレーベル館
- 汐見稔幸（2019）『10の姿で保育の質を高める本』風鳴舎
- 白石昌子・佐藤久美子・星俊子・遊佐早苗・大和田祥加（2020）「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』についての一考察：3歳から5歳の発達の姿を通して」『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』, pp.9-17
- 内閣府（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館
- 無藤隆編著（2018）『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』東洋館出版社
- 「育みたい『10の姿』から考える幼保3法令改訂（定）」（2017）こどものとも社
- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』フレーベル館
- ベネッセ教育総合研究所（2017）『これからの幼児教育 2017 春 Spring 特集ニッポンの幼児教育は、どう変わるのか?』
- http://berd.benesse.jp/u_images/magazine/KORE_2017_spring_all.pdf（2021年1月20日閲覧）

子ども理解を深めるためのドキュメンテーションの活用

Utilization of Documentation to Deepen Children's Understanding

牧野和江 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本研究では、学生の子ども理解を深めるために二年次の必修科目である「保育内容総論」の授業の中でドキュメンテーションを導入しその効果を調べた。ドキュメンテーションを導入しなかった「保育と計画と評価」の授業方法では、文書記録による子ども理解のため生き生きと活動する子どもの姿が読み取れていなかった。ドキュメンテーションを導入したことによって、目に見える結果や現象だけに捉われず、なぜ子ども達はそうしたのか、その行為の背後にはどのような気持ちがあったのか、どうしたらもっと良い遊びの展開にできるか、他にどのような援助ができるかなど子ども理解のための重要な視点が得られていることがわかった。

キーワード: ドキュメンテーション・子ども理解・学び・質の高い保育

1. はじめに

幼児教育の中にも最近ではドキュメンテーションという言葉が定着してきた。本来、document は文書という意味、また documentation は記録することという意味になる。保育の記録を作るというだけではなく、別の意味も含んでいる。実践者が自分の保育を見直し、語り、写真や子どもの作品を織り交ぜることもある。保育の改善を図ることを形成的なアセスメント (formative assessment) と言っている。実践を見直して良くするためには、自分たちの保育記録を取り、見返す、子どもがどのようにしていたか、保育者はどのようにかかわったか見直す。どうすれば質の高い実践に持っていけるかを考える。そのためには、まずは子どもの学び、活動の集中、学んだか学ばなかったかを見るのがアセスメント (assessment)、そして、指導計画をたてる (planning)、実践を評価する (evaluation) というプロセスとなる。この手法を授業に取り入れることにより学生自身が講義での学びと現場からの学びそれぞれの重要性に気づくであろう。また、平成 27 年度から「子ども・子育て支援新制度」が施行されたが、本制度では、その大きな柱として「保育の量の拡充」とともに「保育の質の向上」が掲げられており、「保育の質」というものをどのように捉え、その質の向上をどう図っていくかについて様々な方向から議論されている。

本学の「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ」「教育実習指導Ⅰ・Ⅱ」「保育内容総論」などの授業において子ども理解を指導案上から読み取っていた。学生たちは、文字に表されている内容だけでは子どもの思いまでめぐらすことが困難であった。そこで本研究では、保育者養成における学びの過程で、学生が主体的に、アクティブに学習を深める手がかりとしてドキュメンテーション (子どもたちの活動や保育の過程を可視化した記録) からどのように子どもを理解するかを調べることにした。

2. 調査方法

2-1 調査対象及び日時 埼玉県内のK短期大学2年生 104人 2020年11月調査

2-2 授業の方法 ドキュメンテーションを導入しての効果調べた授業の概要

2年次必修科目「保育内容総論」の授業の中で、学生たちに「ドキュメンテーションから子ども理解」の授業を行った。授業の流れは次の通りである（図1）。

時間	授業展開（コロナ感染予防の為授業時間は60分間）
5分	本日の授業内容説明
5分	4人グループになり自己紹介（9グループ）
3分	フォトカンファレンス…園庭で女兒二人が砂場道具を使って遊んでいる写真を示す。（図2）
7分	学生達は思い思いの感じたことを話す。
	遊びの題名を決める。
15分	どんな遊びの内容なのかを読み取り、グループ用紙1を使用し付箋紙に記入し貼る。
	保育者の支援や配慮について感じたことを、グループ用紙1を使用し付箋紙に記入し貼る。
5分	読み取った遊びの内容から、技術的な面、コミュニケーション力、遊びの深まり、その他、項目別にグループ用紙2に付箋紙を分ける。
5分	保育者としての支援、環境設定、次の日の保育につながるための配慮や準備はどのようなことが必要なのか項目別にグループ用紙2に付箋紙を分ける。
	グループ用紙3にまとめる。
15分	グループで再確認をして、2グループ発表する。（他グループは次回授業にて発表）
	まとめと課題

図1 授業の流れ

学生に図2の写真を提示する。



図2 4歳児女児二人が園庭で泥水をかき混ぜて遊んでいる

学生たちは付箋紙に思い思いの感じたことを記入し図3の用紙に貼る。

ドキュメンテーションからグループカンファレンスを通した子ども理解	
遊びの題名	子ども達にどんな声かけをしますか
どんな遊びをしていますか	保育者の援助

図3 グループ用紙 1

図3のグループ用紙1に貼られた付箋紙を図4グループ用紙2の内容別に並べ替える。

ドキュメンテーションからグループカンファレンスを通した子ども理解	
遊びの題名	
1 この遊びの中にはどのような学びがありますか	2 保育者としての援助はどのようなことが必要ですか
① 技術的な面	3 環境設定としてどのような配慮や支援が必要ですか
② コミュニケーション力	4 次の日の保育に繋げるためには配慮や準備することはどんなことですか
③ 遊びの深まり	グループ参加者名
④ その他	_____

図4 グループ用紙 2

2-3 学生の理解度 質問紙調査を通して学生の理解度を探った。

- (1) 質問紙① 写真を通して、子どもの遊びは想像できましたか？
- (2) 質問紙② 子どもの遊びの中に学びがあることが理解できましたか？
- (3) 質問紙③保育者になった時に、ドキュメンテーションを保育の中で使いたいと思えたか。

3. 結果

3-1 授業でみられた学生の変容

自己紹介では、普段親密に話したことがないことからグループ討議に対して「好きなグループで行いたい」と抵抗を見せたが、「いろいろな人と関わることによって自分の考えに共感したり、互いに気づかされることがある。」ことを伝えると、学生は納得したように自己紹介を進めていた。筆者は、学生の発言を受け止めながら、話し合いの中に入り、発言内容を認めた。

学生たちは、幼児の遊んでいる写真から各自がそれぞれ感じたことをグループ内に伝える。学

生は、同じ考えを持っていることで親近感を感じ、自分の想像したことが相手に伝わり認められたことで、自信となり活発な話し合いが展開された。

写真を共有し合う中で遊びの題名を決める際に、グループによっては子どもの気持ちになって「セリフ」を言い合ってどんな話をしているのか付吹き出し的に考えているグループがあった。



図5 学生のつけたセリフ

学生達が考え出した吹き出しから、より子ども理解に繋がる言葉が付箋紙に書かれていた。吹き出しにすることによって、子どもの気持ちに近づいていた。

学生達は、子どもになってセリフを楽しみ、何の遊びか、遊びの題名を付けた。遊びの題名を付けることによって、子ども達の学びが明らかになってくる。さらに、どんな遊びの内容かを読み取り、保育者の配慮や支援について感じたことを付箋紙に記入し貼った。

3-2 授業でみられたグループ用紙1の問についてAグループの話し合いの結果

学生達は写真を見て気付いたことを付箋紙に記入し貼っていった。

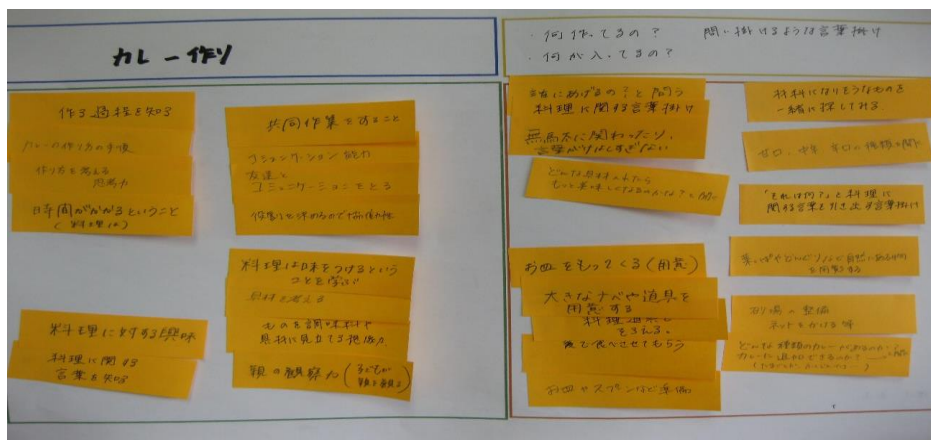


図6 グループ用紙1 「カレー作り」

【子ども達にどんな声掛けをしますか？】

- ・「いい匂いだね！」
- ・「おすすめは何ですか？」
- ・「甘口ですか？中辛ですか？辛口ですか？」
- ・「どんな種類のカレーがあるの？」
- ・「後で食べさせてね」
- ・「どんな材料を入れるともっとおいしくなるのかな？」

【保育者の援助】

- ・材料になりそうな葉っぱやドングリなど自然にあるものを用意する。
- ・大きな鍋や道具を用意する。料理道具を揃える。（お皿・スプーン等）
- ・材料になりそうな物を一緒に探してみる。
- ・料理に関する言葉を引き出す声掛けをする。
- ・二人の活動を認める言葉かけをする。「〇ちゃんと△ちゃんのお店は、おいしいカレー屋さんですね」「こげないようにかき混ぜて上手」
- ・むやみに言葉かけはしない。時には見守ることも必要である。
- ・砂場の整備を日ごろからしておく。（安全面）
- ・降園時に「カレー屋さん」の絵本の読み聞かせや手遊びをして興味を高める。
- ・降園時に他の子ども達の紹介となり、他の子ども達も遊びたいという意欲が持てるように二人の遊びを紹介する。

3-3 授業でみられたグループ用紙1の間についてBグループの話し合いの結果

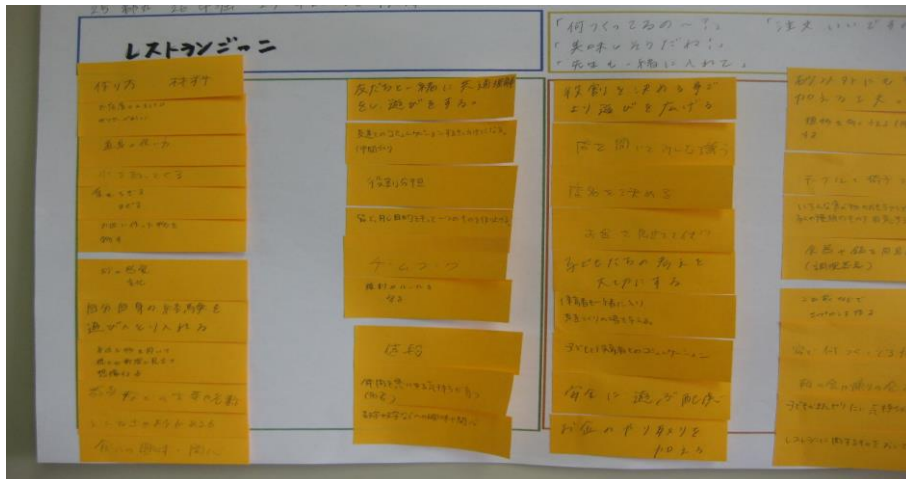


図7 グループ用紙1 Bグループ「レストランごっこ」

【子ども達にどんな声掛けをしますか？】

- ・「おいしそうだね」
- ・「何を作っているの？」 「注文していいですか？」
- ・「先生も仲間に入れて！」

- ・「〇ちゃんと△ちゃんでお見せしているの？」

【保育者の援助】

- ・子ども達の考えを大切にすること。
- ・保育者も一緒に入り、友達作りの場になるように声掛けをする。
- ・砂以外にも葉などの自然物・水を加える提案をして、いろいろな食べ物のメニューに気づかせる。
- ・テーブルやいすなどを準備することで活動が明確になる。
- ・必要な食器や鍋などを子どもと一緒に準備することで、遊びが広がる。
- ・安全に遊ぶように、他の遊びとぶつからないように気を付ける。（コーナー等の柵を準備）
- ・役割がわかるようにエプロンなどを準備する。
- ・子ども達が「また、やりたい」という気持ちになれるように、子ども達の活動を言葉かけし認める。
- ・お金やレストラン名などの看板を作りたくなった時の準備をしておく。

Aグループ「カレー作り」Bグループ「レストランごっこ」と子ども達の姿を見て学生たちは上記のような具体的な声掛けや保育者としての支援内容が出された。どちらのグループも子どもの思いを大切にする配慮が見られた。



図8 グループ用紙1に自分の考えを貼る学生の姿

3-4 授業でみられたグループ用紙2の間についての結果

学生達は、それぞれが読み取った子どもの学びを内容別に整理しなおして、互いにその内容について話し合いを進めた。「その子にどんな思いや力が育っているのか」「この先の支援は？」など掘り下げて話し合いを進めた。

子ども理解の深まりについて、Aグループ「カレー作り」を具体的に取り上げ検証した。子ども達の思いを想像し、子どもにとってどのような学びがあるのかを「グループ用紙3」で明確にした。

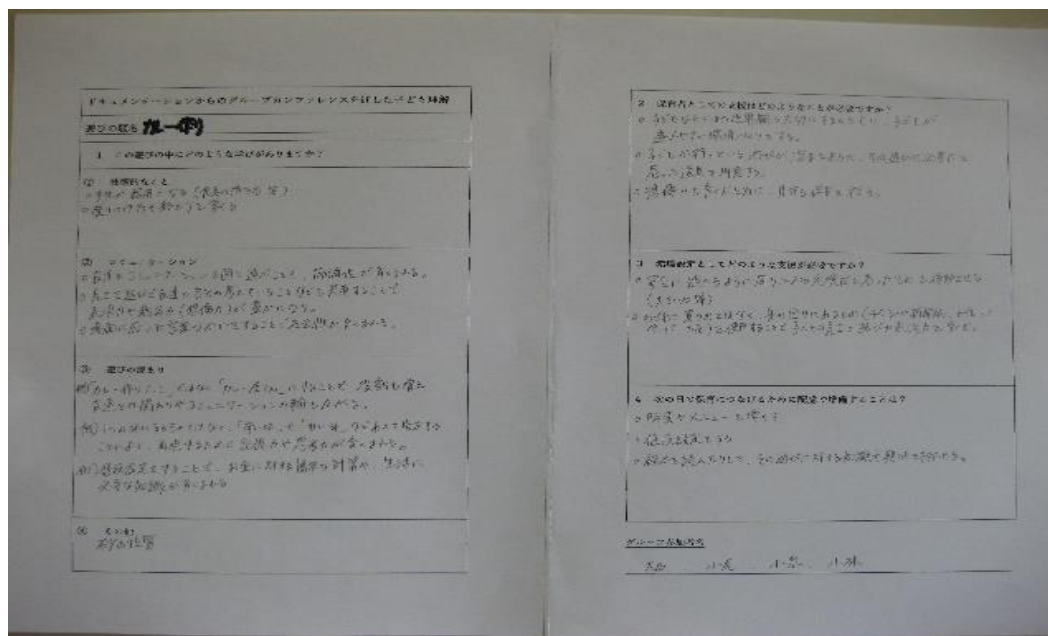


図9 グループ用紙3

【この遊びの中にどのような学びがありますか？】

- ① 技術的な学び
 - ・手先が器用になる（持つ、握る、かき混ぜる、静かに流す、指先で少しずつ入れる等）。
 - ・指先を使い盛り付け方や彩を考える。
- ② コミュニケーション能力が育つ
 - ・友達とコミュニケーションを図り遊ぶことで、協調性が育まれる。
 - ・見立て遊びで友達と自分の考えていることを共有すること、で表現力や創造力（想像力）が豊かになる。
 - ・場面に応じた言葉使いをすることで社会性が育まれる。（ありがとう・貸して等）
- ③ 遊びの深まりとしての学び
 - ・一つの味にするものではなく「辛い味」や「甘い味」等、あえて指定することにより、再現するための記録力や思考力が育まれる。
 - ・友達と一緒に工夫し、作りあげていくことで達成感が生まれる。
 - ・「カレーづくり」から「カレー屋さん」に遊びが広がる。役割分担ができ、友達とのコミュニケーションの輪が広がる。
 - ・値段設定をすることで、お金に対する興味や生活に必要な知識が身につく。
 - ・友達と遊ぶことで互いの信頼感が生まれ思いやりができる。
- ④ その他
 - ・砂の性質を知ることができる。

- ・砂と水の分量を工夫する。
- ・自然物を取り入れることで木の実などの名前を知ることになり、知識が深まる。
- ・食への興味関心、食事のマナーや挨拶が身につく。

それぞれのグループが子どもの遊びから学びを読み取ったことは、この「ドキュメンテーションから子ども理解」ができたことである。更に学生たちは支援方法について省察を行った。

【支援方法】

- ① 保育者としての支援はどのようなことが必要ですか。
 - ・子どもならではの世界観を大切にするとともに、子どもが遊びやすい環境づくりをする。
 - ・子どもが行っている遊びが深まるように、その遊びに必要な道具を用意する。
 - ・想像力を育むために、時には見守っていることも大切である。
 - ・保育者も遊びに一員として参加し、子ども達の思いに共感したり、工夫していること、頑張っている姿を称賛する。
- ② 環境設定としてどんな支援が必要ですか。
 - ・安全に遊べるように周りにある危険だと思ったものを移動させる。（大きな石・不必要な遊具等）
 - ・遊具だけではなく、いろいろな素材を準備しておく。（自然物、紙皿、広告等）
- ③ 次の日の保育に繋げるために配慮や準備することは何ですか。
 - ・絵本を読んだりして、その遊びに対する知識や興味を持たせる。
 - ・室内外で遊びの繋がりを持たせる為、コーナーを設ける。
 - ・帰りの会で、他児にも「カレーづくり」を紹介する。

この省察からわかるように、学生達はグループで話し合ったことによって、一人では考えつかなかったいろいろな支援方法があることに気付いた。このことは、学生同士の対話も深まり、保育者を目指す学生にとって、重要な学びであった。

3-5 理解度を調べた質問紙調査の結果

(1) 質問紙①「写真を通して、子どもの遊びは想像できましたか？」の結果

アンケート協力2年次113名全員が「想像できた」と回答した。学生は「写真では具体的な子どもの姿が読み取ることができ、子どもの活動がわかりやすかった。」「子どもの表情が読みとりやすく、遊びを想像できた。」「日案では、子どもの様子が反省欄に記入されていても、後で見るとわかりにくい」「文書であると、その人の思いが強くなるので子どもの本当の姿が読み取りにくい」等の声が上がっていた。

(2) 質問紙② 子どもの遊びの中に学びがあることが理解できたか?」の結果

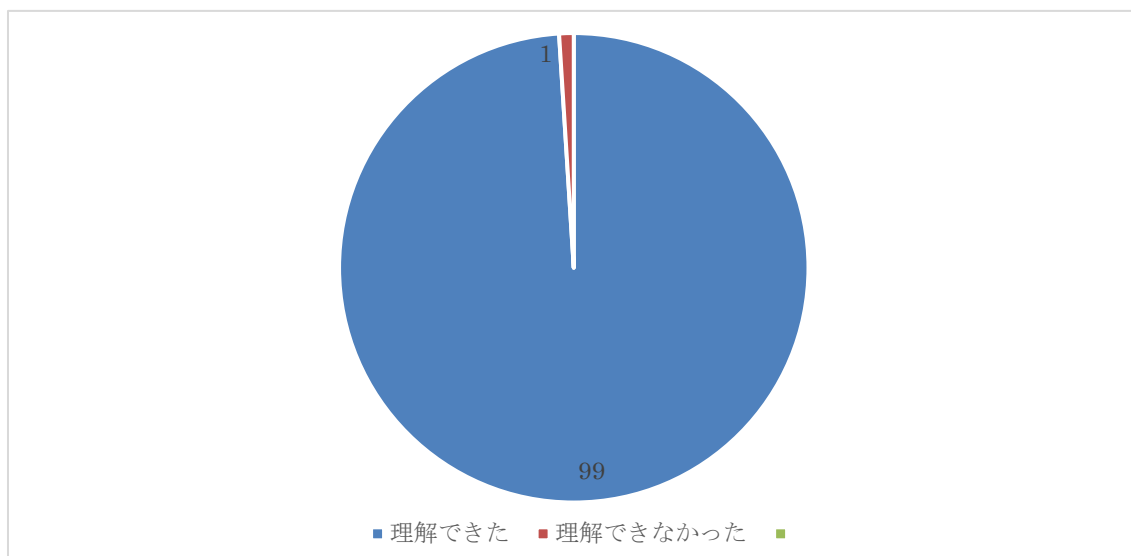


図10 質問紙②の結果

ほとんどの学生は「遊びの中に学びがあることを理解できた」「グループで話し合ったことによって、自分では気づかなかった子どもの学びを知ることができた」と回答をした。理解できないと回答した学生は「子どもの遊びの中には、学びがない時もある」と考え「できなかった」に回答した。

(3) 質問紙③「保育者になった時に、ドキュメンテーションを保育の中で使いたいと思いませんか。」の結果

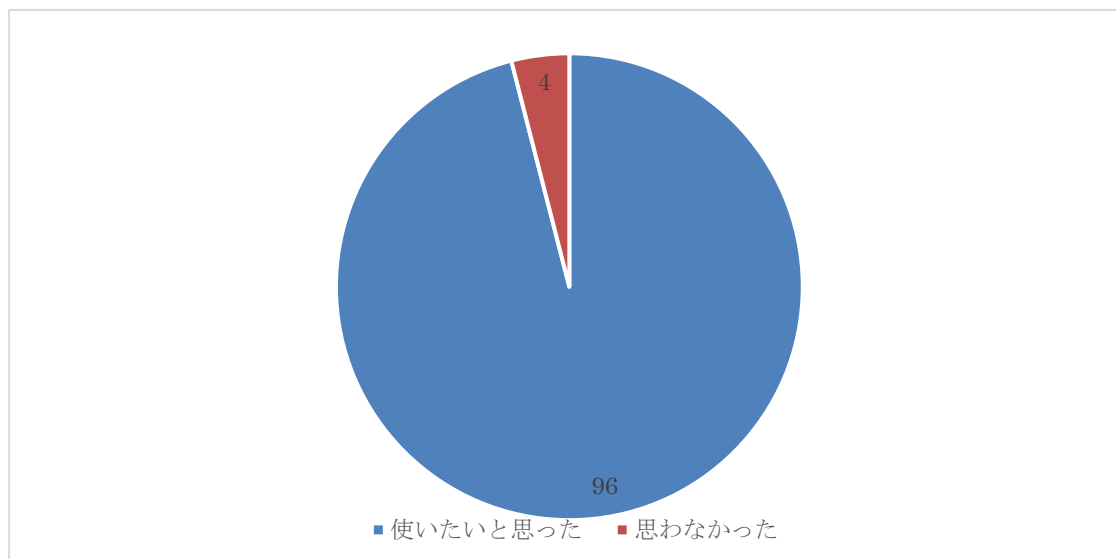


図11 質問紙③の結果

ほとんどの学生は、「先生方で子どもの話や製作の様子など共有できるので使いたい」「日誌が簡略できる」「後で見てもわかりやすい」と回答した。

4名の学生が「思わなかった」と回答があった。「保育するのが精一杯で写真を撮る余裕がない」「1年目で無理です」と、回答があった。

4. 考察

4-1 ドキュメンテーションを取り入れた授業から

本研究の「ドキュメンテーション」を活用した「こども理解」をどのようにするかは、保育の質を高めることに繋がる。「保育の質を高める」ということは子ども達が好奇心や探求心をもって楽しく学ぶということと保育の資質の向上とは切り離せないことである。

学生の「こども理解」についてドキュメンテーションの活用から、学生が自覚する授業を行った結果、学生はグループ学習の中で、思い思いの感性で子どもを捉え話すことができた。(図6) このことから、子どもの遊びの読み取りについて他者から学ぶ機会になり、他者の意見に耳を傾けたり、共感したり、時には「私はこう思う」等付け加えたり疑問に思ったことを伝えたりすることができた。(図9) これは、ドキュメンテーションだから子どもの活動が見え、意見が出しやすかったと思われる。また、付箋紙を使用したことで、自分の考えを発表する機会となった。そしてそれは、友達と共通意識を持って取り組み互いの意見を尊重し合ったことで学生同士の信頼関係の形成にも繋がった。

ただ単にドキュメンテーションから子どもの活動を読み取るだけでなく、子どもの遊びの中にどのような学びがあるのか、保育者としての支援・環境設定はどのようにしたらよいか、学生に話し合わせた。このことは、保育ドキュメンテーションの構造から考えると発展型である。

- ・基本型（子ども達の具体的な姿を含む文と、簡単な読み取りを付けた文書記録）
- ・発展型（学生の深い考えまで書き出した文書記録）

グループ用紙1は基本型である。グループ用紙2は発展型である。結果にあるように学生たちは、子どもたちの遊びから学生にとって学びを発見し「深い気づき」として「この子にはどんな力がついているのだろうか」「こんな育ちが見える」等と、具体的に記録されていた。また、学生の中には発達段階や家庭の影響に触れていた学生もいた。(④その他)

学生は、「子どもの資質・能力を目いっぱい育むには・・・」(資料1) この子の育ちにも関心が向き「この子のことがわかっていないとこの子の資質・能力を育てられないのでは」と気付いていた学生もいた。子ども理解の必要性に言及できていることは、質の高い保育者を目指す学生として、学びが充実してきたことを示すものであると考える。

4-2 理解度を調べた質問用紙調査から

以前の授業方法では、日誌の文書の中から子どもの姿の読み取りを行っていたが、図6、図9のような細かな読み取りまで行われていなかった。「ドキュメンテーション」を活用したことで学生たちは、子ども達がどのように遊びを深めているのか、保育者として何をすべきなのかがわかり、図10の回答結果につながった。さらに、保育者質問紙③では、ほとんどの学生が「使いたい」と回答した。授業体験で可視化することで共通の話題が持てることが分かったからである。

4-3 全体的な考察

コロナ感染予防のため授業時間が短縮とフェースシールドをつけて授業を行った。その中で学生たちは小人数グループの話し合いであった為、細かな点まで話し合うことができた。たとえば、その場の支援だけでなく保育室での活動に目を向け、次の日につながる絵本読み聞かせや安全面の配慮まで気付き、付箋紙に記入し貼っていた。保育者として先の読み取りまでできていた。これは、今までの「保育実習指導」「子ども理解」「保育の計画と評価」等の授業の成果ともいえる。

この教授方法「ドキュメンテーション」を取り入れたことは、学生自ら積極的に授業に取り組み、少人数であるからこそ自分の考えを述べることができ、学生達の子ども理解が深まったと捉えることができる。

6. おわりに

本稿では、保育・教育実践の基盤とされ保育者養成段階からすべての保育者・教師に求められる専門的スキルの一つである「子ども理解」を深める具体的な方法として可視化したこのドキュメンテーションから学生がどのように学ぶのかを検証した。

倉橋惣三は『育ての心』の中で「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である…その子の今の心もちにのみ、今のその子がある」と述べているように「保育は、子ども理解に始まり、子ども理解に終わる」ということである。

それは、子ども理解が保育・教育実践の基盤となり、保育者・教師に求められる能力とされているからである。保育者の信念や知識に基づく子ども理解は、どのように子どもに関わるかといった保育行為を決定することに繋がるからである。具体的には、保育者・教師の関わりや関係性の在り方が子どもの行動や仲間関係、就学後の学業達成に影響するからである。

乳幼児期は、人間形成の基礎となり、生涯にわたる学びの基礎づくりとして重要な時期である。その時期をどのように過ごすかは、一人ひとりの子どもたちに大きな影響を及ぼすことになる。さらに、社会の変化によって、保育現場には複雑な家庭環境の中で育つ子どもや様々な発達の特徴を持つ子どもの存在がより認知され、保育者・教師には多様な保育ニーズに応える高い専門性と問題解決力が必要とされる。だからこそ養成校として学生の育成が重要である。「保育内容総論」は、保育・教育実習との関係性がり、授業運営や授業計画の共通認識を持ち、総合理解のもと学生の指導にあたることで学生にとってより効果的な学習に繋がると考える。

引用・参考文献

- 岸井勇雄・無糖隆・湯川秀樹（2019）「保育内容総論」同文書院
倉橋惣三（1936）「育ての心」（上）（下）刀江書院
浅井拓久也（2020）「ドキュメンテーションの作り方&活用術」明昌堂

小田豊・秋田喜代美（2008）「子ども理解と保育・教育相談」（株）みらい
大豆生田啓友・おおえだけいこ（2020）「保育ドキュメンテーションのすすめ」小学館.
大豆生田啓友（2017）「21世紀型保育の探求」フレーベル館
文部科学省（2010）幼稚園教育指導資料第3集「幼児理解と評価」チャイルド本社
文部科学省（2013）幼稚園教育指導資料集第5集「指導と評価に生かす記録」チャイルド本社
文部科学省（2017）「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館
文部科学省（2019）「幼児理解に基づいた評価』チャイルド本社
文部科学省（2019）「幼稚園教育要領解説」フレーベル館

資料1

- ・園の中で育みたいとされる資質・能力
①知識及び技能の基礎②思考力、判断力、表現力などの基礎③学びに向かう力、人間性のこと
（保育所保育指針、幼稚園教育要領の第一章総則参照）

身体表現活動の実践的研究

一五峯祭の活動に着目した事例一

Practical Research of Body Expression Activities: A Case of Activities in School Festival

古木竜太 国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本研究は学生が先生役となり、文化祭に訪れた子どもを対象として実践した身体表現活動に着目して、身体表現活動の有効な指導・援助法に関する一資料を得ることを目的とした。学生が取り組んだ活動（活動内容の検討、予行演習の様子、本番当日の様子）を詳細に記述し、学生が子どもに対して働きかけた言動や子どもの反応、「子どもが活動に取り組んでいる時間」について、質的・量的な分析を試みた。文化祭当日は推定1歳から5歳の男女児16名が参加し、約35分間の身体表現活動を実践した。学生は子どもたちが楽しめるような雰囲気づくりを心がけ、子どもが主体的に参加できるように言葉がけなどを工夫しながら、活動を進行させていた。活動後は、参加した子どもが先生役の学生にハイタッチを求める場面もあり、子どもにとって満足できる内容であったと推察する。このような本事例を踏まえ、子どもを対象とした身体表現活動の有効な指導・援助法について考察した結果、「導入前の雰囲気づくりとして、自由遊びなどの時間を設けると、面識がない子どもでも早い段階でコミュニケーションを図ることができる」、「座る（話を聞く）、立つ（身体を動かす）など、子どもが取り組むべき活動を明確に示す」、「言葉がけは『問いかけ』を多用しながら、子どもたちの主体的な参加を促す」、「手本を示す際は、動きが大きくて明確であること」、「繰り返す動きが多い振付が模倣しやすいこと」、「踊っている最中でも、子どもの動きを捉えて褒める、あるいは子どもがさらに元気よく踊れるような声かけがあると望ましい」、「子どもが活動に取り組んでいる時間の割合が多くなるように進行を工夫する（子どもが単に話を聞いている時間を少なくする）」といった知見が得られた。

キーワード：身体表現活動、指導・援助法、模擬保育、実践研究

1. はじめに

1-1. 保育現場に着目した実践研究

筆者は国際学院埼玉短期大学（以下、本学）に着任以来、卒業研究の「身体表現」を担当し、学生に対して、保育現場に着目した実践研究に取り組むよう指導してきた。多くの学生は本学卒業後、保育者として幼稚園や保育所などに勤務する。学生が「身体表現」の履修を希望する理由として、「自分が幼い頃からダンスを習っているから」「身体を動かすことが好きだから」「1年生の頃に先輩のプレゼンテーションを聞いて興味を持ったから」などがある（表1）。これを踏まえ、学生の興味・関心が卒業後の進路に活かされる研究となるように、筆者は保育現場に着目した実践研究を奨励してきた。具体的には、学生自らが幼稚園の責任実習で行った身体表現活動の指導・援助について考察したものがあり（古木・清水、2011）¹⁾、学生が実際に保育現場で実践した事柄を研究資料にして、卒業研究論文を執筆するよう指導してきた。しかしながら、このような研究を進める上で、いくつかの課題があった。それは、学生が責任実習を行う期

間、保育現場では主に運動会練習が行われ、「責任実習は室内活動にしてほしい」という現場の事情があり、実習生が保育現場で身体表現活動を実践し、その活動の様子を卒業論文として執筆できないことである。また、実習前の段階では、責任実習の主活動は身体表現活動を行いたいと意欲的になる学生もいるが、指導案を作成する場面になると、配慮事項や留意点など具体的な事項を列挙できずに諦めてしまうケースも少なくない。このような現状を踏まえ、筆者は卒業論文の指導に行きづまりを感じていた。

表1 卒業研究「身体表現」の履修を希望した理由（令和元年度の個人研究論文より抜粋）

- ・小学校3年生の頃よりダンス経験があり、現在もダンスを続けている。保育者として将来、どのようにダンスの楽しさを伝えるか興味を持ち、身体表現ゼミを選択した。(Aさん)
- ・身体を動かすことは好きであるが、踊ることは苦手である。身体表現ゼミを通して自分自身が踊って表現することを好きになり、恥ずかしがらずに踊れるようになること。また、踊ることが苦手な子どもたちでも踊れる簡単な振付や教え方、踊ることの楽しさを伝えたいと思った。(Bさん)
- ・1年次に先輩方と一緒に卒業研究の授業を行った。先輩が実習で行ってきた身体表現についてのプレゼンテーションがあり、先輩がとても楽しそうに活動していたことを知った。(Cさん)
- ・身体を動かすことが好きで、ダンスを踊ったり、人前で表現することが好き。幼い頃からスポーツ経験もあり、この機会に身体表現についてさらに学び、見識を深めたいと思った。(Dさん)
- ・私自身が身体を動かすことが好きで、子どもたちの必要な運動について学び、研究の成果を保育の現場で活かしてみたいと思った。(Eさん)
- ・私が身体表現ゼミを選択したのは、自身が身体を動かし、子どもたちと活動することが好きなのが一番の理由。(Fさん)
- ・実習で保育の現場に入ったとき、自由時間でパブリカの音楽に合わせて身体を動かした。このような経験を踏まえ、子どもたちに身体表現の楽しさを伝えるための方法について学びたいと考えた。(Gさん)
- ・身体を動かすことが好きで、幼い子どもにも身体を動かす楽しさを伝えられる保育者になりたいと思っている。(Hさん)
- ・身体を動かすことが好きで、自分が保育者になったとき、子どもにどのような身体表現活動を指導するのが適切なのか学びたい。(Iさん)

1-2. ゼミナールによるグループ研究への転換

令和元(2019)年度、本学の卒業研究は個人で行う研究方法を見直し、ゼミナール形式によるグループ研究で卒業研究論文を作成することになった。これを踏まえ、新しい研究手法として、本学の文化祭(以下、五峯祭)において、子どもを対象とした身体表現活動を主とする模擬保育の実践を試みることにした。五峯祭は開学以来、地域の方々や卒業生など毎年5,000名程度の来校者を記録している。また、学生の学修成果を発表する場として、全学的に取り組んでいる行事でもある。幼児保育学科では「幼児絵画展」の開催に併せて、子どもが楽しめるアトラクションをクラス単位で企画し、学生は子どもと関わることで実践的な学びを深めることができる。

このような背景を踏まえ、筆者が指導を担当する「身体表現ゼミ」は、令和元年度の五峯祭に参加することにした。学生が自ら身体表現活動の内容を考え、五峯祭当日に訪れた子どもたちを対象にして身体表現活動を実践する。活動内容を検討する過程や予行演習の課題や改善点、五峯祭当日に実践した様子をグループ研究論文としてまとめることにした。令和元年度の五峯祭は11月9・10日に開催され、「身体表現ゼミ」を履修した12名の学生は3グループに分かれ、それぞれ30分程度の身体表現活動を実践した。

2. 目的

本論は、上記3グループの中から、令和元年度の卒業研究発表会の口頭発表に選ばれたグループの卒業論文である「身体表現活動の実践的研究—五峯祭の活動に着目した事例(Aグループ)—」²⁾の内容に指導者の立場から筆者の分析を加筆した。学生自身が先生役として、実際に子どもたちと一緒に身体表現活動を行った経験は貴重な機会であった。そこで、本研究は学生が先生役となり、子どもが参加した五峯祭の身体表現活動に着目して、身体表現活動の有効な指導・援助法に関する一資料を得ることを目的とする。

3. 方法

3-1. 対象

(1) 先生役を担当した学生

五峯祭において身体表現活動を実践するメンバーは、本学幼児保育学科 2 学年に在籍する学生 4 名（小川未悠、金子美仁、石丸瑞姫、岩崎舞夕）である。この 4 名の学生は、これまで幼稚園、保育所、施設において行われた所定の実習を全て経験している。なお、本学では 1 年次に幼稚園で 5 日間、保育所および施設にて、それぞれ 10 日間、2 年次に保育所で 10 日間、幼稚園で 3 週間の実習を実施している。

(2) 五峯祭当日に参加した子ども

令和元年 11 月 10 日、五峯祭において上記メンバーが身体表現活動を実践した。当日、参加した子どもは、推定 1 歳から 5 歳と思われる 16 名であった（活動開始時）。なお、本活動は自由参加であり、途中の参加および退出を認めている。したがって、年齢や男女を特定することはできない。本論では、先生役となった学生の働きかけによる子どもたちの反応について、詳細に記述する。

(3) 予行演習に子ども役として参加した学生

五峯祭の実践に先立ち、2 年生の「卒業研究」および 1 年生の「卒業研究プレゼミ」の合同授業で予行演習を行い（令和元年 10 月 25 日）、予行演習後は感想などを記述させた（後述）。

子ども役として参加した学生は幼児保育学科 2 年生 2 名と 1 年生 10 名であった。なお、2 年生は本論で対象としている学生と同様に所定の実習を全て経験している学生である。1 年生は実習を一度も経験していない（当時）。約 1 ヶ月後に幼稚園での実習（5 日間）を控えている時期であった。

3-2. 研究資料

(1) 活動内容の検討に関する記録用紙

活動内容に関するグループ討議は、記録用紙を用いて記述した。記述内容は、「指導教員の言葉、板書、メンバーの意見など」と「全体的な感想（感じたこと、思ったこと、考えたこと）」である。毎回の卒業研究の授業後に話し合った内容や指導教員の助言などについて記述するよう指示した。

(2) 予行演習に関する記録用紙

先生役を担当した 4 名の学生も含め、予行演習に参加した学生を対象にして感想などを記述させた。記述内容は、「活動内容」「身体表現活動を体験して、改善点や工夫した方が良かったこと」「その他、上記以外のことで思いついたこと、気になったこと」（2 年生）、「先輩へのメッセージや自分自身の実習へ向かう意気込みなど」（1 年生）である。

(3) ビデオカメラによる撮影

予行演習と五峯祭での活動の様子はビデオカメラ（Panasonic HC-W870M 製）で撮影し、五峯祭当日は保護者に対して身体表現ゼミの研究目的や映像の用途について、指導教員より説明し、撮影の了解を得た。

3-3. 分析

本論では、五峯祭当日の様子を映像で振り返り、先生役を担当する学生の「動き」「言葉がけ」「活動内容の工夫」「子どもへの関わり方・対応」^{註1)}や、場面ごとにおける子どもの活動時間について考察する。その手法として、主に二つの方法を用いて分析を試みる。その一つは、ナラティブ分析である。ナラティブ分析 (narrative analysis) とは、物語的に授業の事実を記述する方法であり、体育授業の研究に長年携わる高橋健夫氏が注目している「状況関連的に授業の現象を質的に記述し、解釈する分析方法」である (高橋, 2003)³⁾。これを踏まえ、本事例において学生が子どもに対して働きかけた言動や子どもの反応を詳細に記述し、その意図を解釈することで、身体表現活動の有効な指導・援助法を見いだす。

二つ目は、「子どもが活動に取り組んでいる時間」に着目して、学生の活動の進め方について検証する。これは、ナラティブ分析の質的な分析に対して、時間経過をみる量的な分析である。例えば、子どもにとって、どの程度の運動量であったのか、どの場面で集中力を欠いたのかなど、活動場面の所要時間を記録することで、各活動に適した時間の使い方や活動内容について考察する。

4. 事前準備と予行演習

4-1. 活動内容の検討

2019年5月から、専門科目「卒業研究」において、活動内容の検討を始めた (図1)。30分程度の身体表現活動を「導入」「展開」「まとめ」に分け、それぞれの内容について話し合った。「導入」では、子どもが思わず身体を動かしたくなる、踊りたくなるような気持ちにさせること、「展開」は子どもたちが活発に動けるように盛り上げること、「まとめ」は子どもたちが身体表現活動を振り返り、達成感や充実感を味わえるような活動内容を考えるよう指示した。また、4名のうち主たる先生役を1名、その他のメンバーはサポート役になり、活動ごとに先生役を交代するよう助言した。先生役が複数いると、子どもの視線が散漫になり、言葉がけや動きが伝わりにくい場合もある。また、学生が一人で子どもたちの前に立って進行する経験こそ、実践的な学びになるのである。

4名の学生が意見を出し合った結果、導入では秋をテーマとしたシルエットクイズを行い、「きのこ体操」^{註2)}を踊る。展開では「エビカニクス」^{註3)}と自分たちで創作するダンス、「まとめ」では親子で踊れるだろう「ぱわわふ体操」^{註4)}と手遊びを実践することにした。



図1 活動内容の検討

自分たちで創作するダンスは「夢をかなえてドラえもん」^{註5)}を選曲した。筆者を含めた5人で振付を担当する箇所を決めた後、まずは個々人で担当箇所の振付を創作した。学生は歌詞から動きを連想して振付を創作する。同じような動きの繰り返しが多すぎる場合は、場所や高さを変化させるよう助言した。また、終始「個」で踊るのではなく、二人一組で踊る、みんなで手をつなぐなど、ダンスを通して他者との関わ

りが発展していくような構成にした（図2）。



図2 創作ダンスの練習

4-2. 五峯祭前の予行演習

2019年度後期から始まった1年生の「卒業研究プレゼミ」と合同で身体表現活動の予行演習を行った。実施日は2019年10月25日で場所は本学模擬保育室（おそらのへや）である（図3）。実践の様子をVTRで振り返り、先生役を担当した4名の学生、子ども役として参加した1・2年生の学生を対象にして感想を記述させた。



図3 五峯祭前の予行演習（2019.10.25）

(1) 先生役を担当した学生（4名）の振り返り

五峯祭前の予行演習を終えた後、VTRにて自らの言葉がけや動き、活動の進め方などに着目して振り返った。以下、先生役を演じた4名の学生が気づいた反省、改善点などについて記述する（表2）。

学生にとって、自分たちが実践した活動の様子を映像で客観的に振り返ることは、気恥ずかしく、冷静に反省点や改善点を見いだすことは難しい。だが、望ましい指導・援助法について考える上では、欠くことのできない作業でもある。学生は自らの様子を振り返り、より良い身体表現活動にしたいという前向きな姿勢で、筆者の助言も素直に受け止めようとしていた。

表2 予行演習後の振り返り

<p>【導入の手遊びについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「はじまるよ」の手遊びはリズムが少し速く、「やきいもグーチーパー」の手遊びは、緊張があったため、リハーサル前に確認していたが、忘れてしまい、できなかった。また、急に手遊びを始めてしまった。始まり方・活動の繋ぎ方をもっと考えなければいけないと感じた。さらに、自己紹介をするときに一人一人バラバラではなくみんなで統一するようにし、まとまりがあるほうが子どもたちも覚えやすいと感じた。 <p>【シルエットクイズについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シルエットクイズは、ひとつひとつの動きが雑になりやすいので、焦らずゆっくり丁寧に取り組み、難易度がだんだん高くなるようにしたほうが良いことが分かった。また、絵の「見せ方」を工夫し、絵が半分隠れるような黒い画用紙を用意したり、ペープサートをくるくる回してヒントを出したりといくつかのパターンを考えておくと、子どもたちも楽しめると思った。さらに、絵に対する言葉がけやペープサートを次々と並べて飾ってもよいという助言があった。そして、提示したペープサートで何に共通しているのかを子どもたちに質問することで、単にクイズを行っているのではなく、秋という季節について学べるなどの助言があった。 <p>【創作リズムダンスなどについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムダンスの動画を確認して思ったことは、ダンスの振りの動きがはっきりしない。「エビカニクス」から「夢をかなえてドラえもん」までの場のつなぎ方、最後のまとめの仕方等を確認しこれらを踏まえて本番までに備えるようにする。 ・「エビカニクス」の自由に踊る場面は、事前に説明して、最後のポーズは「エビ」と「カニ」のうち、好きな方のポーズで終わると子どもに伝えることで取り組みやすくなる。また、「疲れた？」という言葉は避け、常にプラスに考え、「落ち着こうか、楽しかったね」という声かけを意識する。 <p>【活動全般について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動ごとに、どのような言葉がけを行うのか、予め決めておくと進行がスムーズになる。そして、「まとめ」では、楽しかった時の感想を伝えるようにする。

(2) 1・2年生の感想や助言など（抜粋）

次に子ども役として参加した1・2年の感想を記述する（表3）。

表3 予行演習に子ども役として参加した学生の感想

【工夫したほうが良いと思ったこと】

活動を進行させる役割の人は真ん中にあること、話を聞く場面でも問いかけを意識して、子どもが参加している雰囲気のこと、まとめは褒める。／手遊びは、始め方が唐突でテンポが速くなってしまった。／自己紹介がフルネームで分かりにくかった。／「きのこ体操」のダンスの後、子ども達を座らせた方が良い。／「上手にできたね」の声がけがもっと欲しい、「疲れた」という言葉は避ける。／暑くても手で仰ぐような仕草はしない。／シルエットクイズについて、ペープサートの扱い方が不慣れであった。手で隠れてしまっていて見えない時があった。／ダンスの最後に決めポーズがあるところは、前もって練習して伝えるようにする。／ドラえもんダンスでは、「一緒に踊ってね」と子どもに声をかけたが、実際は見ているだけになってしまった。「見ててね、歌ってね」だけでも良いと感じた。／知らないダンスは、最後どんなポーズをすればよいか戸惑ってしまった。ドラえもん後「急に立つの？」ってなったので声がけに工夫する。／〇〇から〇〇までのつなげ方、一つ一つのもの締め方、ダンスの次の動きに対して前もって「次座るよー」、「次立つよー」など声がけをするとスムーズに動けるようになると思ったなどと多くの意見が出た。また、動きをはじめに合わせておくともっと良くなると思った。

【感想やメッセージ】

Aさんみたいにずっと笑顔で大きく動けるようになりたい。／マネしたい。／先輩たちのダンスを見てマネしたくなった。／一つ一つに工夫が見られたのでよかった。／問いかけやほめることはとても大切だと思った。／笑顔だとみている側も教えてもらっている側も楽しくなる。／子どもへの言葉がけだったり子どもの視線でとてもよかった。／ペープサートやダンスを実習で参考にしたい。／秋をテーマにしている、クイズなど考えることができて楽しめた。

緊張のため、段取りを意識するあまり、目の前の子どもの様子までは、目が行き届かず適切な言葉がけがなされていないという2年生の感想があった。2年生は保育現場において責任実習を経験したからこそ、保育者の視点から課題を指摘している様子が伺える。また、子どもが戸惑うだろう場面について、言葉がけのタイミングや内容に関する助言もあった。一方で、1年生は当時、一度も保育現場での実習経験がないことから、2年生のように子どもの立場から振り返るような感想はみられず、先生役を担当した2年生の立ち居振る舞いに感心する、憧れるような記述が多かった。

5. 結果

5-1. 五峯祭当日の実践結果

2019年11月10日（日）、本学の模擬保育室（おそらのへや）において、11:00から11:40までの約40分間、身体表現活動を実践した。

(1) 活動内容

実際に五峯祭で行った活動内容を表4に示した。玩具を片付けるよう子どもたちに声をかけてから、最後の「棒が一本」の手遊びまで35'43秒の身体表現活動となった。以下、活動の様子をVTRで振り返り、各活動について詳細に記述する。

(2) 活動開始前

模擬保育室にあった玩具をフロアに用意して、自由に遊べる時間を設けた。これは、模擬保育室という空間に子どもたちを馴染ませる意味も含まれている。また、先生役を担当する4名の学生のみではなく、クラスメイトなど複数の学生もサポート役として参加した。模擬保育室内で子どもと関わる役、入り口付近で「お楽しみ会、始めます!」と参加を促す役に分かれ、参加者を集めながら子どもが活動しやすい雰囲気づくりに徹していた。

表4 五峯祭における身体表現活動の活動内容（Aグループ）

時間	活動	内容
	活動開始前	子どもたちは、模擬保育室という場所に慣れる意味も含めて、玩具で自由に遊んでもらう。
0' 00	玩具の片付け	先生役の学生が「お片付け」するよう声をかける。
0' 56	「はじまるよ」の手遊び・自己紹介	「〇〇先生と呼んで下さい」と学生一人一人が自己紹介する。
2' 41	「やきいもグーチーパー」の手遊び	子どもたちに「やきいも」をイメージさせるように問いかける。
3' 32	ペープサートのシルエットクイズ	秋に関連するものを題材にしたペープサートを用いて、食べ物の名前を言い当てるクイズ
8' 59	「きのこ体操」	シルエットクイズの最後の答えが「きのこ」であることを受けて、「きのこ体操」を踊る。
15' 26	「エビカニクス」	エビとカニのペープサートを子どもたちに見せて「エビカニクス」を踊る。
22' 57	「夢をかなえてドラえもん」(創作ダンス)	学生が自分たちで創作したダンスを披露する。
29' 55	「ばわわふ体操」(親子体操)	後方で見学している保護者に声をかけ、子ども・保護者と一緒に踊る。
32' 42	「棒が一本」の手遊び(～35' 43)	最後は保護者の方に振り向かせるようにして、活動をまとめる。

開始時間が近づくと、先生役の学生が玩具を片付けるよう促す。その際に「誰が早いかな？」と声をかけ、素早く片付ける子どもの反応を見逃さないように褒めている。年長の男児・女児が複数いたためか、学生の言葉がけに反応してスムーズに片付けられている。片付けた後、先生役の学生は子どもたちを中央に集合させ、裸足になるよう促した。これは、転倒によるケガを防止するためである。子どもたちの動きが素早く、話を聞く姿勢もよい。いわゆる「お山座り」の姿勢で先生役である学生の話の聞いていた。

先生役である4名の学生以外にも模擬保育室にいる全学生が子ども一人一人に目を配り、自然な雰囲気に関わろうとしていた。実習経験がない1年生もその場に居合わせていたが、2年生のように主体的に関わることができない様子であった。2年生と1年生の保育現場における経験値の差を感じた場面であった。



図4 活動前の様子（左：自由に遊んでいる／右：片づけをしている）

(3) 導入の手遊びと自己紹介

子どもたちをフロア中央に集合させ、その前に先生役である4名の学生が正座して横一列に並んでいる。指示していないが、「お山座り」をしている子どもたちも数人いる。まず始めに「はじまるよ」の手遊びを行った。子どもたちが知っているだろうと予測し、動きの確認はなかった。ほとんどの子どもが「はじまるよ」を知っているようで元よく手を動かしていた。「はじまるよ」の手遊びが終わった瞬間、子どもたちの私語はなく、静粛にして先生役の学生に注目していた。そして、先生役である4名の学生が一人ずつ、自己紹介をした。「はい、(自分の名前) 〇〇先生です。よろしくお願いします」と言うと、子どもたちからも「よろしくお願いします」との反応があった。4名の自己紹介が終わった後、「みんな、先生の名前、覚えたかな？」と問いかけ、子どもたちに「〇〇先生！」と呼ばせた。子どもたちと一緒に参加している学生のサポートもあり、子どもたちは元気に学生の名前を呼んでいる。

次に、先生役である学生が「秋の食べ物で美味しくてホカホカしているもの何だ？」と問いかけ、子

もたちから直ぐに「やきいも！」という答えが返ってきた。そこで、「やきいもグーチーパー」の手遊びを始めた(図5)。2名の学生が主たる先生役となる。手遊びを始める前(準備の段階)では、両手で「やきいも」の形を作り、子どもたちが真似できているか確認する。「やきいもグーチーパー」の手遊びも、ほとんどの子どもが積極的に手を動かしていた。その後、「次は〇〇先生が、もっともっと面白いことをやってくれるんだって、だから、みんなで〇〇先生呼んでみよう！」と声をかける。



図5 導入の手遊び(やきいもグーチーパー)

(4) 秋に関するペープサートのシルエットクイズ

シルエットクイズは「ぶどう」、「りんご」、「トンボ」、「どんぐり」、「もみじ」、「くり」、「オレンジ」、「さんま」、「きのこ」の順序で出題した(図6)。3問目の「トンボ」から、すぐに答えが出ないようにヒントの出し方を工夫している。予行演習では、問題を出し終えたペープサートを片付けていたが、本番では、そのまま提示するよう助言した。参加している子どもの中で、推定1歳半くらいの男児がいた。準備しているペープサートが気に入り、手を出そうとするが、サポート役の学生が関わる。その子が嫌がらないように、かつ興味を逸らせるようにして、サポート役の学生は関わろうとしていた。自分の膝の上に乗せ、その子も嫌がるような感じではなかった。

6問目の「くり」では、そのままシルエットを見せる。子どもたちから直ちに「くり」と返答があったが、学生は「くり以外にもある？」と問いかけた。子どもたちは「くり」以外の答えも考え、答え合わせをするときに「たまねぎ」と言った子どももいた。この場面が伏線になってしまったのか、次のシルエットは「オレンジ」のところ、子どもたちは、すぐさま「かき」と答えた。先生役である学生は「くり」と同じように「かき以外にも何かあるかな？」と問いかけた。子どもたちは前問で答えを直ぐに言い当てたにも関わらず、学生が「くり以外にもある？」と問いかけたことで、答えを「たまねぎ」に変え、不正解となってしまった。そこで、今回は学生の問いかけがあっても答えを変えずに「かき」で押し通した結果、答えは「オレンジ」だったのである。先生役である学生と子どもとの応答に不調和を生み出してしまった場面であった。

その後、最後の「きのこ」を答えたところで、全て提示してあるペープサートの名称を確認させている。上述の不調和な場面もあったが、子どもたちの反応が良く、元気に答えている様子が印象的であった。そして、「最後に出たのが『きのこ』なんだけど、これから〇〇先生が楽しいことをしてくれます。みんなで〇〇先生を呼びましょう」と声をかけ、シルエットクイズを終えた。



図6 シルエットクイズの様子

(5) きのこ体操

活動を進行させる先生役の学生が交代し、「みんな、『きのこ』ってどんなポーズだかわかる？」と問いかける。大きく両手を広げて丸い形をつくる子どもがいる。反応が良く、先生役である学生を注目している態度が継続されている。先生役である学生は、まず始めに繰り返すサビのメロディを歌って聞かせ、次に歌いながら動きで手本を示した。すでに学生の動きを真似している子どもも数名見受けられた。そして、子どもたちを立たせて、動きを模倣するよう促す。子ども同士が触れないように広がる場面では、言葉よりも身振り（ジェスチャー）で促していた。動くには十分な間隔が確認できたところで、子どもたちと歌いながら一緒に動く（後方で座りながら周りの様子を見ている子どもが4人いる）。手本となる動きを見ながら模倣できることを確認した後、音楽に合わせて「きのこ体操」を踊った（図7）。

「踊り終えた後、「次は〇〇先生が楽しいことをしてくれるんだって、みんなで〇〇先生を呼んでみよう」と先生役を交代して次の活動に移った。



図7 「きのこ体操」を踊る場面

(6) エビカニクス

先生役である学生が「エビ」のペープサートを子どもたちに見せ、「みんなに問題です。これは何でしょうか？」と問いかけた。子どもたちから、「エビ!」という元気な返事があった。次に「カニ」のイラストを見せ、「みんな、エビとカニが出てくるダンスって知ってる？」と問いかけ、子どもたちから「エビカニクス」という答えが返ってくる。そこで、「エビカニクス」の「エビポーズ」「カニポーズ」の手本を示し、子どもと一緒に動きを確認した。ラストのポーズは「エビポーズ」か「カニポーズ」の好きな方で終わって良いと伝える。「エビカニクス」も子どもたちは知っていたようで、戸惑うことなく踊っていた（図8）。しかし、間奏で自由に動く振付のところ、先生役の学生が事前に説明していなかったため、動きが止まってしまった子どもも見受けられた。

「エビカニクス」を踊り終えたあと、「夢をかなえてドラえもん」の準備をするため、4名のうち2名の学生が、水色のジャージに着替え、残りの2名が場をつなぐ。着替え終えた後、役割を交代して、残りの2名の学生も着替えた。その間、「きのこ体操」や「エビカニクス」のダンスを振り返りながら、場をつないでいたが、どのようにして場をつなぐか、具体的な内容を決めていなかったため、いわゆる「間延び」したような雰囲気を感じた。また、「きのこ体操」から「エビカニクス」を踊り終え、場をつないでいる場面になっても、子どもたちを座らせることなく、活動を進めていた。VTRで確認したが、この段階で子どもたちに疲れが見え始め、集中力も欠くような様子であった。



図8 「エビカニクス」を踊る場面

(7) 夢をかなえてドラえもん

水色のジャージに着替え、ドラえもんのお面をつけた学生がホワイトボードの隙間から見え隠れするように登場し、子どもたちの視線を引きつけていた。そして、ドラえもんのお面を指さし、「これ何か分かるかな?」と問いかける。次に口ずさむように歌いながら、「夢をかなえてドラえもん」の歌を知っているか子どもたちに問いかけた。ここで、先生役の学生は子どもたちに対して座るように促した。そして、「お姉さんたちが考えたダンス」と紹介して、「踊れたら一緒に踊ってほしい、でも見ているだけでも良い」と伝える。間もなく残りの2名も着替えを終え、ドラえもんのお面をつけた4名が揃う。筆者の主観では、直ぐに踊り始めたら良いと感じたが、子どもに問いかけるやりとりが続いていた。再び、「一緒に踊っても良いし、見ているだけでも良い、歌を知っていたら歌ってほしいなあ」と伝えて、踊り始めた(図9)。一緒に踊ろうと立ち上がった女兒がいたが、周囲を見渡し、他児が全員座っているので、座った。また、後方(保護者席)で踊っている女兒がいた。ほとんどの子どもたちが集中して、4名のダンスをみていた。VTRで確認すると、所々に子どもたちの歌声を聞くことができた。

踊り終えた後、再び着替えるための場つなぎとして、「何のポーズが出てきたか覚えている?」など、子どもたちに問いかけ、「タケコプター」「どこでもドア」などの答えが返ってきた。



図9 「夢をかなえてドラえもん」を踊る場面(創作ダンス)

(8) ばわわぶ体操

ドラえもんのお面をつけた格好から、先に着替え終えた先生役の学生が「次は『親子体操』をやるので、よろしければ保護者の方も一緒に踊ってください」と声をかけた。その間に残りの2名も着替えていた。4名が揃い、踊り始めようと子どもたちを立たせたところで、退室する子どもが数名見受けられた。他の子どもたちは意欲があるようで、先生役である学生の指示に反応している。学生が「みんなパワーためられたかな?」と声をかけ、会場に音楽が流れ始めた。子どもたちや保護者に対して「ばわわぶ体操」を踊ることや、繰り返される動きについて練習することもなく、先生役の学生たちは踊り始めた。子どもたちや保護者が戸惑い、直立不動にならないか懸念もあったが、子どもたちや保護者は一様に身体を動かしていた(図10)。踊り終えた瞬間に4名の学生が「上手!」と拍手で褒め、「楽しかった人?」と問いかけた。



図10 「ばわわぶ体操」(親子体操)を踊る場面

(9) まとめの手遊び

「ばわわぶ体操」を踊り終えた後、子どもたちに集まるよう促し、「ダンスはこれで終わりなんだけど、最後に手遊びをします」と伝える。ここで、「棒が一本」の手遊びについて説明し、「先生が〇〇はどこだ?」って言ったら、〇〇を探して、あっち!って言ってほしいの」と子どもたちに話す。子どもたちが頷き、先生役である学生に注目していることを確認したところで、「じゃあ、一(いち)と一(いち)を出して」と両手の人差し指を立てるよう促した。そして、「棒が一本」の手遊びを始めた(図11)。模擬保育室内に

ある遊具やピアノ、人形などを題材として、室内を見回す子どもたちの様子が見受けられた。そして、最後に「お父さんとお母さんはどこだ？」と歌い、子どもたちが後方に座っている保護者を指さす設定にした。「これでお楽しみ会を終わりにします、ありがとうございました」と声をかけると、子どもたちから、「ありがとうございました！」と元気な返事があった。解散後、女兒自ら先生役である学生にハイタッチを求める場面もあった。



図11 「棒が一本」の手遊び（左）と活動後の様子（右）

5-2. 子どもの身体活動時間

本項では4名の学生が実践した35分43秒の身体表現活動の活動時間に着目して、子どもたちの身体活動時間について分析する。子どもが実際に身体を動かして活動に参加していた時間や話を聞いている時間などに分類したものを図12に示した。子どもたちが「きのこ体操」など、リズムダンスを踊っていた時間を赤色実線で示した（図12の⑤⑦⑩）。さらに、それに伴う動きの確認や練習時間を赤色点線で示した（図12の④⑥⑧）、子どもたちが座った状態で手遊びやシルエットクイズに参加していた時間は青色実線で示した（図12の①②③⑪）。「夢をかなえてドラえもん」（創作ダンス）を鑑賞していた時間は青色点線で示した（図12の⑨）。そして、先生役である学生の話や説明を聞いている時間を黒色実線で示した。

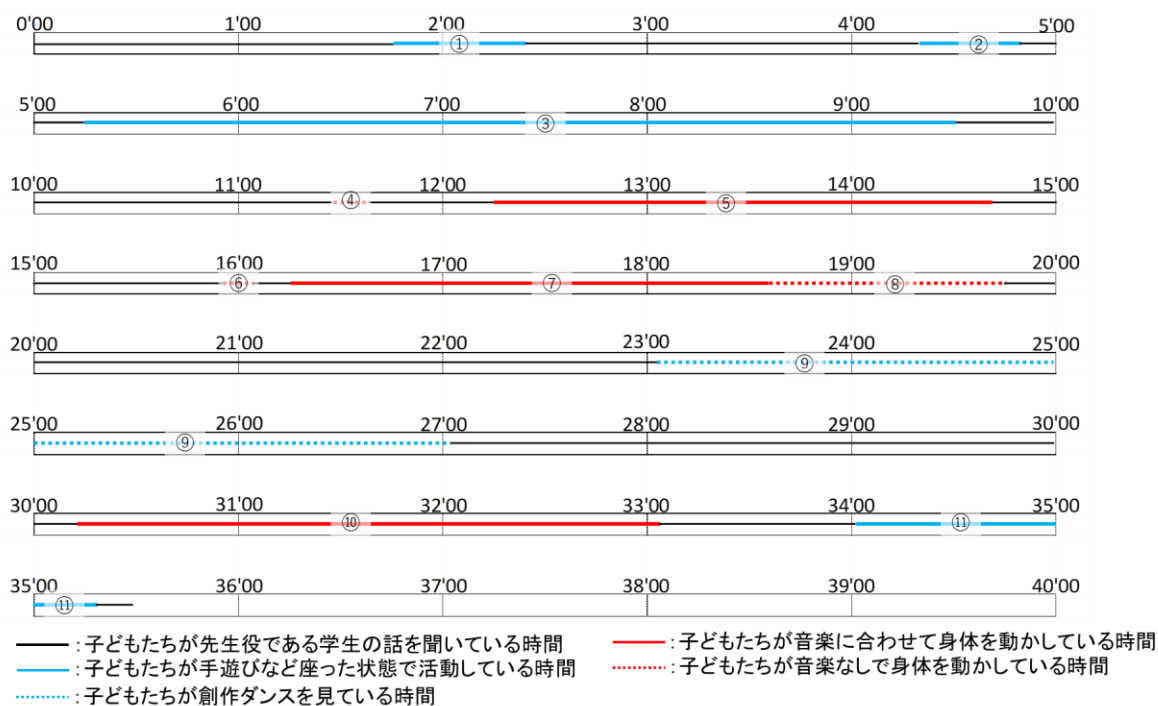


図12 身体活動時間と非活動時間の分類

35分43秒の活動時間のうち、子どもたちがリズムダンスを踊っていた時間の合計は7分40秒であり、全活動時間の21.5%を占める割合となった。また、子どもたちが座った状態で活動に参加していた時間の合計は6分44秒であり、全活動時間の18.8%であった。つまり、子どもたちがリズムダンス、手遊び、シルエットクイズという活動に従事していた時間は全活動時間の40.3%に相当する割合であった。それに対して、先生役である学生の話や説明を聞く時間、言い換えれば、子どもたちが活動していない時間の合計は、15分49秒であり、全活動時間の44.3%を占める割合となった。ちなみに、子どもたちが「夢をかなえてドラえもん」を鑑賞していた時間は4分0秒であり、全活動の11.2%を占める割合であった。

6. 考察

6-1. 手本の示し方（動き）と言葉がけについて

前項では、各場面について詳細に述べたが、学生の子どもたちに対する言葉がけが主に「問いかけ」であることが分かる。保育現場においても、保育者は子どもに対して「問いかけ」を多用する。これは、保育者の話が一方的にならないよう、子どもの反応や考えに寄り添う姿勢であり、子どもが主体的に参加している雰囲気をつくるための方法でもある。一方で、子どもに対する「問いかけ」が有効であると理解していても、期待していたものとは全く逆の反応、あるいは期待している返事が出てこない状況もある。経験が少ない、または臨機応変な対応が苦手な実習生は、子どもたちに「問いかけ」たがために戸惑うこともある。しかし、本事例の学生は様々な実習を経験したことで、臆せず子どもたちに問いかけながら、子どもの反応に対して適切に対応していた。先述したとおり、さらに望むならば、「シルエットクイズ」において、子どもが直ぐに正解したとしても、それを受け止めて、次の問題へと移行させた方が良く振り返る。

手本の示し方（動き）について、本事例では「きのこ体操」「エビカニクス」「ばわわぶ体操」を子どもたちと踊った。どのダンスも学生は事前に振付を覚え、4人で動きを揃えて大きく明確な動きで手本を示していた。「きのこ体操」はシンプルな振付と繰り返しが多い動きで構成されている。子どもにとって初見でも、模倣して踊れるダンスであった。「ばわわぶ体操」も振付が子どもでも踊りやすい構成であった。リズムカルな動きの所々に小休止できるような“間”がある、同じ動きを繰り返す振りが多く、動きが言葉のイメージによって、さらに明確になるオノマトペを多用している。このような特徴があることで、初見でも、子どもたちや保護者は踊ることができたと推察する。

一方で課題は、手本を示している最中に子どもに対する言葉がけが皆無であったことである。学生にとって、自ら踊りながら、一緒に踊っている対象者に声をかけることは難しいということが本事例で確認できた。今後の指導において、学生が踊っている子どもの動きを捉えて褒める、あるいは子どもがさらに元氣よく踊れるような声かけができるように努めたい。

また、「夢をかなえてドラえもん」の創作ダンスを披露する場面において、ほとんどの子どもたちはダンスを鑑賞していたが、VTRで振り返ると子どもたちの歌声を確認することができた。先生役の学生たちは踊ることで精一杯の状態と察するが、踊りながらも子どもたちの歌声に反応して、「上手だね」あるいは「もっと元氣よく」、「手拍子で！」など、子どもたちの反応がさらに良くなるような働きかけが必要であったと振り返る。

6-2. 身体表現活動の「雰囲気づくり」

五峯祭に訪れた子どもたちを呼び集める際、模擬保育室にある玩具で自由遊びの時間を設けたことは、

効果的な対応であった。子どもたちにとって、本学は初めて訪れる場所であり、いわゆる「場所見知り」をする子どもがいることも予想される。また、模擬保育室は廊下から中の様子を見ることができない構造になっていないため、室内の様子を外から確認できない。当初は玩具を準備せずに子どもたちを集めようと試みたが、模擬保育室を覗いて帰る子どもや保護者が多く、子どもたちの興味を引きつけるものが必要であると感じた。この活動前の自由遊びは、模擬保育室に来て直ぐに退室する子どもや保護者の様子を目の当たりにして、咄嗟に考えたことだが、学生と子どもの双方にとって緊張を和らげる時間として有効であった。なぜならば、本事例は主に、先生役となる学生の動きを子どもたちが模倣する身体表現活動だからである。初対面の学生に対して、子どもがどのような反応を示すのか、それは予測不能であり、手本を示しても模倣しない、問いかけても返事がない状況も考えられる。言い換えれば、初対面の学生でも、動きや問いかけに対して、子どもたちが積極的な反応を示すような状況にする必要がある。また、本事例の身体表現活動は先生役となる学生も子どもと一緒に動いているため、製作活動のように一斉指導と個別対応を状況に応じて使い分けることが難しい。さらに、身体表現活動は周囲の雰囲気左右されやすく、子ども同士でも周囲が全く無反応な中、自分一人だけが元気に踊っているという状況は考えにくい。だからこそ、導入の時点で子どもたち全員が積極的に参加できるような雰囲気づくりが重要であり、そのような雰囲気を創出するためには、子どもに安心感を与え、心身の開放を促すような活動が必要と考えた。

活動前の自由遊びは咄嗟の判断であったが、功を奏した結果となった。学生は初対面の子どもたちと早い段階で、積極的にコミュニケーションを深めることができた。そして、玩具の片付けから、手遊び、自己紹介後の問いかけと、筆者の予想を良い意味で裏切るように、子どもたちの反応が良く、期待できる導入の進め方をしていた。しかし、さらに望むならば「はじまるよ」の手遊びは、子どもたちの手の動きに合わせるようなテンポが望ましいと感じた。

また、学生は活動の節目ごとに「みんなで〇〇先生を呼びましょう」というフレーズを用いて先生役を交代させ、場面を切り替える合図にしていた。それは、子どもたちにも伝わっているようで、集中が持続できない場合、気持ちを切り替えるタイミングになっていたと推察する。一方で、子どもたちが取り組むべき活動を明確に示すことができない場面も見受けられた。その一つは、「きのこ体操」と「エビカニクス」を連続で踊り続けた後、子どもたちを座らせることなく、学生が話し始めた場面である。この場面では、子どもたちの気持ちを落ち着かせること。そして、次の活動も集中できるようにするため、一度、子どもたちを座らせ、休息の時間をとる必要があった。

身体表現活動において、子どもは楽しければ楽しいほど大きく、思い切り身体を動かす。その分、体力も消耗する。その際に子どもが疲れを感じるとするならば、それは、身体を動かしている時ではなく、むしろ、その逆で身体を動かしていないときだろう。目の前にいる子どもの体力を見計らいながら、例えば「座って話を聞く」「立って踊る」など、活動にメリハリがあると子どもの集中力は持続されるのではないだろうか。

6-3. 子どもが夢中になる活動時間の工夫

前項（結果 5-2）で述べた、子どもが「身体表現活動に取り組んでいた時間」、「活動していない時間」に分類して比較すると、後者の割合がやや多かった。先生役である 4 名の学生は、子どもたちが活動していない時間、すなわち、説明する場面では、子どもたちに対して積極的に問いかけながら、子どもたちの話を聞く姿勢が受け身にならないように工夫していた。これは、責任実習など、保育現場で実践的に学んだ経験が本事例でも活かされた結果ともいえる。活動後に子ども自らが学生たちにハイタッチを求める様子は、子どもにとって楽しかった、満足したという評価の現れと推察する。しかしながら、さらに充実し

た身体表現の活動内容を追求するなら、子どもたちが「活動していない時間」よりも「活動に取り組んでいた時間」の割合が上回る活動内容が望ましいと考える。

体育授業における「授業の勢い」に関する研究では、「よい体育授業は無駄な時間が少なく、学習時間が潤沢に保たれていて、しかも学習従事の割合が高いということである。このような特徴を一言で『授業の勢い』あるいは『豊かな学習』と呼ぶことができよう」と報告している（福ヶ迫ほか、2003）⁴⁾。また、「よい体育授業」について次のような過程的特徴があるといわれている（福ヶ迫ほか、2003）。

- ・教師の学習者全体に対する説明時間やマネジメント時間が短く、運動学習場面が豊かに確保されている。
- ・体育的内容場面における学習従事の割合が高い。
- ・運動学習で大きな困難や失敗を経験している学習者が少ない。
- ・すべての学習者が学習に集中していて、課題から離れた行動（オフタスク）をとる者はきわめて少ない。
- ・学習規律が確立していて、一定の学び方の手順にしたがって学習している。
- ・教師の介入頻度が少なく、また教師の介入が学習の妨げになっていない。

以上を踏まえて本事例を振り返ると、「夢をかなえてドラえもん」を踊り終えてから「ばわわぶ体操」（親子体操）を踊るまでの時間帯、すなわち、先生役である学生が着替えるために場をつないでいる時間帯に子どもたちや保護者に声をかけて、「ばわわぶ体操」の特徴的な動きを練習した方が望ましい選択であった。この場面では、子どもたちの活動がダンスを見るものに終始していたことから、次は「ばわわぶ体操」の動きを確認して練習するなど、子どもたちが身体を動かす活動へと移行させる必要があった。

7. まとめ

本研究は学生が先生役となり、子どもが参加した五峯祭の身体表現活動に着目して、身体表現活動の有効な指導・援助法に関する一資料を得ることを目的とした。そして、学生が取り組んだ活動を質的・量的に分析した。4名の学生は「導入」「展開」「まとめ」という構成で活動内容を検討し、リズムダンスを創作して練習した。1年生を交えた予行演習では、課題や改善点を見だし、五峯祭の本番に備えた。五峯祭当日は、推定1歳から5歳の男女児16名が参加し、約35分間の身体表現活動を実践した。学生は子どもたちが楽しめるような雰囲気づくりを心がけ、子どもが主体的に参加できるように言葉がけなどを工夫しながら、活動を進行させていた。活動後は、参加した子どもが先生役の学生にハイタッチを求める場面もあり、子どもにとって満足できる内容であったと推察する。このような本事例を踏まえ、子どもを対象とした身体表現活動の有効な指導・援助法についてまとめると、以下の事柄が考えられる。

- ・導入前の雰囲気づくりとして、自由遊びなどの時間を設けると、面識がない子どもでも早い段階でコミュニケーションを図ることができる。
- ・座る（話を聞く）、立つ（身体を動かす）など、子どもが取り組むべき活動を明確に示す。
- ・言葉がけは「問いかけ」を多用しながら、子どもたちの主体的な参加を促す。
- ・手本を示す際は、動きが大きくて明確であること、振付は繰り返しが多い動きが模倣しやすい。
- ・踊っている最中でも、子どもの動きを捉えて褒める、あるいは子どもがさらに元気よく踊れるような声かけがあると望ましい。
- ・子どもが活動に取り組んでいる時間の割合が多くなるように進行を工夫する（子どもが単に話を聞いて

ている時間を少なくする)。

8. おわりに

令和2年度の五峯祭も本事例と同様に子どもが参加できる身体表現活動を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学科別・学生・教職員のみでの開催となった。そこで、五峯祭の代替えとして身体表現活動を実施し、1年生が子ども役として参加した(図13)。本事例の取り組みは身体表現ゼミのグループ研究活動として定着を図りたいと考えていた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今後も学内のみの関係者で五峯祭を開催するなら、研究方法を再び模索する必要がある。

現場の中に学びが豊富にあり、成功よりも失敗経験が学びを深め経験値を豊かにする。身体表現に興味を持つ学生が実践的に学べる場を創出し、卒業後の進路に貢献し得る研究を目指して今後も努力したい。



図13 五峯祭の代替え模擬保育(2020年11月)

9. 註釈

註1) 研究資料について

五峯祭で身体表現活動を実践した後、1・2年生の合同授業(卒業研究・卒業研究プレゼミ)において、当日の様子をビデオで振り返り、予行演習と同様に感想などを記述させている。映像で振り返る観点は本文に記載した内容である。五峯祭当日を振り返った学生の記述は、本論で対象にしている4名のグループ論文に掲載していることから、本論の研究資料としては削除している。

註2) きのこ体操

使用曲「きのこ」は、歌:山野さとこ、作詞:まど・みちお、作曲:くらかけ昭二で作成された。山野さとこ氏本人が踊っている「きのこ」のyoutubeが保育者の話題になり、簡単な振付から、0~2歳児の運動会遊戯として推奨されている(<https://www.youtube.com/watch?v=76GKbjbKGpA>)。

註3) エビカニクス

子ども向けの音楽や体操を創作するユニット「ケロポンズ」が2002年に製作した楽曲、子ども向けのエアロビクスのようなダンスを作りたいという発想と、「エアロビ」の語感から「エビカニ」が思い浮かぶ。エアロビ的な動きをケロポンズ自ら考え、エビカニクスの楽曲とダンスが誕生した(<https://www.youtube.com/watch?v=U9nmGLZUGR4>)。

註4) ぱわわぷ体操

NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」で放送してきた体操で、11代目たいそうのおにいさんである小林よしひさ氏が担当していた。作詞:平方宏明、作曲:堀井勝美、歌:中西圭三、木村真紀、ひまわりキッズ、監修:佐々木玲子、振付:杉谷一隆、NAOで、2005年から2014年までの9年間、放送では小林よしひさが担当していた。

註5) 夢をかなえてドラえもん

テレビ朝日系列で放送されているアニメ「ドラえもん」のオープニングソング。2007年から2019年の12年間、使用さ

れている。作詞・作曲は黒須克彦、編曲は大久保 薫、女性シンガーである mao が歌っている。

引用・参考文献

- 1) 古木竜太、清水絵梨果：保育者現場における身体表現活動の指導・援助法に関する一考察—学生の
実践記録から資料を得て—。国際学院埼玉短期大学研究紀要。第32号。pp37-20。2011年
- 2) 小川未悠、金子美仁、岩崎舞夕、石丸瑞姫：身体表現活動の実践的研究—五峯祭の活動に着目した
事例（Aグループ）—。国際学院埼玉短期大学卒業研究論文。2019年
- 3) 高橋健夫編著：体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント。IV章
体育授業を質的に分析する。18 ナラティブ分析の事例。pp78。株式会社 明和出版。2003年
- 4) 福カ迫善彦、ストロ、小松崎 敏、米村耕平、高橋健夫：体育授業における「授業の勢い」に関する
検討：小学校体育授業における学習従事と形成的授業評価との関係を中心に。体育学研究48。
pp281-297。2003年

報告

コロナ禍における児童の学校給食に関する意識調査

An Awareness Survey of the Elementary School Lunch during the COVID-19 Pandemic

馬場 和久 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科
大 雅世 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科
古俣 智江 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科

本研究は、2020年1月からの新型コロナウイルス感染拡大により、学校給食にどのような影響が生じ、特に児童の意識や行動がどう変化したのかについて、小学校の3年生と5年生を対象としてアンケート調査を行い、その結果を報告するものである。

結果から、休校中、60%以上の児童が学校での給食の再開を楽しみにしていたことや、一部の児童には体重の変化も現れたことがわかった。また、誰が昼食の準備をしていたかについて、3年生と5年生の間に有意差がみられた。6月になって、登校が開始されてからも、給食の配膳や喫食の形態に制限が加えられ、特に前向きや無言給食に対して、多くの児童がストレスを感じていることもわかった。給食時に気をつけていることとして、前向きで喫食することや人との距離を置くことを回答した3年生と5年生の間にも有意差がみられた。

新型コロナウイルス感染拡大の収束が見えにくい現況のもとでは、学校給食を生きた教材として食育を推進していくとき、新しい生活様式に合わせた指導法の工夫や改善は今後ますます求められてくる。

キーワード：コロナ禍 前向き給食 無言給食 マスク着用 人間関係形成能力

1. はじめに

2020年1月に日本で初めての新型コロナウイルス感染者が確認され、2ヶ月後の3月には感染者は瞬く間に1,000人を超える事態となった。同年2月27日の首相官邸で開かれた感染症対策本部において、首相は、「子供たちの健康・安全を第一に考え、多くの子供たちや教職員が、日常的に多く集まることによる感染リスクにあらかじめ備える」という観点から、全国一斉休校を要請する考えを発表した。これを受け、2月28日には文部科学省より「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校における一斉臨時休業について」の通知が出され、各自治体や学校では、休校のための様々な対応に追われることとなった。全国の多くの学校が3月から休校措置を執ることになるが、新年度の4月に入ってからその状況は変わらず、政府や都道府県による緊急事態宣言発令後、学校の休校期間は幾度か延長されつつ、分散登校等によって学校が再開されたのは6月に入ってからだった。

このような状況の中で、学校生活の中において大きな位置を占める学校給食に視点を当て、今回の新型コロナウイルスの感染拡大が、児童の意識や行動にどのような影響を与えているのかを

調査した。

学校給食法にも定められているように、学校給食は、児童・生徒の適切な栄養摂取による健康の保持増進を図るのみならず、健全な食生活を営むことができる判断力や望ましい食習慣を養うことがねらいである。さらに、食生活が自然や食に関わる人々の恩恵の上に成り立っていることを理解させ、併せて生命尊重や環境の保全に寄与する態度を養うことも重要であるとされている。特に、学校という場では給食活動を通して好ましい人間関係を育てるなど、社会性を育てていくことも学校給食の大きなねらいのひとつと考える。

コロナ禍にあって学校給食の実態や児童の意識はどのように変わったのか。そして、教育活動としての学校給食のねらいを達成させるために、学校給食はどのようにあるべきかについて調査研究を進めることとした。

2. 研究の方法

2-1 調査対象及び調査時期

熊谷市立 I 小学校 3 年生及び 5 年生の各一クラスずつを対象に「給食に関するアンケート調査」を実施した。

調査実施日は、令和 2 年 11 月 20 日、調査対象は、同校 3 年 2 組 32 名中 32 名（回答率 100%）、及び 5 年 1 組 32 名中 31 名（回答率 96.9%）である。

3-3 及び 3-4 の調査結果については、学年間の群間比較を見るためにカイ二乗（ χ^2 ）検定を有意水準 1% 及び 5% の範囲で行った。統計にはエクセルを使用した。

2-2 調査内容

児童を対象にした、給食に関するアンケート調査内容は以下の図 1 の通りである、

「学校給食」に関するアンケート		[]年
※ 以下の1から5の質問について、あてはまる項目の記号を○でかこんでください。		
1 新型コロナウイルスの影響で 3 月頃から 5 月頃にかけて休校となり、学校で給食を食べられない日が続きましたが、その間、どんな気持ちでしたか。		
ア、早く学校で友だちと給食が食べたいと思った。		
イ、給食でも家での食事でもどちらでもよいと思った。		
ウ、家で、自由に食べられる方がよいと思った。		
エ、何も感じなかった。		
2 新型コロナウイルスの影響で 3 月頃から 5 月頃にかけて休校となり、学校で給食を食べられない日が続きましたが、その間、体調に何か変化は生じましたか。		
ア、体重が減った。		イ、体重が増えた。
ウ、体調の悪い日が増えた。		エ、特に変化はなかった。

3 今年、新型コロナウイルスの影響で3月頃から5月頃にかけて休校となり、学校で給食を食べられない日が続きましたが、家での昼食はどうしていましたか。

ア、家の人が作ってくれることが多かった。
 イ、自分で作って食べることが多かった。
 ウ、コンビニやスーパーなどで買ったお弁当を食べることが多かった。
 エ、お菓子や果物などで済ませることが多かった。
 オ、昼食を食べない日が多かった。

4 新型コロナウイルスの感染防止のために、現在、学校で給食を食べるとき、どんな点に気をつけていますか。(いくつ選んでもよい)

ア、友だちと話をしないようにして食べている。
 イ、友だちと顔を向き合わせないで、前を向いて食べている。
 ウ、友だちとの距離を離して食べている。
 エ、特に気をつけていることはない。
 オ、その他(→)

5 現在、給食の配膳のときに気をつけていることは何ですか。(いくつ選んでもよい)

ア、手洗いをしっかりとしている。
 イ、マスクやエプロンなどの身じたくを、以前よりきちんとしている。
 ウ、ご飯やおかず、汁物などは自分で盛りつけをし、自分で運んでいる。
 エ、話はしないようにして配膳している。
 エ、特に気をつけていることはない。
 オ、その他(→)

6 新型コロナウイルスの感染拡大によって、給食に関係することで、残念だと思っていることは何ですか。2つ教えてください。(自由に記述)

図1 学校給食に関するアンケート調査内容

3. 調査結果と分析

3-1 休校中、学校で給食が食べられなかった時の気持ち

6月からの休校措置によって自宅での生活が続いた期間、学校で給食が食べられなくなってしまった時、どんな気持ちになったかを尋ねたところ、表1及び図2のような結果を得た。

表1 学校で給食が食べられなかった時の気持ち 単位・人(%) n = 63

項目	全体	3年生	5年生
	n = 63 n (%)	n = 32 n (%)	n = 31 n (%)
学校で友だちと食べたい	38(60.3)	21 (65.6)	17(54.8)
給食でも家での食事でもどちらでもよい	14(22.2)	8(25.0)	6(19.4)
家の方が自由でよい	4(6.4)	2(6.3)	2(6.4)
特に何も感じない	7(11.1)	1(3.1)	6(19.4)

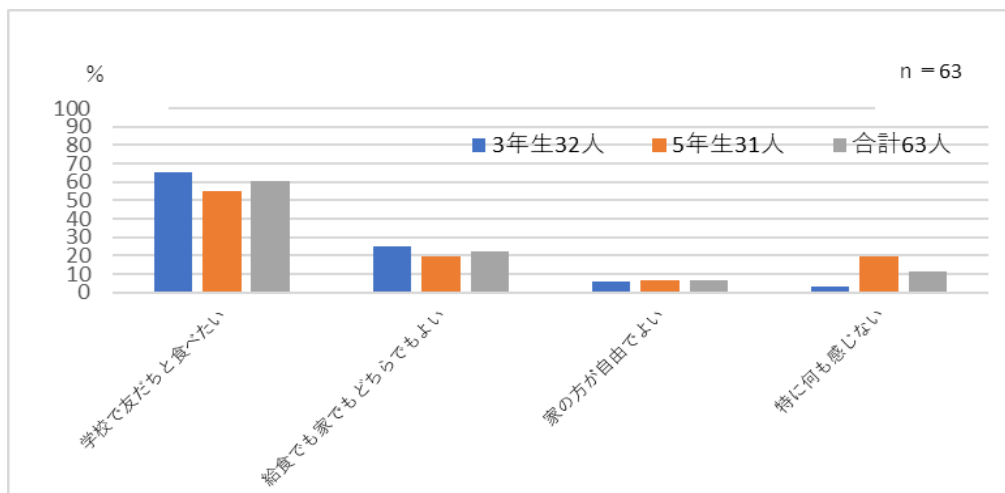


図2 学校で給食が食べられなかった時の気持ち (n = 63)

全体で約60%の児童が、学校で友だち一緒に給食を食べたいという気持ちを持っていたことがわかる。特に、3年生では約66%の児童が同様の気持ちを抱いており、高学年の5年生と比較するとその割合は約10%ほど高い。また、このことについて7名の5年生は特に何も感じていないと回答しており、低学年ほど学校給食に寄せる関心は高いようだ。

馬場の研究室において、短期大学2年生が2020年9月に県内の他の3つの小学校児童144名を対象とした同様の調査を行ったところ、やはり約60%の児童が友達と一緒に食べたいと回答していた。

3-2 休校中、家での生活が続いた時の体調の変化

6月からの休校措置によって自宅での生活が続いた期間、家庭での食事が続き、体調に変化が現れなかったかどうか尋ねたところ、以下の表2及び図3のような結果を得た。

特に体調等に変化はなかったと回答した児童は全体で約68%であったが、そのうち3年生は約81%、5年生は約55%とその差が大きく現れた。特に5年生のうち、約39%にあたる12名の児童が体重は増えたと回答しており、3年生の4名を大きく上回っている。

活動量も多くなる5年生にとって、家での生活が続いたことにより運動不足が重なったため

表2 家ででの食事が続いた時の体調の変化 単位・人(%) n=63

項目	全体	3年生	5年生
	n = 63 n (%)	n = 32 n (%)	n = 31 n (%)
体重が減った	3(4.8)	1(3.1)	2(6.4)
体重が増えた	16(25.4)	4(12.5)	12(38.8)
体調の悪い日が増えた	1(1.6)	1(3.1)	0(0)
特に変化なし	43(68.2)	26(81.3)	17(54.8)

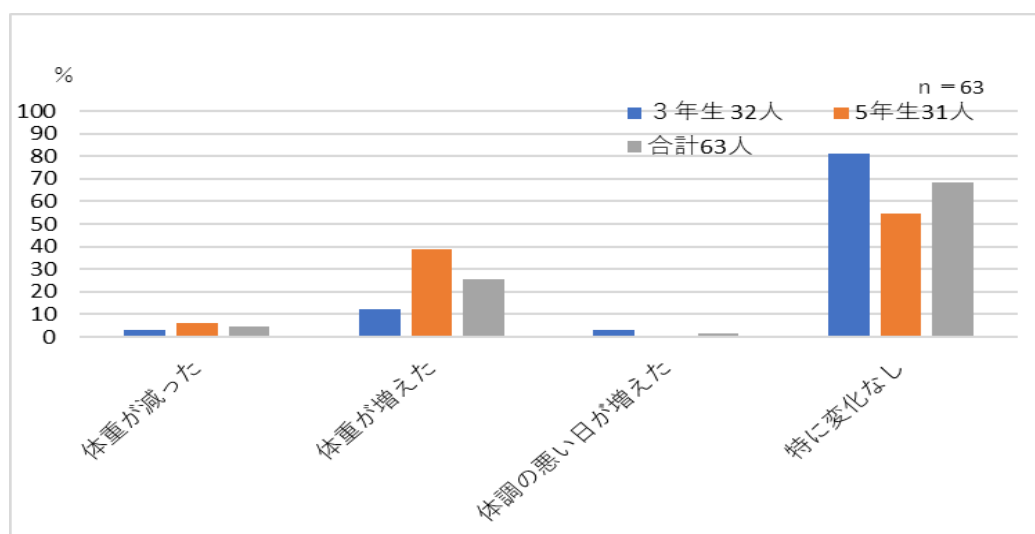


図3 家ででの食事が続いた時の体調の変化 (n=63)

ではないかと推察される。前述した、馬場の研究室における学生の調査によると、県内、他の小学校において144名の児童のうち約30%が体重は増加したと回答しており、特に高学年ほどその割合は高いという結果になった。

日本臨床整形外科学会は、2020年7月～8月にかけてコロナ禍で自粛中の小・中・高校生の体重の変化について調査した817人の結果をWebサイト¹⁾上に公開しており、その中で小学生は36.9%の児童が体重は増加したと回答していることがわかる。

3-3 休校中の昼食

休校中、家ででの昼食の準備について尋ねたところ、以下の表3及び図4のような結果を得た。

3年生では、約88%の児童が昼食は家の人を作ってくれたと回答しているが、5年生ではその割合は約68%と少なくなっている。逆に、5年生では約16%の児童が自分で作って食べていたと回答している。カイ二乗(χ^2)検定による学年間の関連性からみても、昼食を家の人を作ってくれたと回答した3年生の児童は5年生に比較し、有意差がみられた($p < 0.01$)。

前述の、馬場の研究室における短期大学生の行った調査でも、5年生のうち約20%の児童が自分で昼食を作って食べていたと回答しており、高学年ほど自ら進んで食事の準備をする児童

が増えてくることがわかる。

項目	全体	3年生	5年生	p値
	n=63 n (%)	n=32 n (%)	n=31 n (%)	
家の人が作ってくれた	49(77.8)	28(87.5)	21(67.8)	<0.01
自分で作った	5(7.9)	0(0)	5(16.1)	
お店でお弁当を買った	7(11.1)	3(9.4)	4(12.9)	
お菓子などで済ませた	0(0)	0(0)	0(0)	
食べない日が多かった	2(3.2)	1(3.1)	1(3.2)	

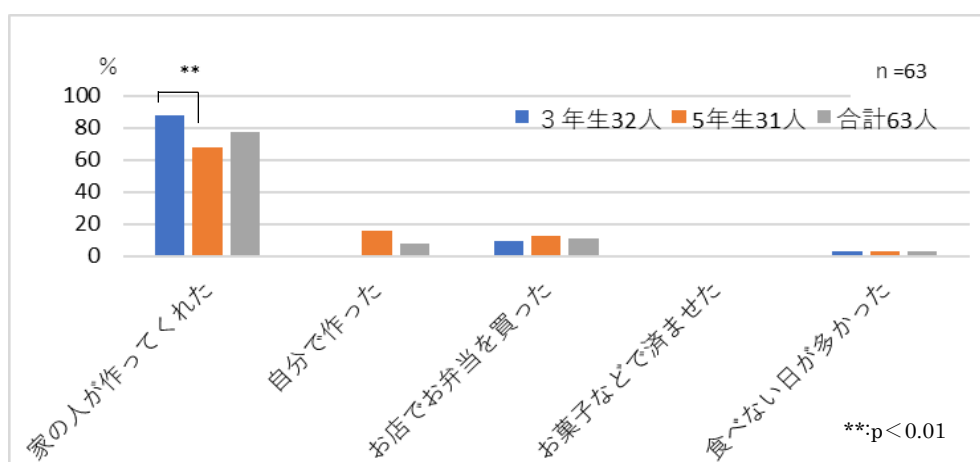


図4 家での食事が続いた時の昼食の準備 (n=63)

3-4 学校での給食中、気をつけていること

登校が再開された後、学校での給食時に気をつけるようになったことについて尋ねたところ、以下の表4及び図5のような結果を得た。

新しい給食のスタイルとして、友だちと話をせず、一人一人が前向きで、周りとの距離を保ちながらの喫食を指導されていることがよくわかる。また、その他として回答した13名は、いずれも、食べている時以外はマスクを着用することを挙げており、常時マスク着用の習慣も定着してきていると言える。

なお、給食を食べる時、友だちと向き合わないことを意識している児童は5年生と比較し、3年生の方が有意に多くみられた ($p < 0.01$)。また、友だちと距離を離して食べていることを意識していると回答した児童は、5年生と比較し、3年生の方が有意に多くみられた ($p < 0.01$)。

以下の写真1、2は今回の調査対象とした3年生と5年生の教室での給食喫食時の様子である。いずれも、全員が前向きで喫食していることがわかる。3年生では、挙手をしてお替わりを希望する児童に担任が机間を巡回しながら配膳している様子がみえる。また、喫食時だけマスクを外して机の上に置いている。

表4 給食を食べる時、気をつけていること（複数回答） 単位・人(%) n = 63

項目	全体	3年生	5年生	p 値
	n = 63 n (%)	n = 32 n (%)	n = 31 n (%)	
友だちと話をしないで食べる	46(73.0)	25(78.1)	21(67.8)	
友だちを向き合わないで食べる	45(71.4)	30(93.1)	15(48.4)	< 0.01
友だちと距離を離して食べる	45(71.4)	27(84.4)	18(58.1)	< 0.01
何も気をつけていない	4(6.4)	1(3.1)	3(9.7)	
その他	13(20.6)	11(34.4)	2(6.4)	

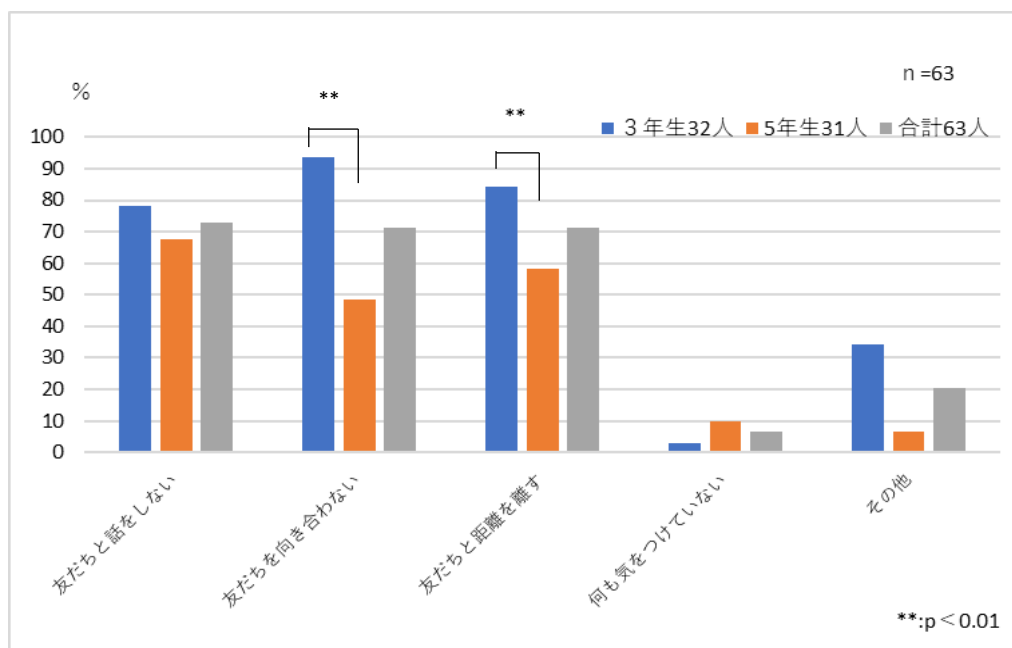


図4 給食を食べる時、気をつけていること (n = 63)



写真1 (3年生の喫食の様子)



写真2 (5年生の喫食の様子)

3-5 給食の配膳時に気をつけていること

給食の配膳時に気をつけていることを尋ねたところ、表5及び図6のような結果を得た。

項目	全体	3年生	5年生
	n = 63 n (%)	n = 32 n (%)	n = 31 n (%)
手洗いをしっかりする	55(87.3)	28(87.5)	27(87.1)
マスク・エプロン等の着用	56(88.9)	28(87.5)	28(90.3)
自分で盛り付ける	6(9.5)	3(9.4)	3(9.7)
話をしないで配膳する	13(20.6)	2(6.3)	11(35.5)
何も気をつけていない	0(0)	0(0)	0(0)
その他	6(9.5)	5(15.6)	1(3.2)

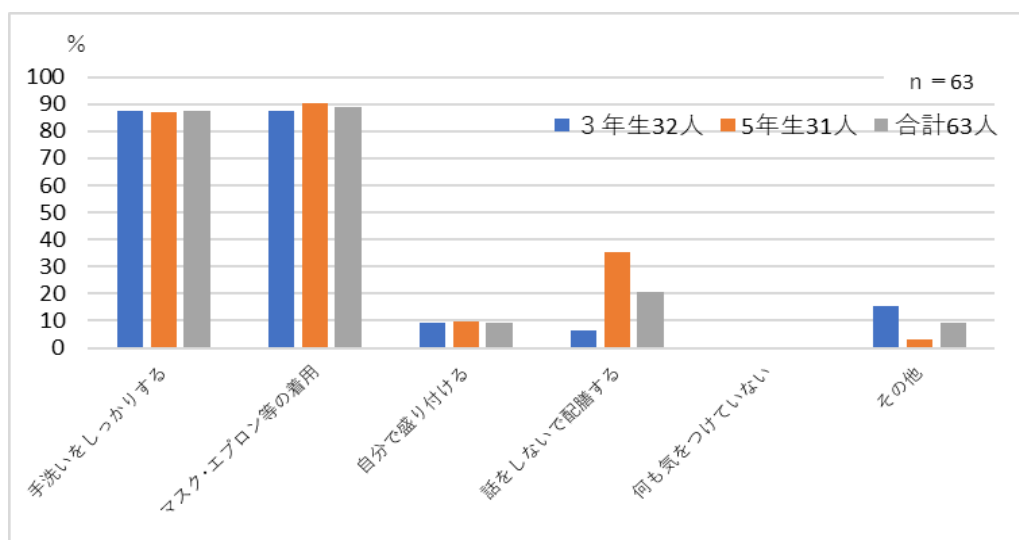


図6 給食の配膳時に気をつけていること (n = 63)

いずれの学年も、給食の配膳時に気をつけていることとして、手洗いやマスク着用など、身支度の徹底について約90%の児童が回答している。特に5年生では、約36%の児童が話をしないで配膳する、あるいは話をしないで配膳を待つ態度を挙げており、高学年ほど自律心が身につけてきていることがわかる。

3-6 コロナ禍にあって、給食に関して残念だなと感じていること（自由記述）

新型コロナウイルスの感染が拡大する中において、学校給食も様々な制限を受けながら実施されているが、児童が以前と比較して残念だなと感じている点について自由記述で尋ねたところ、以下の表6のような結果を得た。

いずれの学年も多くの子が、全員前向きで話をせず静かに食べることに残念さを感じていることがわかる。関連して、5年生に、コロナ禍での給食の時間の雰囲気を楽しめないと感じた児童が3名ほど見られたことから、給食の時間を単に喫食のためだけでなく、友だちと向き合いながら会話を楽しみたい時間と捉えていることがわかる。

表6 給食に関して残念だと感じていること（自由記述） 3年生：n=32、5年生：n=31

3年生の記述内容（人数）	5年生の記述内容（人数）
・話をしないで静かに食べること(17)	・話をしないで静かに食べること(25)
・一人一人前向きで食べること(16)	・一人一人前向きで食べること(22)
・メニューが変わったこと(4)	・お替わりができない(4)
・給食の放送が変わったこと(3)	・周りとの距離を保つこと(3)
・特にない(4)	その他
その他	・給食の雰囲気を楽しめないこと(3)
・出歩かない(2)	・あいさつがしにくくなったこと(1)

4. 考察

今回の調査により、3-1 や 3-6 の結果から、多くの児童が学校給食を楽しみにしていることがわかった。それは単に給食の献立や喫食することに対する楽しみだけではなく、3-6 における自由記述からも明らかなように、コロナ禍にあって多くの児童が前向きや無言での喫食に残念さを感じており、友達と向き合い、会話をしながら給食の時間を楽しく過ごすことを期待していることがよくわかる。また、3-2 の調査では、3年生と5年生の間に、休校中の体重の変化に明らかな違いが確認された。運動量の多い5年生にとって、昼食の内容よりも家庭での自粛生活がそのまま体重の変化に影響を与えているものと考えられる。3-3、3-5 の結果でも、発達段階の差が顕著にみられ、高学年ほど、主体性や自律心が育ってきていることが読み取れる。

文部科学省は2019年3月に「食に関する指導の手引—第二次改訂版—」を公表し、各学校が食に関する指導の目標を設定する際、「食育の視点」として重要な6項目を示した。その中で、第一に挙げているのが、「食の重要性」であり、その内容を見ると、食事の重要性に加え、食事の喜び、楽しさを理解することを挙げている。「社会性」を育むという点では、食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付けることが重要であるとしており、いずれも給食の時間の意義や役割が、他者と関わりながら人間性を育むうえで極めて大きいことを示している。また、国の食育推進業務を担う農林水産省は、『食育は、生きる上での基本であって、知育・徳育・体育の基礎となるものであり、(中略)健全な食生活を実現することができる人間を育てること』と説明しており、食育基本法や学校給食法の趣旨を生かして、食育が豊かな人間形成に寄与されなければならないことを強く述べている。これらを受け、各学校では、給食の時間をよりよい人間関係形成能力やコミュニケーション能力を培う貴重な場として教育課程に位置づけ、学級や学年という集団の特性を生かしながら様々な工夫をし、成果を挙げていると考える。

本調査で報告した、コロナ禍における児童の意識に関する先行研究等はまだ見当たらないものの、船橋市の小学校栄養教諭である口野佳奈氏は、日本栄養士会のWebサイト上²⁾で、コロナ禍にあって給食の時間が楽しくなるよう、また効率的な手洗いや準備、片付けができるように工夫した実践例を報告している。手話でのあいさつや担任と連携した給食メモの活用、校内のすべての水道を利用し、時間短縮を図る手洗いなどの取組である。

また、東京大学大学院医学系研究科佐々木敏氏は、小中学生の栄養素摂取状態について、給食のある平日とない休日の違いを、全国12の県の小学校3年生と5年生、中学2年生の合計1190人を対象に調査した。そのうち3日間の半秤量式食事記録を提出してくれた910人のデータを解析し、やはりWebサイト上³⁾で公開しており、休日は、カルシウム、鉄、ビタミンC、食物繊維、カリウムが不足する子どもが多いとまとめている。学校給食が子供の栄養素の摂取に大きな影響を及ぼしていることがよくわかる。

2020年10月1日付けで文部科学省は、「学校再開後の栄養教諭の取組事例の公表について（お知らせ）」を各都道府県首長宛に通知している。栃木県内や京都市、北海道における学校の実践事例であり、特に「衛生管理マニュアル」の内容の周知や清掃、消毒の仕方、給食配膳時の注意点等、安全・衛生管理についての紹介が中心となっているが、楽しい会食の時間となるよう、栄養教諭が作成した資料を映像で流したり、声かけが必要な児童へメッセージカードを届けたりするなどの事例も紹介されている。

今後、当分の間、あらゆる教育の場面で「3つの密を防ぐ」などの対策を継続していくことを前提としたとき、食育活動としての学校給食のあり方については、新しいスタイルでの具体的な方法を一層、検討・工夫していかなければならないと考える。2020年11月14日に開催された「第3回食育シンポジウム」（主催：認定NPO法人21世紀構想研究会）において、文部科学省は、休校中の子供たちの食生活の管理や個別指導を、ICTやオンラインなどを活用して行っていくことを今後の課題として紹介している。また、同シンポジウムにパネリストとして参加した、高松市立国分寺北部小学校栄養教諭の秦和義氏は、学校再開後の給食時間の対応については「新しい生活様式に沿った学習活動の工夫」が必要だと指摘し、ICTを活用して効率化を図りながら、学校給食を通じた人のぬくもりを子供たちに伝え、繋いでいきたいと述べている。休校中は多くの学校でリモートでの授業が大勢を占めてきたが、給食の時間にあっても、人間関係作りを主眼としたネットワーク環境やICT機器の活用を工夫するなどの取組が一層求められてくるだろう。コロナ禍にあって、給食の時間に子供同士が向き合っ、双方向でのコミュニケーションの形を作っていくことは難しいかもしれないが、児童を主体とした給食の時間の校内放送番組を工夫するなど、少しずつでも環境が整備され、友だちと関わり合いながら楽しく給食を食べたいという児童の思いに応えられる給食喫食時の工夫がされていくことを願いたい。

さらに、今後、再度の緊急事態宣言が発令されるなどして、学校での給食が実施されなくなったとき、子供たちの体調の変化や家での食事のあり方に配慮しながら、家庭や地域、関係機関等との連携を十分に図り、心身共に健康で健全な子供たちの育成を図る食育の推進がなされるようコロナ禍での新しい取組が期待される場所である。

5. おわりに

今回の調査報告は、2020年11月時点での、現況における小学校1校2クラスに限定した児童のアンケート調査をもとにしたものであり、十分な実態把握とは言い難い。また、今後、新型コロナウイルスの感染拡大がどのように進行し、収束していくのかによって、学校給食を取り巻く状況も刻々と変化していくことが想定される。しかし、教育活動の一環としての学校給食が「食

育」という点において、人間形成に大きく関わっていくということに異論の余地はない。
新しい生活スタイルに合わせた学校給食の一層の工夫や改善が求められてくるだろう。

謝辞

本研究は2020年度11月に、熊谷市立I小学校の児童を対象に行った、コロナ禍における学校給食に関する児童の意識調査をもとに、その結果を報告したものである。ご多用の中、調査にご協力いただいたI小学校の校長先生をはじめ、関係の先生方に感謝いたします。

参考文献

文部科学省(2020.12.3Ver.5)『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～』pp.51-53

文部科学省(2020.10.1)「学校再開後の栄養教諭の取組事例の公表について(お知らせ)」

文部科学省(2019.3)「食に関する指導の手引―第二次改訂版―」

全国学校給食会「学校給食」2020.5,7,9月号 2020.2月号

韓順子、大中佳子(2020)「給食経営管理論」第一出版

佐々木輝雄(2015)「学校給食の役割と課題を内側から明かす」筑波書房

1) <https://mcnn.jp/?p=20006> (2021.1.5閲覧)

コロナ自粛の運動不足で子どもの体に異変、発達への影響も懸念。発達障害グレーゾーンのお子さんのための「脳の発達を止めない運動の習慣化」を特集します - Mother and child News network (mcnn.jp)

2) <https://www.dietitian.or.jp/features/withcorona/20201013.html> (2021.1.3閲覧)

「突然の休校、3か月ぶりの学校再開 衛生管理を徹底し、給食の楽しさに磨きをかける」

3) <https://www.jiji.com/jc/article?k=000000032.000054387&g=pri> (2021.1.8閲覧)

「コロナ自粛の運動不足で子どもの体に異変、発達への影響も懸念」 (2021.1.8閲覧)

コロナ禍での短期大学栄養士養成課程における校外実習に関する報告

A Report on Practice Outside the School in Food Service Management on-Site Training in Food Service in the COVID-19 Pandemic

古俣智江 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科

馬場和久 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科

「校外実習」は栄養士免許取得のための必修科目であり、本学健康栄養学科食物栄養専攻では2年生前期開講科目となっている。また、校外実習においては、科目の性質上、事前教育、学外実習、事後教育の3部構成にて実施されており、その他の栄養士免許取得のための必修科目とは異なった性質の科目である。令和2年、新型コロナウイルス感染症の発生及び感染拡大に伴い、緊急事態宣言が発出され、校外実習履修学生は自宅における課題学習を余儀なくされた。緊急事態宣言が解除、面接授業の再開後も、新型コロナウイルス感染拡大の影響は大きく、特に著者の担当する校外実習を含む実習等の授業においては、休講、実習変更、実習中止等が起こりうる事が想定され、授業や実習連絡会等の実施方法の見直しを迫られた。そこで本稿では、コロナ禍での本学健康栄養学科食物栄養専攻における校外実習に関する取組と今後の課題について報告する。

キーワード：コロナ禍、校外実習、学外実習、栄養士

1. はじめに

「校外実習」は、栄養士免許取得のための必修科目となっている。実習の目的は、給食業務を行うために必要な給食サービス提供に関し、栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させることである。実習の実施時期は、養成期間の後半に行うことを原則としており、例えば、養成施設が2年制の場合は、2年生において行うこととし、実習の前提となる授業を修了した後、順次実施するよう設定しなければならない（臨地実習及び校外実習の実際、2014）。

本学では、2年生の原則8月、9月を実習期間とし、実習施設における校外実習（以降、学外実習とする）を実施している。校外実習は、事前教育、学外実習、事後教育の3部構成となっており、学外実習の実施前には、事前教育が必要となる。例えば、実習に当たっての心構え、事前準備の徹底、実習開始時と実習中の注意、調理作業中の注意などが挙げられる。

令和2年度の校外実習を含む前期開講科目については、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出及び解除を受け、自宅における課題学習と分散登校による面接授業を実施した。そのため、通常では、15回実施する面接授業の回数及び時間が大幅に減少することによる、本授業の到達目標が未達成となる学生が例年より増加する可能性も危惧された。

そこで本稿では、コロナ禍での本学健康栄養学科食物栄養専攻2年生（以下、本学）における校外実習に関する取組及び今後の課題について報告する。

2. 方法

本学における「校外実習」に関わる事項を対象とした。コロナ禍での事前教育としては、面接授業が大幅に減少した中で実施した「校外実習授業」、「実習直前指導」、実習施設での「学外実習」、事後教育としては、「校外実習連絡会」を主に取り上げ報告する（表1）。

また、実習施設からの評価の集計には、マイクロソフト エクセルを用いた。

表1 令和2年度 校外実習における主なスケジュールおよび内容

年次時期	主なスケジュール		内容
2 年 前 期	事前教育	1回目～7回目	自宅における課題学習 ・校外実習における目標及び校外実習に向けての自己分析 ・「給食の運営」関連科目 講義ノート作成 （大量調理施設衛生管理マニュアルを中心に） ・各施設の特徴及び給食の特徴 講義ノート作成
		8回目～15回目	面接授業 ・課題学習の復習 「給食の運営」関連科目の復習 （大量調理施設衛生管理マニュアルを中心に） 各施設における特徴及び給食の復習 ・実習の心構え及び関連事項、実習関係書類の作成など（※） ・実習前筆記試験 ・学長講話
		実習施設におけるオリエンテーション	実習生調書の作成、電話のかけ方、報告の仕方、報告書作成など（※面接授業にて指導）
		実習課題作成	個人での作成、関係教員の指導を受ける
		保菌検査	保菌検査実施
	実習直前指導 (実習時期・グループ別)	I期	7月31日(金)クラスアワー・実力認定試験後～
		II期	8月7日(金)14:30～
		III期	8月21日(金)10:00～
		IV期	9月7日(月)10:00～
		V期	10月1日(木)14:00～
学外実習	実習施設における校外実習 (学外実習)	実習施設において10日間の実習 (実習施設にて行った実習内にて報告すべき内容は、当日中に担当教員に報告すること) ※体調不良、けが、遅刻欠席、器具の破損、忘れ物など	
	訪問指導	実習施設・実習時期別の訪問指導実施	
	実習終了報告	担当教員へ実習終了の報告をする	
2 年 後 期	事後教育	お礼状の作成	前期授業内で学習した内容をもとに、お礼状を作成し、担当教員の添削指導を受ける(施設・実施時期別)
		実習日誌・課題の振り返り	自身の実習の振り返り
		校外実習連絡会	2020年度はオンラインにて実施(学生参加なし)
		実習報告書の作成	実習報告書の作成(グループ別)
		実習体験発表会	代表学生による発表、質疑応答

(国際学院埼玉短期大学シラバス, 2020 をもとに作表)

3. 結果

3-1 校外実習について

校外実習では、栄養士免許取得に必要な単位である「給食の運営」を給食現場における実践を通して給食業務を行うために必要な食事の計画や調理を含めた給食サービス提供に関する技術を修得する。そのため、給食の運営に必要な給食費、献立作成、食材管理、食材発注、検収、食数管理、調理作業、配膳、提供サービス等の基本的な業務に関する実習を行う。

平成 14 年 4 月に施行された改正栄養士法では、「校外実習」の教育目標は、「給食業務を行うために必要な給食サービス提供に関し、栄養士として具備すべき知識および技能を習得させる」とされている。すなわち、この教育目標には実践の場での「課題発見（気づき）、問題解決」と「専門的知識と技術の統合」という 2 つのキーワードが含まれている。

この 2 つの教育目標を実現するために、実習科目や具体的な最終目標および学習目標/行動目標の関係を整理している（図 1）（臨地実習及び校外実習の実際,2014）。

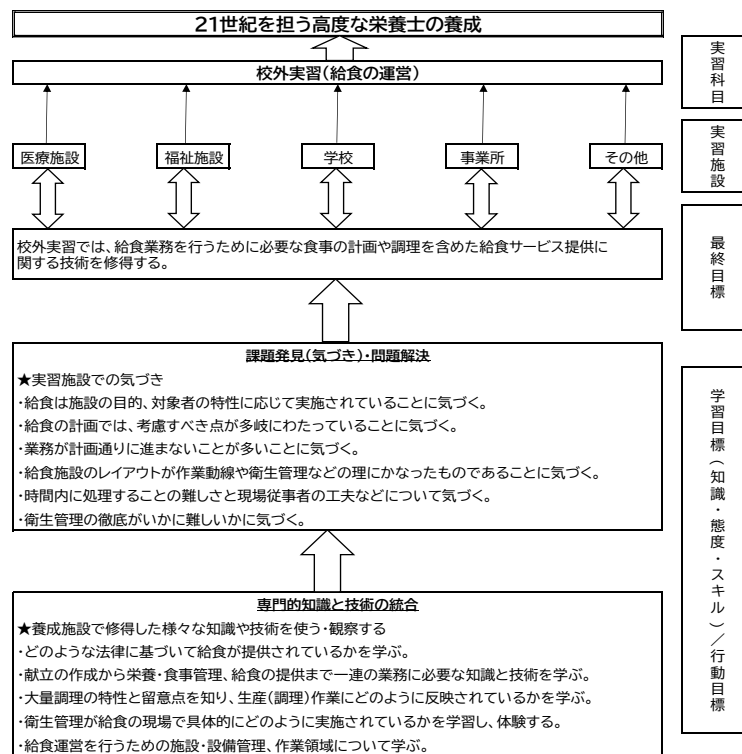


図 1 校外実習における実習施設、実習の最終目標及び学習目標/行動目標

これらの目標を達成させるためには、実習施設と養成施設の両者が関わっているが、特に養成施設では、栄養士として具備すべき知識及び技能を習得させるために必要な教育を事前教育として行っておくことが必要である。

本学においても、校外実習は、給食の運営（調理学、調理学実習Ⅰ、調理学実習Ⅱ、給食計画論、給食実務論、給食管理実習、校外実習）の教育内容として構成されている。学生は、2 年生前期の事前教育終了後、学外実習を実施している。

3-2 令和 2 年度 コロナ禍における校外実習に向けて

令和 2 年 2 月 28 日、新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について事務連絡が発出された。

事務連絡の対象職種には栄養士も含まれており、1. 学校養成所等の運営に係る取扱い（1）及び（3）において、新型コロナウイルス感染症の影響により実習中止、休講等が生じた際の対応が示されている。

また、令和2年6月1日、新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について事務連絡が発出された。新型インフルエンザ等対策特別法に基づく全都道府県に対する緊急事態宣言が解除される中で、実習等の弾力的な運用の趣旨を改めて通知することと共に、養成施設等における実習等の授業の弾力的な取扱いの具体的な取組事例や個々の学生等の状況に応じた学修機会の確保等が示されている。

本学では、学外実習実施の1年前に実習受け入れの内諾を実習施設より頂いており、実習年度当初に改めて実習依頼を行っている。

しかしながら、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、やむを得ず実習の受け入れの中止等も見られた。

新型コロナウイルス感染症の影響を受けなかった令和元年度の受け入れ状況と令和2年度を比較すると、19施設から12施設の受入施設の減少となった(表2)。

表2 学外実習受入施設一覧(令和元年度と令和2年度の比較)

施設名	令和元年度 受入人数	令和2年度 実習施設数	令和2年度 実習受入状況	令和2年度 受入人数
A	3	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
B	2	1	受け入れ可	4
C	4	2	受け入れ可	3
D	1	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
E	6	3	受け入れ可	20
F	3	4	受け入れ可	2
G	2	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
H	1	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
I	4	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
J	1	—	東京オリンピック開催が予定されていたため、 2020実習受け入れ不可(事前連絡あり)	—
K	1	5	受け入れ可	1
L	6	—	新型コロナウイルス感染拡大防止のため受け入れ不可	—
M	1	6	受け入れ可	2
N	4	7	受け入れ可	2
O	2	8	受け入れ可	4
P	2	9	受け入れ可	3
Q	2	10	受け入れ可	3
R	1	11	受け入れ可	3
S	2	12	受け入れ可	5

3-3 自宅における課題学習及び面接授業

新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出を受けて、本学でも自宅における課題学習が開始された。

校外実習の授業についても教職員ポータルサイトの学習ポートフォリオから学生に対し、課題の提示を行った。通常15回の面接授業で行っている授業のうち、前半7回は課題学習、後半8回は面接授業となり、面接授業の回数が大幅に減少することとなり、授業方法の見直しを迫られた。校外実習は、専門知識や技能を学ぶ場だけではなく、栄養士としてだけではなく、社会人としての素養やマナーを学ぶ場となっている。そのため、学生と対面して行う面接授業は非常に重

要な時間となっており、学生が校外実習の到達目標を達成できるように授業方法の変更を行った。

授業科目トップ > 学習ポートフォリオ

履修生が課題に対して一時保存等提出準備に入った時点で登録した課題は削除できなくなります。 ※は必須です。

■学習ポートフォリオ (閲覧中)

履修科目名	校外実習 (健2AB)
提出期限	2020/04/11 (YYYY/MM/DD)
課題名	最大50文字 校外実習における目標及び校外実習に向けての自己分析
詳細	10行以内で400文字以内 1年次に履修した調理学実習Ⅰ・Ⅱなどでは、班員と協力して食事を作りあげる喜びや大団円について身をもって体験したと思います。人には得意・不得意、長所・短所などがありますが、あなたの理想とする栄養士像や理想とする栄養士に近づくために努力していることを踏まえて、校外実習における目標及び、自分自身を様々な視点から自己分析することで、多くの調理従事者が働く調理現場で、得意なことや長所はどのように活かしていくことができるか、不得意なことや短所は改善するためにどのような努力をしていくか、あなたの考えを述べてください。 ※シラバス相対回数は第1回目、課題の文字数は1100字以上1300字以内とします。
レポート型の種類	レポート保存型
評価回数(目標自己設定用)	0回 (注:履修生が評価内容を設定後は回数の変更はできません。)
発行者名	古俣 智江
添付ファイル	

図2 学習ポータルサイトを用いての学生への課題連絡

学習ポートフォリオ 新規作成

学習ポートフォリオ 検索

年度: 2020 課題名:

実施学期: 前期 提出期限: ~

履修科目名: 校外実習

検索 クリア

年度	学期	履修番号	履修科目名	公開開始	提出期限	課題名 (発行者)	レポート型	発行	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.08	第7回 施設の特徴 (確認) (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.01	第6回 大量調理施設衛生管理マニュアル (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.01	第5回 大量調理施設衛生管理マニュアル (大量調理2含む) (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.01	第4回 施設の特徴 (確認) - 前食施設および大量調理 (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.01	第3回 各施設の特徴② (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.06.01	第2回 各施設の特徴 (学校給食・業務用給食) (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集
2020	前期	11308	校外実習 (健2AB)		2020.04.17	校外実習における目標及び校外実習に向けての自己分析 (古俣 智江)	レポート保存型	済	閲覧	編集

図3 学習ポータルサイトにおける課題提示一覧

まず、課題学習では、自己分析や給食の運営に関する科目の復習を中心に、机上で取り組める内容を指示した。なお、給食の運営に関する科目の復習には、主に大量調理施設衛生管理マニュアルについて重点的に学習できるように、学生が直筆で作成するノートを課題とした。

面接授業では、課題学習で作成したノートを使用し、大量調理施設衛生管理マニュアルの重要

項目の確認を行った。また、実習の心構えやマナー、実習関係書類等の取扱い等を中心に学生の様子や理解度を観察しながら授業することが必要となる実践的な内容に主眼を置き、授業を運営した。また、栄養士免許取得を目指す者としての質の担保をはかるため、実習前筆記試験を実施するとともに、校外実習直前学長講話を実施した。

3-4 実習直前指導

学外実習開始前には毎年、実習時期別に実習直前指導を行っている。今年度も学外実習開始前に、実習時期別にⅠ～Ⅴ期に分かれて、実習直前指導を行った。

実習に伴い、最終確認事項の確認を行うが、コロナ禍での感染防止対策の実施について連絡をした。学生は登校の際、自身の健康確認は検温及び健康状態にて確認をしているが、実習開始の2週間前から学外実習における健康記録票への記載も同様に行い、実習期間中（朝晩）、実習終了後の2週間も同様とした。

感染予防及び感染拡大予防については、従来の対策を基本とし、実習前、実習期間中に体調不良をきたした場合は、実習施設には訪問せず、本学校外実習責任者（以下、実習責任者）に報告することを徹底した。また、新型コロナウイルス感染が確認または疑われる場合は速やかに担任や実習責任者に報告するよう説明した。

3-5 実習施設における校外実習

前述したように、今年度の受入施設は12施設となった。昨年度から比較すると施設としては7施設の減少となった（6施設が新型コロナウイルス感染拡大防止のため、1施設が東京オリンピック開催予定だったため、1年前より受入不可が決定していた）。

しかしながら、実習直前にやむを得ず、受入不可が決定した施設も複数あり、受入が決定している施設に再度依頼、快諾していただくことができた。したがって、今年度のコロナ禍での学外実習は、学生全員が受講することができた。

実習施設からの評価は、総合評価、事前準備、時間厳守、挨拶・適切な言葉遣い、栄養士としての服装、責任感、意欲と積極性、協調性、衛生観念、清掃の10項目に対し、優れている、やや優れている、普通、やや劣る、劣るまでの5段階評価となる。

図4に令和2年度（n=52）、令和元年度（n=48）、平成30年度（n=50）の校外実習における実習施設からの評価を示す。図5の作成に当たり、各項目に対し、優れている、やや優れているという評価を抜粋し、学生に対する割合で示した（図中令和2年度はR2、令和元年度はR1、平成30年度はH30と示す）。

総合評価で3年間を比較すると、実施年度により若干のポイントの差はみられるが、80%前後の学生が「優れている」、「やや優れている」という評価であり、大きな差は見られない。

今年度、過去2年間に比較し特筆して、「優れている」というポイントが低かった項目は、事前準備（前年度比35.8ポイント減）、時間厳守（同46.7ポイント減）であったが、「優れている」、「やや優れている」という項目の両者の割合を合わせて、3年間の評価を比較すると、大きな差はみられなかった。

また、学生には学外実習中に何らかの問題を招いてしまった場合、当日中にその状況を実習責任者に報告するよう説明している（状況報告は、学生から報告がある事項もあるが、実習施設から報告がある事項もある）。

今年度は、衛生観念、調理中の怪我、マナー、挨拶、調理作業中のミス、私語、包丁遣い、課題不備や未提出、忘れ物、時間厳守、体調不良、指示に対する理解不足などが挙げられ、実習責任者が学生指導及び実習施設指導者へ連絡する体制を確立している。また、大きな問題に対しては実習責任者のみならず、学科長からの学生指導も実施している。

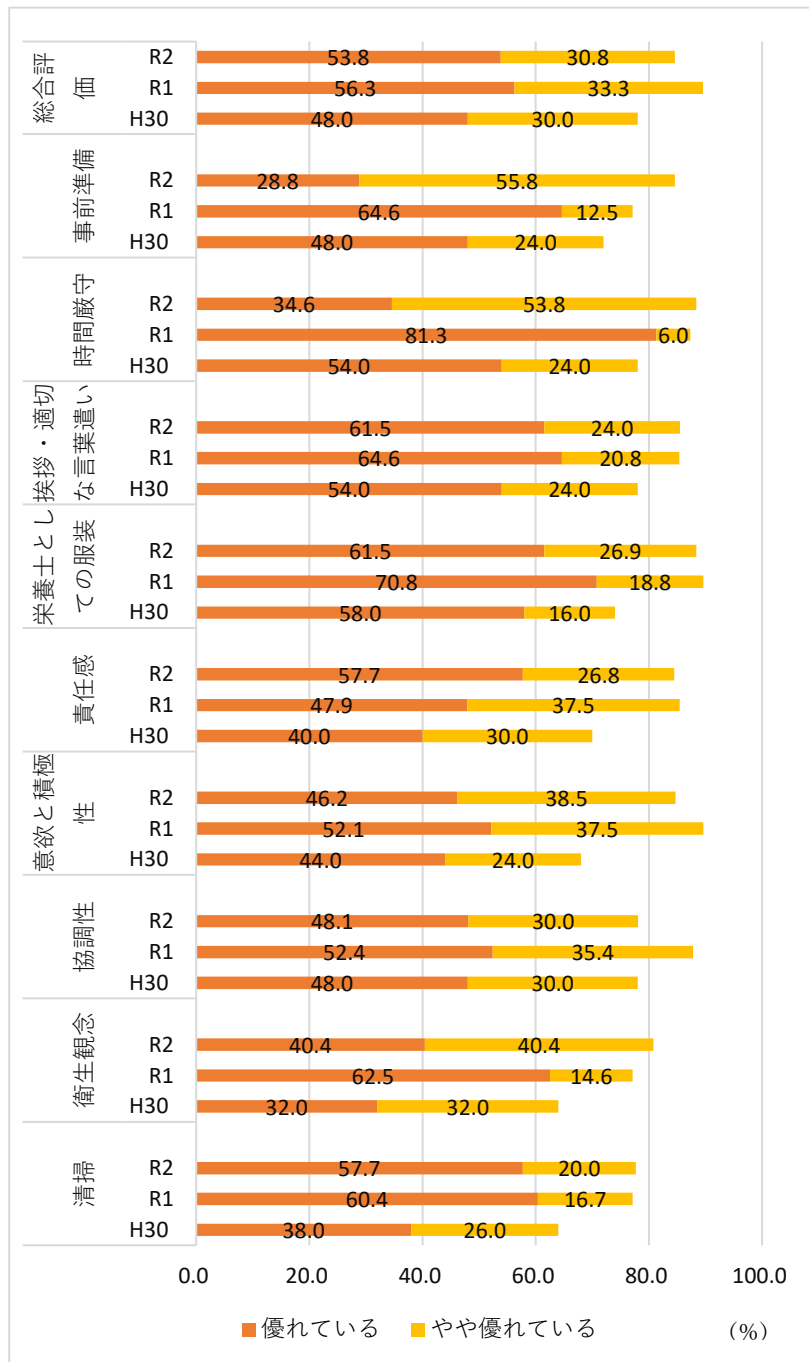


図4 過去3年間における実習施設からの「優れている」「やや優れている」の評価割合

3-6 実習連絡会について

校外実習では、実習の在り方について実習施設からの意見を賜り、今後の教育の一層の充実を

図るために学生が学外実習を終えた後、実習連絡会を開催してきた。

しかしながら、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面による実習連絡会の実施が困難な状況となった。このような状況の中、連絡会の在り方について協議の結果、関係者の健康と安全を考慮し、コロナ禍での連絡会を①オンライン、②電話、③メール、④アンケート等の手段を用い、実施することとした。なお、連絡会の実施方法にあたっては、いくつかの実習施設に実習連絡会の実施方法に関する聞き取りを行い、頂いた意見を参考とし協議、決定した。

実習施設により、通信状況等の環境は異なっているため、実習施設には前述した複数の参加方法から、最も出席しやすい方法を選択して頂いた。

オンライン（Zoom）による実習連絡会は令和2年10月16日（金）16時30分より1時間程度を目安に実施した。学内外出席者には事前に「令和2年度校外実習連絡会」の資料を配付及び郵送し、また、実習責任者より、実施前日までにZoomのミーティングID及びパスコードの連絡と開催日時の再連絡をメールにて行った。

実習連絡会実施教室（host）は、チュートリアルルームⅡと設定した。実施教室には、密を避けるため、学科長、司会、実習責任者、通信環境及び記録担当教員のみ（6名）を配置し、司会（host）は教室備え付けのノートパソコン、またはiPadを使用し参加した。学長は学長室より、その他学科教員（4名）は各研究室から参加した。なお、実習施設における指導者の先生方（4施設5名）には、各実習施設より参加頂いた。



写真1



写真2



写真3



写真4

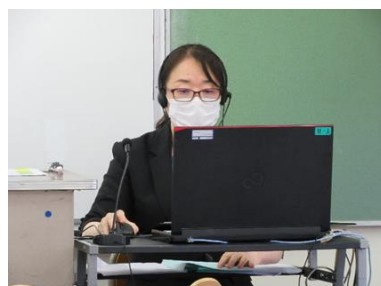


写真5



写真6

オンラインを用いた実習連絡会では、コロナ禍での学外実習における学生の状況及び様々な視点での意見交換をすることができた。また、今後の栄養士教育に当たって本学に望むことやこれからの校外実習や学外実習の実施に向けて参考となる意見を伺うことができた。

また、その他、メール（2施設）、電話（1施設）、アンケート（5施設）など複数の方法を用いて実習施設に合わせた施設別の実習連絡会を実施した。

表 3 実習連絡会学内出席者（2020年10月16日現在）

会場	学内出席者
学長室	大野 博之 学長
テュートリアルルームⅡ (host)	馬場 和久 教授・学科長(総括) 大 雅世 准教授・学科長補佐(司会) 古俣 智江 准教授・校外実習責任者(経過報告) 福田 馨 助教(記録) 田中 佑季 助教(通信環境) 野村知恵子 助手(記録)
各研究室	塩原 明世 教授、田中 政巳 教授、富重 慶子 講師 小山 智久 助手(通信環境)

トピック: 令和2年校外実習連絡会 (国際学院埼玉短期大学)
時間: 2020年10月16日 04:00 PM 大阪、札幌、東京

Zoomミーティングに参加する
<https://us02web.zoom.us/j/88127803498?pwd=dlpZQWNnQ2ZlTUUViZ1d2bkksaG9UwZz09>

ミーティングID: 881 2780 3498
パスコード: 613254

図 5 実習連絡会（オンライン）実施連絡

4. 考察

古俣ら（2011）は、学外実習には漠然とした不安を抱えている学生も多いと報告しており、コロナ禍により学生も「校外実習ができるのか」、「栄養士免許は取得できるのか」というさらに大きな不安を抱えていたと推察できる。しかしながら、養成施設も実習施設も栄養士を目指す学生のために何とか現場での実習を経験させてあげたいという思いが全員の校外実習実施につながった。

学外実習受入の内諾は、学外実習の1年前にさかのぼり、順次手続きを行っていく。今年度は、時を同じくして、緊急事態宣言の発出により、学生は登校することが不可能となり、自宅での課題学習、解除後は面接授業の再開となった。そのため、面接授業が通常の下半分以下となり、短期間で実習に必要な教育内容を学習するため、教員側も急遽、短期間で絞った面接授業を展開することになった。授業と同時進行で、実習施設とは学外実習の打合せを進めていくが、今年度はコロナ禍での実習となること及び感染拡大が終息する気配も見られないことから、実習直前に受入中止となった施設が複数みられた。

「事前準備」や「時間厳守」という項目において実習施設からの「優れている」という評価に特化して見てみると、過去2年間に比較し低い割合を示していたことは、コロナ禍で、直前の実習変更等があり、課題不備や提出遅れが散見されたこともその一因となっていると考えられる。

また、実習連絡会では、各実習施設にあった出席方法を選択していただき実施した。特にオンラインを用いた連絡会では、実際に学生の指導に当たってくださった先生方と意見交換をすることができた。その中で、現代の学生への教育に必要な的確な意見があった。「大量調理施設衛生管理マニュアルを理解することも重要であるが、現代の学生には、具体的な指導が必要と感じる。」ということである。具体的には、身支度（爪を短く切ること、手洗い等）、調理方法等、なぜそれが必要なのか、しっかりと伝えるということである。また、実習では手早さよりひとつひとつの作業に対し、丁寧さが重要であり、衛生及び調理技術面については、日頃からの経験が必要であるという内容である。現代の学生には、何事も具体的に説明する必要があるということを確認した実習連絡会であった。

新型コロナウイルス感染症の発生及び拡大のために、現在、多くの養成施設が実習の対応に苦慮しており、様々な対策を講じながら講義、演習、実習を行っている。栄養士の重要な役割は、毎日の食事提供である。コロナ禍という非日常の場面でも食事を喫食する対象者が目の前にいる限り、食を通して健康を守る役割は、栄養士が担っている。著者は、コロナ禍での校外実習を通して、コロナ禍で学んだ学生だからこそできる対象者へのサポートがあり、また学生がコロナ禍

で身に付けた力や考えさせられた思いは、栄養士として食を通して人々の健康に還元することができると考えている。著者らは、コロナ禍の今だからこそできる教育を模索し、人々に寄り添うことができる栄養士を育てていきたい。

5. 終わりに

本稿では、コロナ禍での校外実習に関する取組と今後の課題について報告した。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、授業や実習連絡会等の実施方法の見直しが迫られた。栄養士のみならず社会人としての素養やマナーを事前に学ぶ校外実習の事前教育の場は、面接授業の回数は減少、時間も短縮された。そのことによる影響は大きく、学生の実習施設での対応等は難しいところもあったと考えられる。実習施設からの評価としては、過去2年間に比較すると「優れている」の評価割合が低かった項目があったが、「やや優れている」の評価割合と合わせて見てみると総合的には過去2年間と同様の評価結果であった。実習連絡会の実施では各実習施設に対応した出席方法を選択してもらい、コロナ禍における校外実習の意見交換を行うことができた。

コロナ禍での栄養士教育は、今だからこそできることも多い。将来、食事の提供を通じて多くの人々の健康を守ることができる栄養士を育てるためにコロナ禍での教育について継続して検討していきたい。

謝辞

栄養士を目指す学生全員のために、コロナ禍での学外実習において多くの実習生の受入れ快諾してくださり、貴重な実習の経験をさせていただきました各実習施設の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

国際学院埼玉短期大学 (2020) 『2020年度 シラバス』

公益社団法人 日本栄養士会・一般社団法人 全国栄養士養成施設協会編 (2014) 「臨地実習及び校外実習の実際 (2014年版)」

<http://www.dietitian.or.jp/assets/data/learn/material/h26rinchi-ma00all.pdf>

(2021/01/01 参照)

厚生労働省 (2020) 「事務連絡 令和2年2月28日 新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」

<https://www.mhlw.go.jp/content/000636144.pdf> (2021/01/01 参照)

厚生労働省 (2020) 「事務連絡 令和2年6月1日 新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」

https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021/01/01 参

照)

古俣智江・福田馨 (2011) 「栄養士養成における校外実習の意識における検討 - 事前教育前の校外実習に対する不安について」『国際学院埼玉短期大学研究紀要第32号』, pp. 57-63

報告

調理師養成課程における校外実習実施のための調査について

Survey on Off-campus Training
of Cook Training Course

田中辰也 国際学院埼玉短期大学 健康栄養学科

本学健康栄養学科調理製菓専攻 1 年次では 2 月に調理師免許取得のための校外実習を実施している。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、例年とは異なった形での実習となることが想定される。そのため、校外実習履修学生とその保護者に校外実習に関するアンケート調査を行った。また、学生にはアンケート調査の他に自己分析も行った。

本報告は、今後、コロナ禍で校外実習を実施するための基礎資料を得ること、またその結果を今後の学生教育に活かすことを目的に実施したものである。

キーワード：調理師養成、校外実習、事前指導、新型コロナウイルス感染症

1. はじめに

本学健康栄養学科調理製菓専攻では 1 年次 2 月に校外実習を実施している。この校外実習は調理師免許取得を目指す学生が実際の調理現場の経験から将来、多様な条件に即応できる専門的な知識や技術の修得を目指すものである。更には調理師としての人間性を身に付けることを目的に実施しているものであり、調理製菓専攻 1 年生が履修する科目と位置づけている。

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の影響により校外実習生受け入れを困難と判断する事業所が多く、校外実習の実施についても慎重な対応が必要である。また、この状況が複数年続くことも考えられるため、今後、学生が安心して校外実習に臨める環境を整えたいと考える。

本報告は、令和 2 年度校外実習履修学生とその保護者に校外実習に関するアンケート調査に基づいたものである。また、当該学生には、校外実習を迎えるにあたり自己分析をしてもらい、今後、コロナ禍で校外実習を実施するための基礎資料を得ること、そしてその結果を今後の学生への教育に活かすことを目的に行った。

2. 方法

令和2年9月及び令和3年1月に、履修学生に対し、専用のシート（図1）を用いて、自己分析を行った。回収率は、両時期とも100%だった。

校外実習に関する自記式アンケート調査を履修学生17名（令和2年10月実施、回収率100%）及び保護者17名（令和3年1月実施、回収率88.2%）に行った。集計はマイクロソフトエクセルを用いた。

健康栄養学科調理製菓専攻 校外実習 自己分析チェックシート		＜評価の基準＞	
		5・・・非常に良い	4・・・良い
		2・・・やや劣る	1・・・劣る
【自己分析チェックの観点】			
① 積極性		5	4 2 1
・自分から積極的に明るく挨拶をすることができる			
・何事も積極的に学ぼうとする姿勢がある			
② コミュニケーション力		5	4 2 1
・相手の話を素直に聞くことができる			
・謙虚で礼儀正しい行動をすることができる			
③ 責任感		5	4 2 1
・与えられた役割を理解し、最後までやり遂げることができる			
・常に時間や約束事を守ることができる			
④ ストレスコントロール力		5	4 2 1
・困難なことも前向きに捉え、熟意を持って対応することができる			
・不得手な事でも成長の機会であると考え行動できる			
⑤ 衛生に関する基本的知識		5	4 2 1
・衛生的で正しい身だしなみ（頭髪、爪等）が身に付いている			
・身の回りの整理整頓や清掃をすることができる			
⑥ 調理技術		5	4 2 1
・基本的な切り方などの調理技術が身に付いている（調理器具の扱い方等）			
・新たな技術習得に対する意欲がある			
		合計点	
		点	
健康栄養学科調理製菓専攻 1年C組 _____			

3. 結果

3-1 本学健康栄養学科調理製菓専攻における校外実習

前述のとおり、健康栄養学科調理製菓専攻では、校外実習を全員が履修する科目と位置づけている。1年次の2月に80時間以上の校外実習を行うものであり健康栄養学科調理製菓専攻1年生全員が履修している。履修学生は2月に実施される校外実習の事前学修として後期から当該授業に取り組んでいる。

本科目の授業概要は「調理師業務の実際を実地に経験し、調理師としての職業意識及び態度を学ぶとともに、幅広い業務全体を総合的に学ぶことを通して、調理師として具備すべき専門的知識及び技術を習得し、社会から信頼される調理師を目指すことを目的とする。」としている。

到達目標は「調理師として相応しい態度や知識と技術について説明できる。多様な調理業務の基本が実践できる。」となっている。

本科目の授業計画は1～8回が事前学修であり、9～13回が事業所で行う実習、14～15回が事後学修となっている（表1）。

表1 校外実習授業計画

カテゴリー	主な内容
事前学修	<ul style="list-style-type: none">・校外実習の目的及び概要（心構えを含む）・実習関係書類の説明と記載上の注意点及び作成・調理師免許取得のための基本的な知識及び調理技術レベルの確認・実習課題の選定及び取り組み・実習施設でのオリエンテーション等
校外実習	実習施設における校外実習（合計80時間以上）
事後学修	<ul style="list-style-type: none">・校外実習の自己評価、実習ノートの整理・まとめ（実習報告書作成等）

（国際学院埼玉短期大学シラバス，2020をもとに作表）

3-2 校外実習における履修学生の自己分析

第1回校外実習の概要説明時に専用のシートを用いて自己分析を行っている。自己分析は本学の教育方針と関連した項目となっており、①積極性（挨拶）、②コミュニケーション力、③責任感（時間）、④ストレスコントロール力、⑤衛生に関する基本的知識（清掃）、⑥調理技術、の6つの観点から自己分析を各5点満点、合計30満点で行った。

自己分析の結果、平均点は①積極性（挨拶）は3.7点、②コミュニケーション力は3.8点、③責任感は4.1点、④ストレスコントロール力は3.1点、⑤衛生に関する基本的知識は3.4

点、⑥調理技術は 2.8 点、合計は 21.1 点であった。このことから、ストレスコントロール力と調理技術面の修得に自信が持てていないことが明らかになった。

そのため、その後の第 2 回、第 4 回の授業では、ストレスコントロール力を身に付けるためのグループディスカッションを行った。教員によるテーマ提示、グループディスカッション、発表、講評の流れで実施した。提示したテーマは「前向きに捉えるための考え方」、「ストレスと成長」であり、失敗を恐れない、感謝の気持ちを持つ、様々な状況を想定して準備しておくことなどの意見が多く挙げられた。

また、確かな調理技術修得のために実技練習日を設定し、各自が技術向上のための取組を行った。その内容は箸の持ち方、包丁研ぎ、大根の桂剥き、玉ねぎのシズレ（みじん切り）等の実技練習である。この取組は各々が空き時間を利用して行い、全員が最低 1 回以上参加したことを確認できた。この実技課題は、全国調理師養成施設協会が調理師養成教育の質保証と社会的評価を高めるために実施している実技検定の内容で行い、同検定の基準に沿った評価によりフィードバックを行った。

第 7 回の授業では学長講話を行い、①校外実習の目的、②実習生としての心構え、実習に対する基本認識、実習生としての責任意識、プロフェッショナリズムについて学修した。これらの事前学習を経て第 8 回目に再度同シートを用いて自己分析を行いこれまでの事前学修の効果を確認した（図 2）。

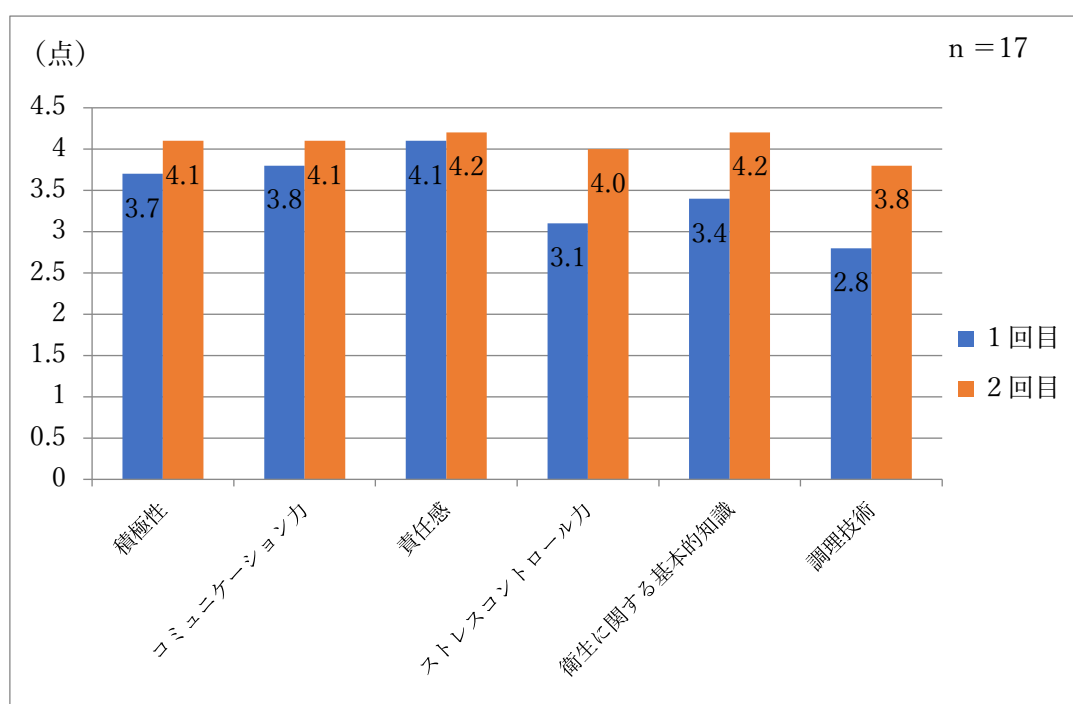


図 2 自己分析結果

図 2 より、①積極性（挨拶）は 3.7 点から 4.1 点、②コミュニケーション力は 3.8 点から 4.1 点、③責任感は 4.1 点から 4.2 点、④ストレスコントロール力は 3.1 点から 4.0 点、⑤

衛生に関する基本的知識は 3.4 点から 4.2 点、⑥調理技術は 2.8 点から 3.8 点、合計は 21.1 点から 24.4 点となり、全ての項目で点数が上昇し、学修成果が確認された。

3-3 校外実習におけるアンケート調査（履修学生及び保護者）

第 2 回の授業では、校外実習の目的を説明した。校外実習ガイドライン（厚生労働省）には『調理師業務の実際を実地に経験することにより、調理師としての職業意識及び態度を学ぶとともに、幅広い業務全体を総合的に学ぶ事を通して、調理師として具備すべき専門的知識及び技能を修得することを目的とする。』となっている。

その後、自身が感じている校外実習への不安について①知識・技術面、②コミュニケーション面、③新型コロナウイルス感染症関係、④その他、という項目でアンケート調査を行った。その結果を表 2 に示す。

表 2 学生が抱える不安

項目	回答内容
① 知識・技術面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指示された通り業務がこなせるか ・ 求められている知識・技術レベルに達しているか ・ 学んできたことが活かせるか
② コミュニケーション面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の礼儀が社会で通用するレベルか ・ 様々な世代の方とコミュニケーションが取れるか ・ 緊張して迷惑を掛けないか
③ 新型コロナウイルス感染症関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感染予防の徹底が習慣として身に付くか ・ 希望する施設で受け入れてもらえるか ・ 実習先でのコロナ感染が心配 ・ 自分が感染させてしまう原因にならないか ・ 緊急事態宣言による 4 月～5 月末までの学修の遅れで迷惑を掛けてしまわないか ・ 感染拡大によって実習が中止になってしまわないか
④ その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体調不良になってしまった場合の対応 ・ ハラスメントなどがあった場合はどうすればよいか ・ 就職の参考になるか（繋がるか）

表 2 で示された学生の回答結果を後の学修内容に反映させた。自己分析、グループディスカッション、学長講話等を取り入れた学修内容を授業で実施して学生の不安解消に努めた。

抱えていた不安の解消についての調査を行った結果、解消できた、概ね解消できたとの回答が 70.5%あった。また、解消するために取り組むべきことが分かった等の意見があった(表 3)。

表 3 抱えていた不安の解消や取り組むべきこと (原文のまま)

項目	回答内容
① 知識・技術面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 求められる技術が身に付いているか不安でしたが、全ての実技試験に合格することが目安になると思うので、たくさん練習して自信を付けたい。 ・ 頑張れることを今すぐ取り組む
② コミュニケーション面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 挨拶や返事を自分から行い、コミュニケーション力を向上させたい。 ・ 礼儀などは普段の生活から心掛けるようにしたい。 ・ 人間関係に不安があったが、学生らしく謙虚さを持って臨みたい。 ・ しっかりしたビジネスマナーを身に付けていきたい
③ 新型コロナウイルス感染症関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 希望する実習先に行けるかについては、コロナ禍の中、受け入れて下さるだけでも感謝したい気持ちになった。精一杯頑張ろうと思う。 ・ 感染が心配だが、予防を徹底して臨みたい。 ・ 感染拡大によって実習が中止になってしまわないか不安があったが、その場合はそれに代わる内容を学内で行うと聞いて安心した。 ・ コロナウイルスに不安がある場合は校外実習に行かず、学内実習も可能と聞いて安心した。家族と相談して決めたい。 ・ 家族は心配しているが、校外実習には自己管理を行い参加したいと思う。
④ その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体調管理について意識が高まった。特にノロウイルスを持ち込まないよう、食生活で注意したい。 ・ 何でも学校に相談できると思い安心した。

次に、保護者対象のアンケート結果及び校外実習実施に対する保護者からの意見・要望等について示す(表 4, 5)

表4 校外実習の実施に対する保護者の意識調査アンケート

	理由（原文のまま）
実施に賛成 13名（86.7%）	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症予防対策を取っている事業所なら問題ないと思います。 ・体験によって勉強できるので実習を行えば良いと思います。 ・実習を受け入れて下さる事業所の方々には本当に感謝しております。1年後には社会に出るという自覚もまだないと思いますので、体験することによっていろいろ考えて欲しいです。 ・実際の調理現場を体験する事により進路の方向を決定する上で本人の参考になるのではないかと思うので実施させたいと思います。 ・実際の調理現場を体験できるのは貴重なことなので是非とも実施していただきたいところですが、コロナウイルス感染がまた拡大している状況なので、緊急事態宣言が再発令されようとしている今現在では判断が難しいところであります。 ・学校では学べないものがその場にはあるので、本当に貴重な時間になると思います。 ・今、アルバイトさえなかなかできない状況で、働いた経験もないまま就職するには不安があります。そんな中、貴重な機会をいただける事は本当に有難いと思います。 ・感染状況によって見送りや中止は致し方ないと思います。希望としては実施して頂きたいです。
見送りが妥当 1名（6.7%）	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナが心配です。
どちらでもない 1名（6.7%）	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルスに感染されている方も沢山増加しているのでないかという心配はあります。

表5 校外実習に実施に対する保護者の意見・要望等

ご意見・ご要望（原文のまま）
<ul style="list-style-type: none"> ・可能であれば時期をずらす、自由参加にするなど柔軟な対応を宜しくお願いします。 ・良い経験として学んで欲しい。今後の参考になればと思います。 ・新型コロナウイルスの状況を見て実施をするか、しないか判断して頂きたいと思います。 ・このような状況の中、実習先を探していただき有難うございます。何があるかわかりませんができる限り実施できるようによろしくお願いします。 ・校外実習へ行けないのであれば（受け入れ先のご迷惑になるならば）学内での実施、又は見送りを考えるしかないと思います。 ・子供の為には実施をしてほしいですが、状況が状況ですので学校にお任せ致します。

4.まとめと課題

本学健康栄養学科調理製菓専攻 1 年生の令和 2 年度校外実習実施について、さまざまな影響を踏まえ検討をおこなった結果、本人の意向と保護者の承諾を尊重し、新型コロナウイルス感染のリスクがある中で校外実習に不安がある学生は、それに代わる学内実習に切り替えることを認めることとした。その結果 17 名中 16 名（94.1%）の履修学生が、学外における校外実習を希望していることが明らかになった。

事前学修も終盤にさしかかった第 8 回の授業で学生にヒアリングを行った。その結果、「実習に責任感を持って臨みたい」、「実習を経験させていただける事に感謝の気持ちを持つ」、「自分の弱い部分を成長させる」、「不安なことを前向きに考えられるようになったので、何に対しても挑戦する」、「挨拶や返事をしっかりして全力でやり遂げたい」、「何を想定して何を備えれば良いかが分かり安心できたので頑張りたい」等の前向きな意見が複数見受けられ、校外実習に意欲的な考えを示す学生が多く、実習に向けての熱意が高まっていることが確認できた。

校外実習に関して学生自身の意向や保護者の承諾が尊重され、自らが実習参加を選択できることは多くの学生の安心感につながっていることと推察できる。そのことから、校外実習実施に対して感謝の気持ちや意欲が高まるという変化が確認できた。しかしながら、学内実習を選択する学生も少なからず見受けられる。実際の調理現場での経験に近い、効果的で、少人数でも実施可能な学内実習プログラムの構築が課題として挙げられる。学内実習では実際の調理現場を経験して修得するスキルや進路選択の参考となるような内容を検討し支援する必要がある。

令和 2 年度は本学が依頼した施設のうち、73.6%の事業所が受け入れを見送っており、この状況は今後も長く続くことが予想される。特にホテル関係における実習受け入れ見送りの理由としては、学生を感染の危険に晒すわけにはいかないという判断やレストラン、宴会調理場等の稼働が殆ど無く、調理師としての仕事が皆無であるという理由からであった。

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の影響により実習生受け入れを見送った事業所が多数あり、多くの学生が希望する事業所で実習を行うことができなかった。また、受け入れを承諾してくださった事業所でも、今後の感染状況によっては実習中止や延期の可能性もあると想定している。今後もこのような状況が続くことも考えられるため、実習生受け入れ施設の確保は大きな課題と考える。学生を受け入れていただく事業所の確保のためには事業所との信頼関係を築き連携することが必要である。本学の校外実習の目的を理解して学生を受け入れていただくためには、例年の事前指導に加えて、自身が感染を持ち込まないために感染防止対策の徹底を習慣化し、身に付けるための事前指導も必要となる。加えて、日々変化する新型コロナウイルス感染状況により学生が実習中に遭遇する可能性がある問題を事前に想定し備えておく必要があると考える。

引用および参考文献

国際学院埼玉短期大学（2020）『2020年度シラバス』 p.3

公益社団法人 全国調理師養成施設協会（2020）『全調協実技検定 受験者ガイド』 p.4

厚生労働省（2016）『校外実習ガイドライン』

https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/655976_5691828_misc.pdf（2021/1/8） p.5

「疾患モデル動物の役割と貢献」

— CCI ラットを例に —

Roles and Contributions of Animal Models for Human Diseases: Taking the CCI Rat as an Example

田中政巳 国際学院埼玉短期大学健康栄養学科

キーワード: 疾患モデル動物、実験動物、ラット、小人症、軟骨

生命科学の発展に実験動物が果たしてきた役割と貢献は計り知れない。医学の分野においては多くの疾患に対して疾患モデル動物が作出され、ヒト疾患の病態解明と診断・治療に多大な役割と貢献を果たし、人類の健康と福祉に恩恵をもたらしてきた。本稿では疾患モデル動物について概説した。また著者が研究に用いている小人症モデル動物の CCI ラット (cartilage calcification insufficient rat、軟骨石灰化不全ラット) について、疾患モデル動物例として解説した。

1. はじめに

疾患モデル動物はヒト疾患の病態解明と診断・治療への応用に大きな役割をもつ動物である。疾患モデル動物には、観察や探索により得られた疾患を自然発症する疾患モデル動物 (自然発症モデル動物)、手術や薬物投与により作出し発症させた疾患モデル動物 (実験的発症モデル動物)、発生工学的的手法により作成された疾患モデル動物および遺伝子工学的的手法すなわちトランスジェニックや遺伝子ノックアウトなどの遺伝子改変技術により作出した疾患モデル動物 (遺伝子組み換えモデル動物等) がある。近年は遺伝子改変技術により作出された数多くの疾患モデル動物が研究に用いられるようになったが、2020年ノーベル化学賞の対象となったゲノム編集技術は遺伝子改変による疾患モデル動物の作出にも大きな貢献をもたらすと考えられる。これら探索や作出によって得られた様々な疾患モデル動物は、ヒト疾患の病態解明と診断・治療への応用に役立てられ、人類の健康と福祉に多大な恩恵をもたらしてきた。

本稿では疾患モデル動物の概要について解説するとともに、疾患モデル動物の1例として、著者が研究に用いている自然発症の小人症モデル動物である CCI ラット (cartilage calcification insufficient rat、軟骨石灰化不全ラット) を紹介する。

2. 動物実験と実験動物

動物実験とは動物を調べることで生命に関する情報を入手して生命現象を解明するために、また解明した生命現象を応用するために、例えば医療に応用するために行う実験のことである。実験動物とは動物実験に用いられる動物のことである。

3. 実験動物の種類

実験動物として様々な動物種が用いられている。代表的な実験動物を以下に示す。

線虫、ショウジョウバエ、ヤリイカ、アフリカツメガエル、ゼブラフィッシュ、キンカチョウ、げっ歯類（マウス、ラット、ハムスター、モルモット、ハダカデバネズミ、ウサギ）、ミニブタ、霊長類（コモンマーモセット、マカク属サル、カニクイザル、アカゲザル、ニホンザル）

これらはそれぞれに特徴があり、解剖学的特徴、生理学的特徴および体の大きさなど、実験目的に適した実験動物が用いられる。例えば、現在新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が世界的に拡大し、ウイルスの性質や治療の研究が進められているが、ウイルスや細菌の感染実験においては、感染性は動物種によって大きく異なり、感染実験では感染しない動物は使用できない。

実験動物の中で最も多く用いられてきたのは、小型の哺乳類である、げっ歯類のマウスとラットである。本稿で紹介する小人症モデル動物のCCIラットは、名前の通りラットである。本稿では以下、マウスとラットを中心に述べる。

① マウス

マウスは使用数の最も多い実験動物である。繁殖能力が高く、小型（成熟体重 18～40 g）で飼育も容易である。マウスは遺伝的特性が異なる多くの系統が作出され、それらは近交系が確立されており遺伝的に均一な個体を実験に使用できる。現在までに全世界で確立されたマウスの系統は 1 万系統ともいわれる。動物実験に頻用される代表的な近交系マウスの系統を以下に示す。

BALB/c、C3H、C57BL/6、DBA、DD、NZB、NZW

② ラット

ラットはマウスに次いで使用数の多い実験動物である。系統はマウスに比べはるかに少ない。ラットはマウスに比べて大きく（成熟体重 200～500 g）、臓器や血液の採取、また外科手術がマウスより容易である。マウスと同様にラットも遺伝的特性が異なる多くの系統が作出され、それらは近交系が確立されており、遺伝的に均一な個体を実験に使用できる。動物実験に頻用される代表的な近交系ラットの系統を以下に示す。

Wistar、Sprague-Dawley (SD)、Fischer344 (F344)、Long-Evans、Lewis、Donryu

4. 近交系動物

実験動物の系統の中で近交系動物は実験動物として頻用されている。近交系は近親交配である兄妹交配を 20 世代以上継続して行うことにより確立された系統である。同じ近交系内の動物は個体間に遺伝的な相違はほとんどなく、動物個体間の遺伝的差異（個体差）が実験結果に影響することはないと考えられるため、近交系動物は優れた実験動物である。

5. 疾患モデル動物

疾患モデル動物とは、ヒト疾患の病態・病理の解析や予防・治療法の開発に利用される、病的形質を有する動物である。疾患モデル動物には、観察や探索により得られた疾患を自然発症する疾患モデル動物（自然発症疾患モデル動物）、手術や薬物投与により作出された疾患モデル動物（実験的発症疾患モデル動物）、発生工学的的手法により作成された疾患モデル動物および遺伝子工学的

手法すなわちトランスジェニックや遺伝子ノックアウトなどの遺伝子改変技術により作出された疾患モデル動物（遺伝子改変疾患モデル動物）がある（表1）。

表1 疾患モデル動物の分類

- a. 自然発症疾患モデル動物
 - b. 実験的発症疾患モデル動物
 - c. 遺伝子改変疾患モデル動物
-

（文献1、2をもとに作成）

5-1 自然発症疾患モデル動物

特定の疾患を自然に発症する動物を選択交配することにより系統化された動物である。発症の原因遺伝子やその変異が解明され発症メカニズムが解明されたモデル動物も多い。マウスでは1000以上の自然発症モデル動物の系統が存在する。自然発症モデル動物の症状をそのままヒトの特定疾患に当てはめるには困難も多いが、ヒト疾患と同様な遺伝的背景を有し、類似した症状を自然発症する動物の存在はヒト疾患の病態・病理の解析や予防・治療法の開発において極めて有用である。

研究に用いられている自然発症疾患モデル動物の例として、某国内実験動物ブリーダーが取り扱っているモデル動物（マウスおよびラットのみ挙げた）を以下に挙げる（文献4）。これら以外の自然発症疾患モデル動物も数多く存在し、研究に用いられている。

疾患モデルマウス

- 糖尿病モデル
- 糖尿病・肥満モデル
- 肥満モデル
- 老化促進モデル
- 高脂血症モデル
- アトピー性皮膚炎モデル
- 肥満細胞欠損モデル
- 自己免疫疾患モデル
- 紫斑症モデル
- 免疫不全白内障モデル
- IgA腎症モデル
- ヘアレスモデル

疾患モデルラット

- 糖尿病モデル
- 糖尿病・肥満モデル

- 肥満モデル
- 高血圧モデル
- 非アルコール性脂肪肝疾患モデル
- 大腸癌易発性モデル
- ヘアレスモデル

自然発症の疾患モデル動物として最も頻用されてきた動物のひとつに、上記一覧にもある高血圧モデルラットの SHR (spontaneously hypertensive rat、高血圧自然発症ラット)がある。これは日本人によって確立された自然発症疾患モデル動物で、一般の動物実験に広く使用されていた Wistar Kyoto 系ラットの中から血圧の高い動物を選択して交配を続け、高血圧を自然発症する動物として 1963 年に SHR (高血圧自然発症ラット) と命名され確立された高血圧症モデル動物である。本態性高血圧症の病態・病理の解析や予防・治療法の開発に多大な貢献をした動物である。さらに SHR をもとにして SHRSP (stroke-prone spontaneously hypertensive rat、脳卒中易発症 SHR) など様々な循環器疾患を自然発症する疾患モデル動物が作出され (図 1)、循環器疾患の病態・病理の解析や予防・治療法の開発に貢献してきた。

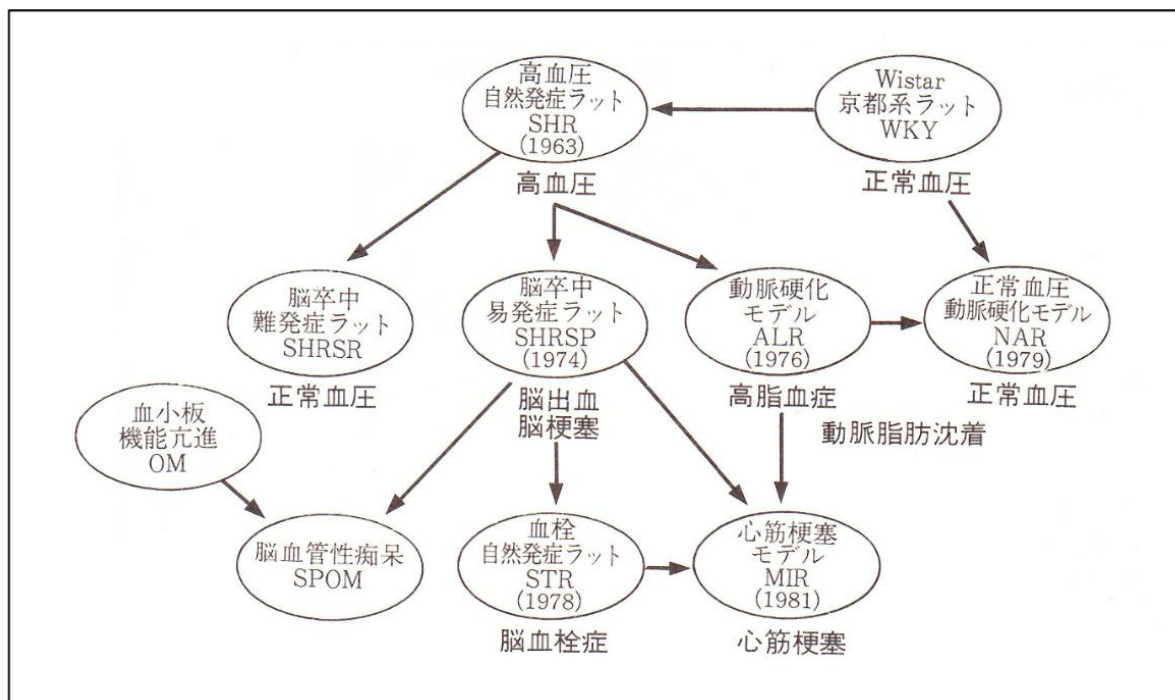


図 1 循環器疾患のモデル動物 (文献 3 より引用)

著者はこれまでに自然発症の疾患モデル動物として、上記 SHR、高脂血症モデルラット (HLR、自然発症高脂血症ラット)、糖尿病モデルマウス等を使用してきた。本稿で紹介する小人症モデル動物の CCI ラットは著者らが見出し、系統を確立した自然発症の疾患モデル動物である。

5-2 実験的発症疾患モデル動物

古くから研究に利用されてきた疾患モデル動物である。実験的発症疾患モデル動物の作成法とモデル動物例を表2に示した。

	作成法	疾患モデル動物例
①	細菌やウイルスなどの病原体の感染による発症	サル/ヒト免疫不全ウイルス (SHIV) をアカゲザルに感染させることによるヒト後天性免疫不全症候群 (AIDS) モデル動物
②	薬物や化合物を投与することによる発症	ストレプトゾトシンをマウスやラットに投与することによる糖尿病モデル動物 (膵臓ランゲルハンス島 B 細胞の破壊による。)
③	切除、結紮などの外科的処置を加えることによる発症	ラット左腎動脈にクリップを装着した2腎1クリップ高血圧ラット (腎血管性高血圧モデル動物) マウスやラットの卵巣を摘出することによる骨粗鬆症モデル動物
④	異種たんぱく質や自己抗原を投与することによる発症	結核死菌をラット足蹠皮内に投与することによる関節リウマチモデル動物

表2 自然発症疾患モデル動物の作成方法 (文献1をもとに作成)

5-3 遺伝子改変疾患モデル動物

遺伝子改変とは、動物の体内に人間や他の動物の遺伝子を導入する (トランスジェニック)、または遺伝子を破壊する (ノックアウト) 操作である。作出された動物は遺伝子組換え動物として取り扱われる。疾患の発症には遺伝的要因と環境要因があるが、遺伝的要因が大きい疾患で、特定の遺伝子の変異が原因で発症しているものについては、人為的に遺伝子変異を導入した遺伝子組換え動物が疾患の病態・病理の解析や予防・治療法の開発に有用となる。

近年は新しい遺伝子改変技術であるゲノム編集技術によって疾患モデル動物が作出されている。さらに、遺伝子改変技術を応用して作成される iPS 細胞 (人工多能性幹細胞) を利用した疾患モデル動物の作出も行われている。

6. CCI ラット (軟骨石灰化不全ラット)

6-1 CCI ラットの由来

四肢や尾、体長の短縮などの骨格異常を伴う小人症を呈するラットが、著者が以前所属していた聖マリアンナ医科大学大学院・実験動物飼育管理研究施設で維持していた Sprague-Dawley ラットのコロニーに出現した。発生頻度から、この小人症は遺伝子突然変異によるものと思われたので、このラットを繁殖させるとともに特性について調べ、ヒト疾患モデルとして応用で

きる可能性について検討を進めた。



図2 CCIラット
(8週齢 雄)

上：正常ラット
下：CCIラット

小人症を発現する子孫を生じさせた1匹の雄と1匹の雌を選び出し、このペアを交配させることで繁殖を開始した。この矮小性を有するコロニー中で交配させて生じた小人症新生仔のいる同腹仔の中での小人症の出現率は25.8%であり、この小人症は常染色体劣性遺伝であることが示唆された。この小人症ラットの体重は、3週齢ですでに正常ラットよりも少なく、加齢と共にその差が大きくなった。12週齢で、雄の本小人症ラットと雌の本小人症ラットの体重は、正常ラットのそれぞれ40%と57%であった(図3)。

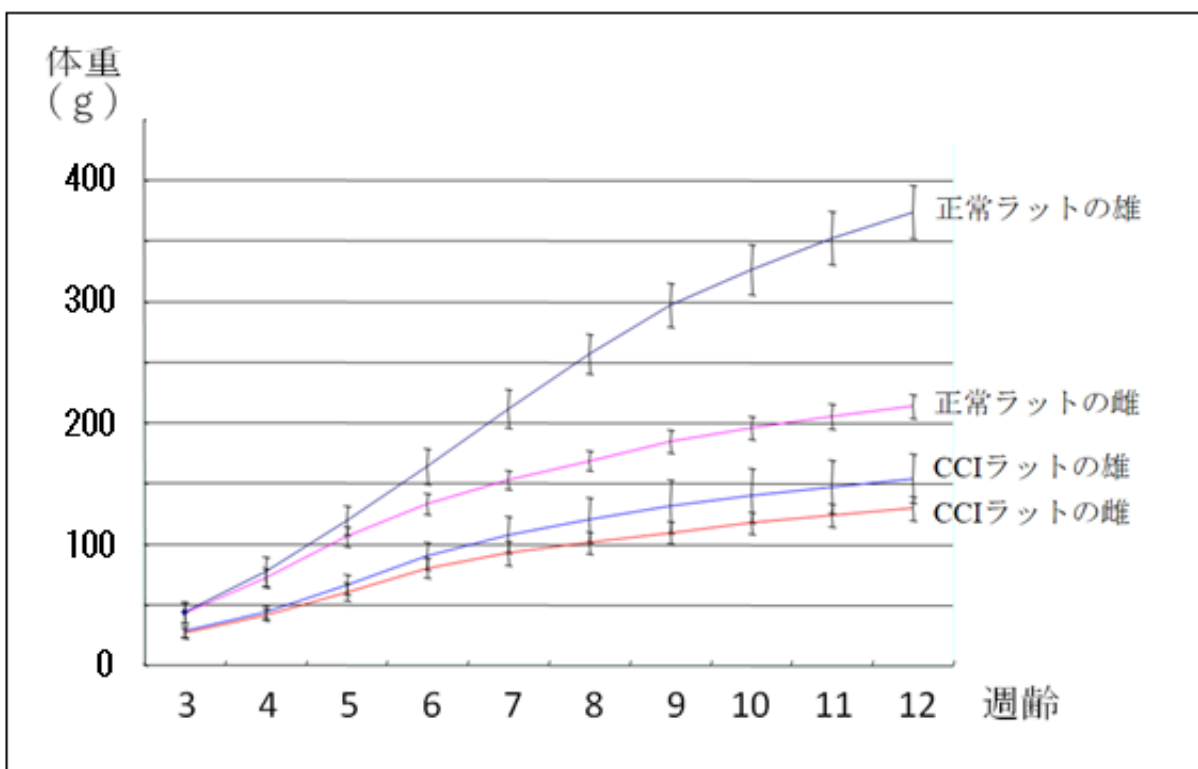


図3 CCIラットの体重(3~12週齢)

本小人症ラットの形態学的解析から、脛骨や大腿骨などの長骨の短縮と形成不全が認められ、軟骨内骨化に異常があることが示唆された。また免疫組織化学的解析から、本小人症ラットでは成長板の肥厚とともに軟骨石灰化に障害が生じていることが示唆された。長骨における軟骨の石灰化不全が本小人症ラットの第一の特徴と考えられたことから、本小人症ラットは **cartilage calcification insufficient (CCI) rat** (CCI ラット、軟骨石灰化不全ラット) と名付けられた。

6-2 CCI ラットの形態学的特徴

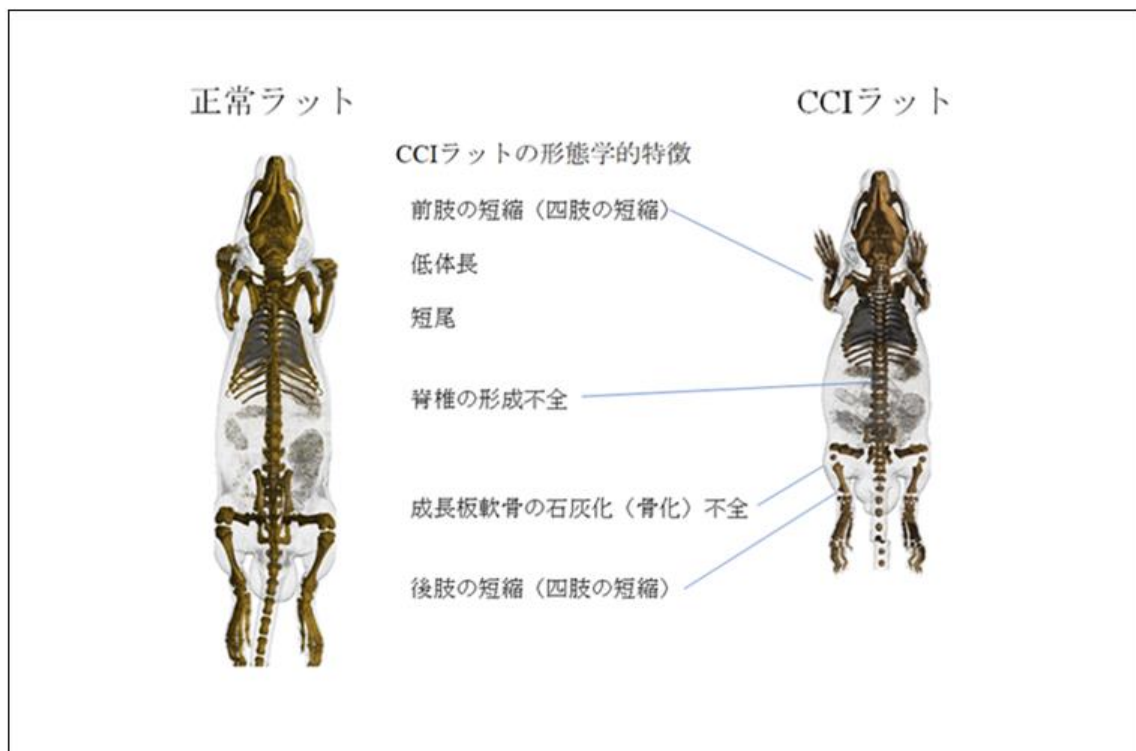


図4 CCI ラットの CT 画像 (4 週齢の雄、腹側からの画像、文献 7 より改変)

図 4 に CCI ラット全身の CT 画像を、図 5 に後肢軟 X 線像を示した。CCI ラットは低体長と短尾であり、さらに四肢の短縮がみられ、四肢短縮型の小人症を呈する。CCI ラットの成長板軟骨には肥厚と石灰化の不全 (骨化の不全) がみられ (図 5、図 6)、これが四肢短縮の原因と考えられる。また脊椎の形成不全もみられる (図 4)。CCI ラットでは軟骨内骨化によって形成される骨形成が抑制されていると考えられる。

ヒトでの四肢短縮型小人症には、主なものに軟骨無形成症と軟骨低形成症がある。軟骨無形成症は四肢短縮型小人症を呈する骨系統疾患の代表で、およそ 2 万出生に 1 人の割合で発生するが有効な治療法はない。成人身長は男性で約 130cm、女性で約 125cm と低く、変形性関節症を発症して歩行障害を生じることがある。軟骨低形成症は軟骨無形成症に似た形態を示すが、程度は軽く正常に近いものもある。ヒトの四肢短縮型小人症は主に、重症の軟骨無形成症と、症状が様々な程度を示す軟骨低形成症がある。



図5 CCIラット後肢の軟X線像（12週齢 雄、文献6より改変）

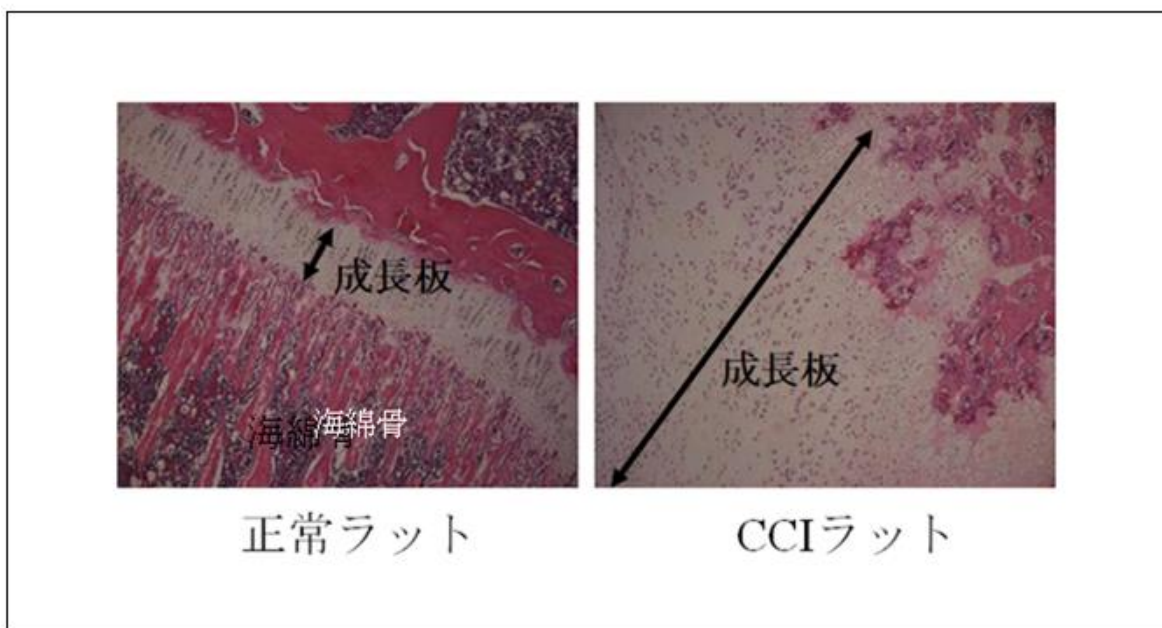


図6 ラット大腿骨骨端部（12週齢 雄、文献7より改変）

6-3 CCI ラットの軟骨石灰化不全と骨形成抑制の発症機序

図7にこれまでの解析から考えられた CCI ラットの軟骨石灰化不全と骨形成抑制の発症機序を示した。

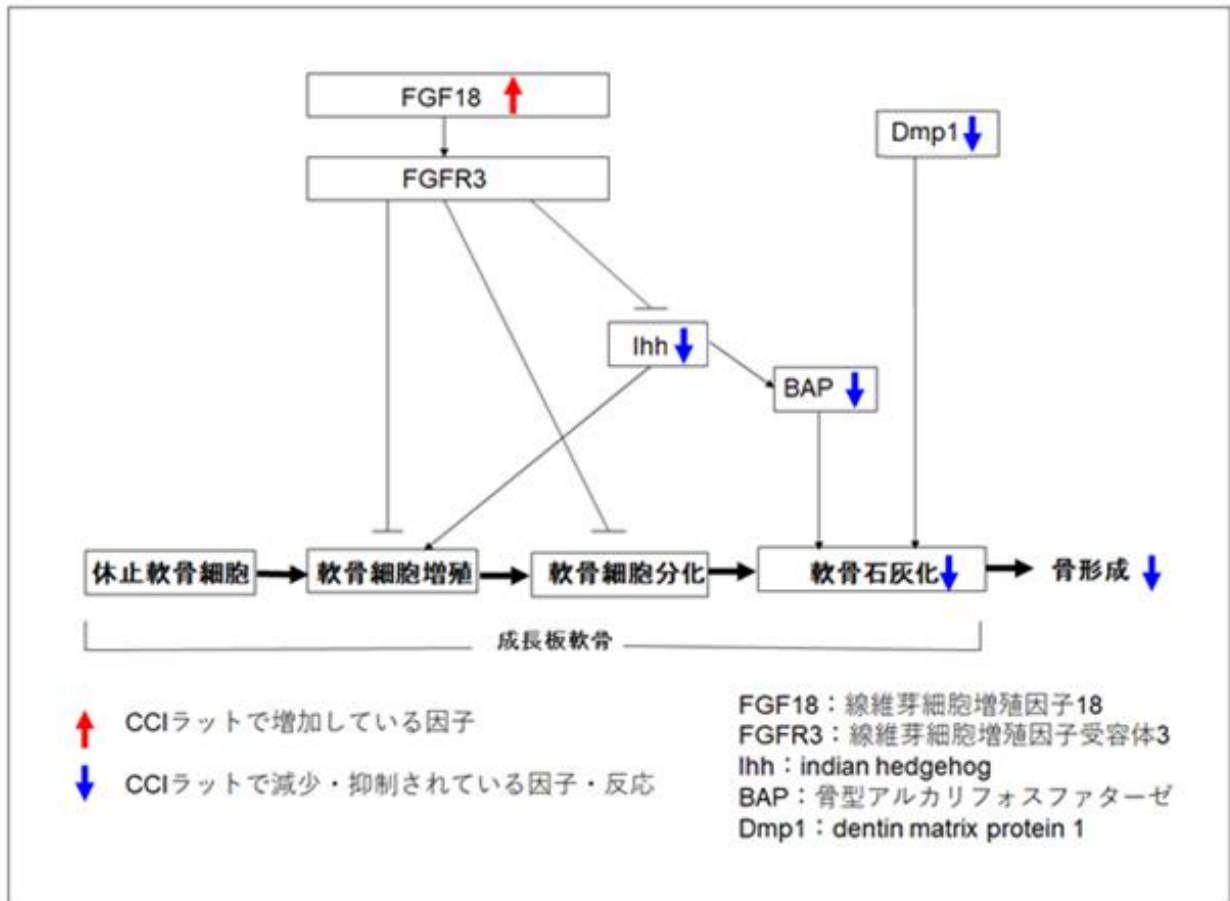


図7 CCI ラット軟骨石灰化不全と骨形成抑制の発症機序

ヒト軟骨無形成症と軟骨低形成症は、線維芽細胞増殖因子 (FGF) の受容体である線維芽細胞増殖因子受容体 3 (FGFR3) の遺伝子の点変異が原因となっている。軟骨低形成症ではこの変異の見られない場合もある。この FGFR3 の遺伝子変異は FGF 作用を亢進させて軟骨の骨化を抑制 (骨形成を抑制) すると考えられている (文献 5)。CCI ラットの遺伝子解析から CCI ラットにおいては FGFR3 の遺伝子変異はなかった (文献 7)。一方で、FGFR3 のリガンドである FGF18 の成長板軟骨における遺伝子発現が CCI ラットでは増加しており、CCI ラットはヒト軟骨無形成症や軟骨低形成症と同様に、FGF 作用が亢進していると考えられる。CCI ラットにおいてもヒト軟骨無形成症と軟骨低形成症と同様に、FGF 作用の亢進が軟骨の骨化を抑制 (骨形成を抑制) し、これが CCI ラットの四肢短縮をとまなう小人症の発症原因と類推されている。

今後、CCI ラットの特徴を形態学的、生理学的、生化学的および遺伝学的にさらに検討し、ヒト疾患のモデル動物としての有用性を明らかにしていきたい。

さらに、CCI ラットの軟骨代謝や骨代謝研究への応用についてもその有用性を明らかにして

いきたい。

7. おわりに

動物実験は、生命科学の研究に不可欠とされている。特にヒトの健康と福祉を追求する医学の研究においては、動物実験は必須の手段となっている。その中で、一般の動物とともに疾患モデル動物は、はかり知れない役割を果たし貢献してきた。著者らが見出した小人症モデル動物のCCI ラットもまた生命科学・医学において役割を持ち、貢献できるよう更に解析を進めていきたい。

引用・参考文献

- 1) 前島一淑、笠井憲雪 編 (1998) 『最新実験動物学』 朝倉書店、東京
- 2) 笠井憲雪、吉川泰弘、安居院高志 編 (2009) 『現代実験動物学』 朝倉書店、東京
- 3) 日本栄養・食料学会 監修、木村修一、家森幸男 編 (1994) 『疾患モデル動物 ー栄養学研究への応用ー』 建帛社、東京
- 4) 日本エスエルシー株式会社ホームページ (2020) <http://www.jslc.co.jp/animals/rat.php#rat-cat-03>
- 5) Liu Z., Xu J., Colvin J.S., et al. (2002) Coordination of chondrogenesis and osteogenesis by fibroblast growth factor 18. *Genes Development*, 64. 859-869
- 6) Tanaka, M., Watanabe, M. et al. (2015) Establishment of a novel dwarf rat strain: cartilage calcification insufficient (CCI) rats. *Experimental Animals*, 64, 121-128
- 7) 渡辺 実、田中政巳 他 (2020) 「新しい小人症モデル動物, CCIラットにおける骨化異常と遺伝子発現の解析」『聖マリアンナ医科大学雑誌』 48 pp. 15-30

研究業績(2020年1月～12月)

I. 学術論文

清水 誠

清水誠：SDGsの17のゴールに対する保育者を目指す学生たちの価値観。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：32 - 41.

清水誠：SDGsと関連づけた卒業研究ゼミの取組。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第45号：46 - 57.

中村敏男

中村敏男：子どもの言葉の育ちを支える保育者の育成 — 養成校におけるペープサートの授業を通して —。国際学院埼玉短期大学W紀要。2020；第45号：58 - 71.

馬場和久

馬場和久・大 雅世・福田 馨・内山佳名子：「栄養士・調理師養成課程におけるリメディアル教育について」。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：42 - 55.

田中政巳

渡辺 実，田中政巳ら：新しい小人症モデル動物，CCIラットにおける骨化異と遺伝子発現の解析。聖マリアンナ医科大学雑誌。2020；48：15 - 30.

古木竜太

古木竜太：「Zoom」と「Youtube」を活用した授業報告。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；45：72 - 85.

大雅世

馬場和久・大 雅世・福田 馨・内山佳名子：「栄養士・調理師養成課程におけるリメディアル教育について」。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：42 - 55.

古俣智江

塩原明世、古俣智江、長嶋ひかる、小木紗也香：調理実習が効力感に与える影響について。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：1 - 8.

古俣智江：栄養士養成課程短期大学生の調理学におけるノートテイキングに関する検討。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：56 - 65.

越智光輝

越智光輝：入学前教育における現状と課題 —入学前ピアノ学習・個人レッスンの受講状況及び学習成果—。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：9-21。

越智光輝：オンラインによるピアノレッスン実施に向けた対応 —学生のインターネット環境及びピアノ所有状況に着目して—。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第45号：1-10。

越智光輝：学生のピアノ学修を支援するための取り組み（1）—Zoomによるオンラインピアノレッスンの参加状況と指導内容—。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第45号：22-35。

越智光輝：学生のピアノ学修を支援するための取り組み（2）—Zoomによるオンラインピアノレッスンのトラブルとその対策—。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第45号：36-45。

古俣智江

塩原明世、古俣智江、長嶋ひかる、小木紗也香：調理実習が効力感に与える影響について。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：1-8。

古俣智江：栄養士養成課程短期大学生の調理学におけるノートテイキングに関する検討。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第44号：56-65。

高橋淳一郎

高橋淳一郎：高校生における登校回避感情に対する自己受容と進路不決断の影響の検討。日本文理大学商経学会誌。2021；38(4)：61-71。

本多 舞

本多舞：領域「環境」におけるサイエンス・プロセス・スキルの可能性—国際バカロレアで重視される資質・能力との比較を通して—。国際学院埼玉短期大学紀要。2020；第44号：22-31。

本多舞：コロナ禍での「教育原理」におけるアクティブ・ラーニングの実践。国際学院埼玉短期大学紀要。2020；第45号：11-21。

本多舞：「情報教育」。教職課程3月号。協同出版，東京，2020;21-23。

大野琴絵

大野琴絵：造形デザインゼミ SDGs への取り組みについて。国際学院埼玉短期大学研究紀要。2020；第45号：86-96。

加藤隆芳

加藤隆芳：NIE を通じて育みたい力の考察—日本 NIE 学会会員への質問紙調査より—。日本

NIE 学会誌. 2020 ; 15 : 21 - 30. 【査読付】

加藤隆芳：令和元年度消費者教育フェスタ in 香川 社会教育分野から考える「若年者の消費者教育」へのアプローチ 平成 31 年度『若者の消費者教育推進に関する集中強化プラン』における若年者の消費者教育推進のための実証的調査研究 「肢体不自由児の自立と社会参加への力を育む消費者教育に関する研究」. 文部科学省. 香川. 2020.

福田馨

馬場和久、大雅世、福田馨、内山佳名子：栄養士・調理師養成学科におけるリメディアル教育について. 国際学院埼玉短期大学研究紀要. 2020 ; 第 44 号 : 42 - 55

田中佑季

田中佑季、大和田浩子、田中進：二重エネルギーX線吸収法を用いた身体障がい者の男性における骨密度の横断的検討. 日本家政学会誌. 2020 ; 71 : 437-444.

II. 著書

清水 誠

清水誠他著：新編 新しい科学 1, 2, 3. 東京書籍, 東京, 2020, 新しい科学 1. 1-270 頁, 新しい科学 2. 1-286 頁, 新しい科学 3. 1-314 頁, 共同執筆によるため取り出し不能
清水誠他著：さいたま市史自然編ー植物ーさいたま市. 2020. 1-292 頁. 監修ならびに「はじめに・田島ケ原サクラソウ・市内の代表的な緑地等」執筆

加藤隆芳

筑波大学特別支援教育連携推進グループ（編）：授業を豊かにする筑波大附属特別支援学校の教材知恵袋・教科編. ジアース教育新社. 東京. 2020 ; 8-9. 22-23. 52-53. 96-97.

III. 講演ー学会発表

高橋淳一郎

高橋淳一郎：すぐにできるエンカウンター. 大分県学校心理士会定例研修会（大分市）, 2021.

加藤隆芳

小林博信、加藤隆芳、下山直人、田丸秋穂：肢体不自由児の自立と社会参加への力を育む消費者教育に関する研究 Iーキャリア発達を踏まえた指導の在り方の検討ー. 日本特殊教育学会第 58 回大会（福岡）, 2020.

加藤隆芳：特別支援学校（肢体不自由）高等部の進路選択における条件や課題に関する考察ー

特別支援学校（肢体不自由）高等部卒業生 172 名の実績よりー．日本特殊教育学会第 58 回大会（福岡）．2020.

加藤隆芳：肢体不自由児の自立と社会参加に関して．筑波大学特別支援教育連携推進グループ現職現職教員研修会（東京）．2020.

加藤隆芳：肢体不自由とは．筑波大学附属駒場中・高等学校課題研究（東京）．2020.

田中佑季

【ポスター】田中佑季、金谷由希、綾部園子、大和田浩子：男性の身体障がい者の体組成，一般社団法人日本家政学会 第 72 回大会（高崎）．2020（コロナウィルスによる学会の中止により、要旨集への掲載による発表）

IV. その他

大野博之

大野博之：一般社団法人全国栄養士養成施設協会 全栄施協月報第 718 号に寄稿「COVID-19 と栄養士」2020.7

中村敏男

中村敏男：「北本市いじめ問題調査委員会」（条例設置の当該委員会委員として、「いじめ重大事案」に関する調査に当たる。）北本市．北本市．2010

大 雅世

大雅世：『全国調理師養成施設協会共催 食育教室』オンライン公開講座．国際学院埼玉短期大学．2020.

古俣智江

大雅世、古俣智江：箸の持ち方とマナーを見直して、クイズで楽しく「食」について学ぼう！（食育教室 2020（オンライン講座））．全国調理師養成施設協会・国際学院埼玉短期大学共催．埼玉．2020

加藤隆芳

加藤隆芳：令和元年度消費者教育フェスタ in 香川 社会教育分野から考える「若年者の消費者教育」へのアプローチ 平成 31 年度『若者の消費者教育推進に関する集中強化プラン』における若年者の消費者教育推進のための実証的調査研究 「肢体不自由児の自立と社会参加への力を育む消費者教育に関する研究」．文部科学省．香川．2020.

V. 叙勲・表彰・受賞・その他

大野博之

大野博之：短期大学教育 70 周年記念短期大学教育功労者文部科学大臣表彰、2020.11

武内道郎

武内道郎：文部科学大臣表彰、2020.1

編集委員

清水 誠

中村 敏男

田中 政巳

加藤 隆芳

清水 真二

国際学院埼玉短期大学研究紀要 第46号

令和3年3月31日発行

編集 国際学院埼玉短期大学研究推進委員会

発行者 大野 博之

発行所 学校法人 国際学院 国際学院埼玉短期大学

〒330-8548 埼玉県さいたま市大宮区吉敷町2-5

電話 048-641-7468 Fax 048-641-7432

<https://sc.kgef.ac.jp/>

**BULLETIN
OF
KOKUSAI GAKUIN SAITAMA COLLEGE
No.46, March 2021**

CONTENTS

Research Report

- To 372 Childcare Facilities on Music Expression Activities:
Examination of Issues Related to Playing the Piano by the answer from 39 Kindergartens,
61 Nursery Centers, and 16 Certified Children's Schools Survey
..... Mitsuteru OCHI.....1
- What did Students Learn through Teaching Practice
on Countermeasures against COVID-19 in Kindergarten ?
..... Yukari SANNO.....16
- A Consideration of "Quality to Develop by The End of The Early Childhood"
: From a Comparison The Questionnaire Survey in "Childcare Principles"
..... Mai HONDA..... 28
- Examination of Issues Related to Playing the Piano by the answer from 39 Kindergartens,
61 Nursery Centers, and 16 Certified Children's Schools Survey
..... Kazue MAKINO.....37
- Practical Research of Body ExpressiA Case of Activities in School Festival on Activities:
..... Ryuta FURUKI.....49

Research Data

- An Awareness Survey of the Elementary School Lunch during
the COVID-19 Pandemic
..... Kazuhisa BABA • Masayo DAI • Chie KOMATA.....65
- A Report on Practice Outside the School in Food Service Management on-Site Training
in Food Service in the COVID-19 Pandemic
..... Chie KOMATA • Kazuhisa BABA.....76
- Survey on Off-campus Training of Cook Training Course
..... Tatsuya TANAKA..... 86

Overview

- Roles and Contributions of Animal Models for Human Diseases:
Taking the CCI Rat as an Example
..... Masami TANAKA..... 95
-